

加藤敏治 遺稿集

生の記念



九月七日葉書受取りました。六日から市会開会。昨日で一般庶用が終り息ついたところですが。九日興党議員の角問に答へて市長五選出場を表明。然し定勤は十月中旬末からでせう。御陰で現狂のところ順調です。食欲も入院前よりあります。たしか刺身も飯のお菜であるのが残念。役所に出る以外は、友人とベッドで安静にしており、土曜日も自室に歸らず一日も早い回復を祈つて養生に勉めていきます。山田、小柳兄にわざわざ文をコピーして御連絡いたさき感謝します。次ぎくに見舞状をいたさき力づけられております。

かへし（定次、山田、小柳兄に）

病む我をなぐさめたまふ友の文つづき、承るなり秋風のりて
み文またみ歌をよめはみ友らと相見語らふ思ひますうつしく
友の歌の高き調へのつたはりて胸の奥がゆ力湧ききくも
思はざる病に早くきずきし七きみ友らの守りなるらむ
とくいえて力の限りつとめむと祈る思ひに病養生ふ
おちこちに別れ之住める心知る友ら思ふは思ひ心つきせす
夕暮れの秋日うけつつうろこ雲はつかいうつろふ友性む方へ
三ヶ月は入院することになるでせう。貴兄も御自愛の程、山田君達にも
礼状と出します。

はしがき

（社）国民文化研究会・常務理事
九州女子大学 教授 山田 輝彦

元号が平成と改まった年の春、花の梢がやうやく葉桜に変わってゆくころ、加藤敏治君は、崩御された先帝陛下の後を追ふやうに、七十年の生涯を閉じた。それから既に三年の歳月が流れてゐる。彼がその生涯に残した書簡、日記、短歌、長詩、亡き友への追悼文、それらのおびただしい遺稿は、そのまゝ、「昭和」といふ激動の時代のなまなましい証言として、われわれの前にある。

青春の時代における思想の覚醒、それは宗教的入信にも似て一瞬の間に成就されるものであるらしい。彼の人生におけるそれは、昭和十四年、山口高商時代に体験した、東大文化科学研究会主催の、神奈川県原当麻はらたいまの合宿であった。後年、彼はその地を「僕の誕生の地、あゝ魂の故郷」と言ひ、「祖国日本に対する信」を得しめられた感動を熱い思ひで回想してゐる。二十歳の日のこの初心の感動が以後五十年、悲喜動乱の生を一貫して彼を支へたのであった。

昭和十四年から、昭和十八年十二月の学徒出陣の時まで、彼は山口高商、九州帝国大学経済学部部の学生として、もっぱら日本学生協会の大学高専学風の改革運動の先頭に立って、獅子奮迅の活動を展開した。彼にとって、思想運動とは「志」をつなぐ友を作ることであった。席の暖まる

いとまもなく、彼の姿は山口に、福岡に、佐賀に、熊本に、変幻自在に出没した。「交流」こそが、当時の彼の生を支へてゐたやうに思はれる。この学生時代に、彼にとつて忘れがたい思ひを刻印された一つの事件は、旧制佐高同信会以来の友で、当時東大文学部に在学中だった刎頭の友、江頭俊一君との死別であつた。江頭君は、学徒出陣の半年前、九大病院で喉頭結核で病死した。「江頭の死は戦死だ」とは、彼が口ぐせのやうに繰り返してゐた言葉であつた。満洲に入隊した彼が、内地の任地に赴任するため博多に上陸した時、福岡の夜景を見て、江頭君を追悼した三十二首の挽歌が『従軍歌集』の中に収められてゐる。「同信の友」に対する、かくも哀切を極めた感情は、われわれの中でも稀有なものではなからうか。

九大在学中の彼は、経済学部講義よりも、当時古代文学研究の泰斗であり、『吉野の鮎』の名著で知られた高木市之助教授の万葉や新葉集の講読に熱中してゐた。高木教授も部外の学生の求道の情熱に、いたく感動した様子で、愛弟子のやうに接してをられた。後年和多山智子さんと結婚式に媒酌人となられたのは、この縁に依る。加藤君の端倪すべからざる一面を物語る逸話であらうか。

従軍中の彼も、席暖まる暇なき軍隊生活であつたらしい。満洲に入隊した彼は、ハルビン、旅順、大連とつぎつぎに転属し、樺太の敷香にも行つてゐる。終戦の年の五月に、新京の経理学校

を卒業し、終戦時は奇しくも、山口に駐留して、主計少尉として、見事に終戦処理の任務を果してゐる。その匆忙の間に、溢れるやうな情感のこもった、おびただし短歌を作つてゐる。天性の詩人性に加へて、高木さん仕込みの万葉の素養があるのだから、単なる素人の歌ではない。六つで父に死別した彼が、母堂に寄せる思ひの深さは、さることながら、酷寒の満洲の地にも春が来れば若草が萌え出す喜びを、空につらなる雁の列を見ては禁じ得ぬ望郷の思ひなどをうたひ上げた連作のかずかずは、学徒兵の真情を伝へて余すところがない。特に、彼が冗談に「弥勒菩薩」と呼んでゐた幻の少女への二十四首の「相聞歌」は、祖国愛と相聞の情が交響して、『従軍歌集』中の圧巻である。

昭和二十一年といふ年は、彼にとつて、人生の岐路ともなるべき年であつた。依るべき価値体系は無残に崩壊した。智子さんとの結婚によつて、一家を支へる宿命をになつた彼は、関西の友人と事業を興すために、八代の地に安住してはゐられなかつた。あの「たたかひの人」加藤君に、深い挫折感が襲つたのはこの年であつたと思はれる。「夜汽車」といふ長詩の一節には、こんな言葉が綴られてゐる。

「こし方を 今の世を思ふ 若き日の夢か 無智の勇氣か 感情の流転か 過去の体験はたゞ紙にゑがきし 人生の模型に過ぎざりしか」。また、次のやうな歌もある。

み空ゆく雲ともしもよあはたゞし世によるほひて生くる身思へば

この年七月十六日付、小柳陽太郎氏宛書簡には「寺尾の死以来、百武の帰還は僕らの最大の希望であった。然し今はそれも失ひ、更に僕らの師表とも仰いでゐた田所大兄を失ふとは。涙も出ぬ。僕は今嵐の中に掲げられた我らの旗が倒れ去つた事を感じる。一切の希望を失ひ、確信を失つて廣野をさまよふ人の心が今痛切に偲ばれるのである」と書かれてゐる。「僕らの学生運動は寺尾の死を以て完結した」といふ言葉も見える。彼の苦悩の深さを垣間見る思ひのする言葉である。彼が實質的に「家庭生活」を始めたのは二十二年からである。やがて和多山家の家業である米穀商の中心として、戦後の混乱期を生き抜くことになる。さうして、かういふ社会的、思想的試練の後、昭和三十一年、同志を結集して「国民文化研究会」の発足となるのである。地元八代が、彼の見識や人柄を、そのまゝ、放置する筈はない。やがて八代市教育委員、八代市教育長を経て、昭和四十二年から、五十八年まで連続四期助役を勤めることになる。この頃が、彼の生涯の中で、相対的に最も安定した時代であつたのではなからうか。しかし、地方都市の助役といふ仕事は、また煩瑣きはまらない俗事の遂行を、つぎつぎに彼に強ひたに違ひない。過度の純粹さと現実との間には不断の軋轢があつたことは容易に想像できる。それは彼の心の深層に深い亀裂を生ぜしめたのではなからうか。

昭和五十七年、慢性気管支炎等の呼吸器の障害で入院してから、晩年の七年間は、病氣との戦ひだった。それは、傷いた心身を抱へての凄愴苛烈な戦ひの日々だった。あれほど「友」との交流に生涯をかけた人が、苦悩の中で呻吟してゐるのに、われわれはただ傍観して「祈る」しかなかったのである。その苦悩は、数多くの「病中吟」のなかに詠まれてゐる。孤独な病院生活の中で、彼の胸を去来したものは、恐らく老い給ひし母堂、看病にやつれた愛妻、そして、心を呪縛してやまない、得体の知れぬ不安感だったのではなからうか。山口時代以来の心知る友、宝辺正久氏が見舞ったのは死の前日だったが、彼の唇は動くものの、言葉にはならず、たゞ眼底から涙が溢れてゐたといふ。余りにも強烈な彼の責任感、生涯を支へてゐた弓の弦のやうに強い心が、その緊張の限界で音を立てて切れたのだ。

思へば、抜群の記憶力と、溢れるやうな表現力に支へられた彼の遺文は、われわれに息づまるやうな「昭和」の悲劇的精神を伝へてくれる。国民文化研究会の運動を貫く、最も純粹だった人の、魂のひびきを伝へてくれる。われわれは今にして、三井甲之先生の「物みな枯れて、残るは地熱、祖国のいのち」といふ一句を思ひ出す。幸ひにして、遺族の方々の上にも、やうやく平安な時が訪れてゐると聞く。在天の靈、今は瞑せよと祈りつゝ、拙いはしがきの言葉とする。

(平成四年二月二十五日記)

目次

はしがき

遺歌・遺文

(一)道を求めて

写真帖『生の記念』から……………	3
学生時代の詩歌（昭和十五年～十八年）……………	33
『従軍歌集』抄（昭和十九年）……………	52
戦ひより還りて（昭和二十一年～二十六年）……………	79
球磨のほとり（昭和二十八年～五十八年）……………	102
『病中病後の歌』附・その後（昭和五十八年～六十二年）……………	142

□友を憶ふ

一條浩通君……………183

百武禮之君……………216

江頭俊一君……………226

寺尾博之君……………237

和多山儀平君……………261

瀬上安正さん……………276

略歴・弔辞・弔歌……………289

あとがき

題字 小田村寅二郎

遺歌・遺文

(一) 道を求めて

写真帖『生の記念』から

ここに収録した写真帖「生の記念」は、出征を目前に控へた昭和十九年一月、岡山に帰郷してゐた故人が、生還を期せずと覚悟して、手許にある数多くの写真を大学ノートに貼付、それぞれについての感想や歌を書き残したものである。（従つて特別の説明のない限り、歌も文章と同じくすべて編集の時点における出征直前の感懐である） なほこの写真帖は岡山が大空襲を受けた折、母君が家の前の防空壕に投げ入れて避難されたため奇蹟的に残つたものである。その後原本は綴ち糸も切れてしまつてゐたので、昭和五十三年、文章等は新たにコピーして整理、現在、立派なアルバムとして残つてゐる。この中には当時本人から出された和多山家あての葉書も収められてゐるが、これはその折に貼り添へられたものであらう。ここでは写真の傍に書き込まれた文章と歌、及び本人の葉書の中から二十九篇を抜粋、収録した。文頭の括弧内の説明は故人の書き込みを基に編者が附したものである。（編者記）

(1) 昭和十四年七月、山口高商一年、神奈川はらたいま県原当麻における

「全国学生夏季合同訓練合宿」、参加者全員写真)

「新しき時代は来らず。そは青年の心情に内在す」それが合宿のスローガンだった。この合宿に参加したことによって僕の運命はきまったのである。

祖国日本に対する信と、そして現状に対する改革意志をこの合宿の宗教的雰囲気の中に与へられたのである。

僕の誕生の地、あゝ魂の故郷、原当麻よ。

僕はこの合宿に於て初めてまことの師を、まことの友を見出し得たのである。まことの人生がこの合宿より始つたのである。

この合宿の思ひ出は淡い薄明の中にある。されど最後の日に友と誓ひあつた言葉は生くる限りは僕の胸に残つてゐる。

「合宿は終つたのではない。今日から本当の合宿が始まつたのである」とは田所兄の訣別の辞であつた。この合宿で始めて三井先生を知つた。その時僕らに下さつた詩——

友よこれからだ

友よ、これからだ。まだいまのまゝ、でまにあつてをるが やがて、これではまにあふまい。その時だ、友よ きみらの世に出るのは。否、きみらはすでに世に出てをるのである。きみらはいまきみらの進みつゝある道を ますぐに進みゆくべきである。

(2) (昭和十四年九月、山口高商一年、山口市古熊、善生寺における合宿、参加九人)

原当麻の合宿後直にこの合宿を計画した。僕は如何に前途に苦難が満ちしものか、又それが故に如何に光明と希望に満ちしものかを痛感した。

それよりただ求道の一路を僕はたどつて来たのである。

この合宿後、山口高商「斯道会」が結成された。顧問は白尾陽光（静二）先生、幹事は林正男兄（三年）、東京から安田（三浦）貞蔵先輩が参加された。

(3) (昭和十四年十月、山口高商一年、山口市野田神社合宿の写真)

斯道会第一回の合宿であった。その時東京から南波惣一兄、吉田昇兄がわざわざ来られた。

「ゆらぐがなかにゆるがぬものを見出すのが信だ」と南波兄が言はれた。その一言が忘れられない。僕はその一言に精神生活が開かれたのである。

(4) (昭和十五年八月末、萩、松陰神社における地方別合宿で、松陰先生墓前での慰霊祭の写真。祭壇の前で拝礼してゐるのが小田村寅二郎先輩である。この合宿の指導は東大在学中の根岸正純兄が当った)

七月、信州菅平にて全国学生合同合宿が開催された。その時山口高商から十名くらゐ参加した。その合宿の写真は残念ながら無い。その合宿の感銘が如何に大であったか。それは学生々「活叢書中の「す、めこの道」なる感想集を見ればわかる。その中に僕の感想文が載つてゐる。

僕は、「す、むべき時をはかりてす、まずばあやふき道にいりもこそすれ」とおほせられし明治天皇の御製に全合宿の体験を統一せしめられつゝ、今こそす、むべき時なりと決意したのである。停止せんか、それは死あるのみ。」と書いたことを覚えてゐる。

この決意があらはれたのが、この地方別合宿であった。松陰先生の御墓の前で慰霊祭を行った。

神主が吹く笛の音が今も耳にのこつてゐる。祖国を守ることは如何に悲しきことか。忠臣の生涯は全く悲劇であつた。僕はこの合宿を忘れることは出来ない。この時から僕は松陰先生のみ心が直接感覚出来る様になつたのだ。

「七度びも生きかへりつ、夷をぞ拂はむ心我忘れめや」「神勅相違なければ正気重ねて発すべき時あり、」と言はれた先生のみ心を、又「討たれたる我をあはれと見む人は君をあがめて夷はらへよ」と言はれたみ心を継ぐべく決意したのである。

僕らは人に狂頑と云はれ、又人に知られず死んでゆくかも知れない。しかし僕らには不滅の信がある。それは「神勅相違なし」と信ずるからである。百年二百年の後かも知れぬ、僕らがかうして苦闘した志があらはれるのは。否、永遠に僕らの苦闘は報はれなくても良いのである。たゞ祖国日本が永久に存続され、陛下の大御稜威が全国民に、全世界に、あまねくいてりかゞやくならば。それで僕らは満足である。そのために僕らは七度も八度も生れかはりて、大君につかへまつらむと誓ふのである。人間の身体は滅びるかも知れぬ。しかしながら精神は不滅である。精神は精神から精神へ、人から人へと存続されるからである。僕らの志をつく友が必ずあらはれて来るであらう。一時はたとへ途絶えることがあらうとも。僕はかう確信せしめられるが故に、心軽らかに安じて戦場に立つことが出来るのである。

友らより友らにつたはりとこしへに絶ゆる日あらじ我らの信は

ねがはくば七度人とうまれきてつかへまつらむわが大君に

君が代は万代かけて栄ゆかむみ民ら生命をささげまつれば

君がため生命さ、げよ皇国すめくにに生れ来りしますらをのこは

かへらじと思ひ定めてた、かひのにはにいでゆくますらを我は

(5) (昭和十六年八月末、中国地方合同合宿、参加者全員十五名、松下村塾前)

過去を回想する思ひに、僕はこの世に生きる力を与へられてきた。しかし、その過去は、もう十年も前の遠い昔の様に思はれる。この合宿でも、どんな事をしたかはもう忘れてしまった。しかしながら、昨日の様に明瞭に思ひ浮べる事もある。夜、合宿所で、寝ながら聞いた菊が浜の波の音を今も忘れることは出来ぬ。萩城跡で慰霊祭を行ったことも忘れられぬ。萩城天守閣の高い城壁に、スローガン「国運の最後を賭する決戦の時迫る、青年よ、汝こそは興国の詩と哲学の創造者たれ」をかかけた。そのスローガンは比叡山合宿（註・その年の夏、行はれた全国学生合同合宿）から持って歸ったものであった。



松下村塾前（前列右から3人目・加藤敏治氏）

(6)（同右、同合宿会場萩市堀内町公会堂にて、最後の夜の記念撮影）

この夜は皆で萩の民謡「男なら」をならった。心づくしの魚に冷酒ではあったが、その日の思ひを忘れることは出来ない。

僕は、松陰先生の「東行前家大人に呈すの詩」を朗詠した。池上明兄が天野屋利兵衛の浪曲をやった事も忘れられない。

辿り来りし過去は苦しく悲しきものであった。されど友との交流はにぎはしく楽しきものであった。

心知る友と語れば心なごみながる、涙とどめかねつも
（甲之先生作）

(7) (昭和十六年十月十八日、十九日、熊本同信寮における九州中国連絡会議終了後、みかんと芋でコンパをした。その時の記念写真)

亡き友江頭兄、河崎兄のかすかなまひよ。今はうつしゑによつて面影をしぬぶよりほか、あひ見むすべはない。僕らは君らを失つた悲しみを忘れることは出来ない。生きる限りは！

されど「つながるは生命の姿」である。「生るるも みまかるも つながるために」あるのである。亡き友の生けるみたまは、祖国永久生命とともに我らの進軍のさきがけとなりて天がけりたまふのである。

亡き友のかなしきまひ今もなほ我が胸に生くありし日ごと

現し世のちぎりはみじかししかれども絶えむと思へや我らのむすびは

亡き友のみたまもろとも敵陣に突撃すべし剣しぬきて

亡き友の思ひこもりし剣太刀ふるひてはらはむ醜の醜草

大君のみいづかやくときを待ち天がけるらむ友のみたまは

天がける友のみたまよみ軍を守らせたまへと祈りつゝ、征く

(8) (昭和十六年か、佐高同信会の六人が酔っぱらって肩を組んでゐる。この写真は林清三兄宅——写真館・同信会の溜り場——にあったのをいただいて来たもの)

後で聞くと、この時は江頭兄が自分の剣道具を売って痛飲した時写したと云ふ。江頭は酒が好きであった。あいつと一緒に飲むと実に愉快になったものだ。にこやかにほゝゑむ江頭の顔、大きな体をゆすってうたをうたった姿を、僕はこの写真とむすびつけて忘れられない。君の名物の破れた帽子も、ただなつかしき悲しき思ひ出となつてしまった。

あ、亡き我が友江頭俊一兄。

(9) (昭和十六年十二月末、防府市正福寺における山口合同合宿、清水重夫、島田好衛両兄を東京より、佐賀から江頭俊一兄を迎へ十七名)

僕はこの合宿を亡き江頭兄と結びつけて忘れることが出来ない。この合宿以来僕と君との友情は一層固くなつて行つたのである。しかし最後のみとりをせねばならぬとは、夢にも思ひだにし

なかったのである。

君のたくましいからだ、意志をしめす鋭い目、あゝ君は僕にとって忘れがたい永遠の友である。丁度僕の卒業祝に酒が一升あった。十五夜の月をあふぎつゝ、君と一緒に、山上で冷酒をのんだことを僕は忘れぬ。かがり火にてらされし君のえまひよ。今も目にのこるに、あゝ君は世を去りまししか。

(10) (昭和十七年二月二十七日)三月三日、山口県^{だんどう}大道にて、中国九州合同合宿、浜辺で全員の写真)

大道は忘れることの出来ないところだ。

けふる入海、汀によせる白波、散らばる白貝、その一つ一つに思ひ出は残る。出征前にもう一度行きたいと思ったが果されさうもない。この写真を見てしぬぶのみである。

(11) (同右、大道合宿慰霊祭、砂浜に齋場、夜)

慰霊祭こそは我らの最大の式典である。僕らのこれからの一生は慰霊祭の一語につきる。亡き人の志をつぐことを誓ひまつるのが、そしてそのちかひをつらぬくことこそ唯一の慰霊祭である。亡き友のみたままつりを絶やしてはならぬ。その一念こそこれからの僕らの運動をささへてくれるのである。国のためにたふれし人のみたまをなくさめる道は唯一である。

その時僕は次の様なうたをつくったと思ふ。

五せきゆき五せきかへらぬいくさぶねしぬ

ぶ思ひにた、かはむ今

(12) (同右、十九名記念撮影、旅館二階座敷)

最後の夜僕らは泣いて誓った。死を以て祖国

大道の浜（前列中央・帽なし・加藤敏治氏）



を守らむと。その誓ひがこのうつしゑにこもつてゐる。

僕が一人で計画し、指導した合宿であつた。僕はたよりうべきは知識ではなく、辿り来し道をかへりみ思ふ自己の体験であることを、この合宿で痛感した。日本国民であるかぎり又青年であるかぎり、僕らは一つの体験をしつつあり、またせむとねがつてゐるのである。

(13) (昭和十七年三月十九日、九大の入学試験が終つて上京する車中より、熊本同信寮和多山儀平君に送つた葉書一枚)

「其の後御無沙汰しました。小生本日迄福岡にゐたので貴兄の御手紙に返事も出さず失礼しました。試験もすんで唯今上京の車中にある。今心はたゞ都の友らの上にはせつゝあります。友とまみえる喜びに身の疲労も忘れて上京しつゝあります。

合宿後友らよりつき／＼に便りがよせられその度に新しい決意をよびめさめしめられてゐる。今宵は美しい星空だ。窓よりあふぐ夜空には星がまたたいてゐる。自然に心をむける時に我等はやすらぎと、それにも増してはかり知れぬ不可思議の神意がかしこみただかれる。久遠の自然の中に生を享けし我等の生命はかりそめではないのだ。我々は生を痛感する時に死を実感する。

それは我々のはかなき生が永遠につながるむとする契機である。昨日ニュースで特別攻撃隊の九勇士の英姿と遺書を見て、我等の生の厳肅なる事実を実感し、身のふるへをとめる事が出来なかった。特に遺書の内に「君恩の万分の一にもむくゆる事なく死する身をはぢる」といふ一節は何たる悲壯ぞ。友よ、我等はこの勇士に対して顔むけが出来るだらうか。まだく我等の戦ひは不徹底である。安易である。いやそれにも増して国内の思想状態の悪化は何たる事であらうか。これを冒瀆と云はずして何といへるのであらうか。一切は我等の責任である。一人一人の責任である。この責任を果す迄は我等は断じて死なぬのだ。一切は戦によって解決されねばならぬ。今是一寸の妥協も一步の遅怠も許されないのだ。全力を以て戦ふのみ。

(14) (昭和十七年五月、大道にて連絡会議、佐賀、山口十六名)

連絡会議と云っても、たゞ僕らは集って友の顔を見れば良いのである。話さなくとも、顔を見合はすだけで友のえまひに友の心は感ぜられたのである。

かくの如きつどひが今迄日本青年の内にあったであらうか。このむすばれた心の威力が世にあらはれる時が必ず来るであらう。

(15) (昭和十七年六月、中国正大寮、後輩達二十一名)

新しき友がつき／＼に僕らのあとにつゞいて出てくる。名前も知らない友もある。しかしながら僕の後輩だ。僕らの戦死した後もこれらの友が志をついでくれるのである。

友よ、

友よとべば友は来りぬ。あ、我は世のほこりを捨て、祖国のいのちに帰依しまつらむ 友らとともに！

中国正大寮のこの一室、神棚の部屋には僕らの魂がこもつてゐる。僕らは毎日この部屋で御製を拜誦しまつり、又深更まで語りあつたのである。僕の山口時代の思ひ出は、この部屋を中心として寮生活に大半がこもつてゐる。我が留魂の地山口よ。こゝに共に生活せし心の友よ。

(16) (昭和十七年七月十二日、大学二年、中国正大寮松吉正資、松尾誠一、森田維佐男の三人の後輩の送別会に招かれて、大道の海に遊ぶ)

痛飲の後、といっても酒は少なかった。皆と一緒に海に入り一日遊べり。その時のにこやかなる姿、このうつしゑにのこれり。

再びはおとづるる日もなし白波の寄する浜辺をひたに恋へども

秋雨に霞む内海ながめつゝくみかはしけりうましき酒を

たまきはる命全ければなつかしき大道浦をまたかへり見む

かずくの思ひこもりし大道を我は忘れじいのちゆくとも

大道の浜辺に寄する白波のたゆることなく思ほゆるかも

(17) (桃山御陵参拝記念写真、十四名)

この写真も第何回目かの世界観大学の時に先輩加納祐五兄と一緒に桃山御陵に参拝した時の記念撮影である。

桃山御陵参拝（後列左端・加藤敏治氏）



桃山御陵に参拝したのもこれが最後になるかも知れぬ。出征前に一度行きたいと願ってはゐるけれども。

明治天皇の大御歌に僕らはまもられ導かれつゝ、今日迄たどり来たのである。これから後、僕らが戦場に立つても、ただ 大御心をあふぎまつりつつゆくのである。

しきしまの大和島根のあるかぎりたゆる日はなし我らの信は

(18) (昭和十七年七月三十一日より七泊八日間、琵琶湖畔西教寺における合同合宿における、朝の御製拜誦)

同信の友のみの合宿は、しかも全国の真の友

らのみが集りし合宿はこれが最初にして最後であった。この頃より研究所の問題が内包されてゐたのだ。

しかしそんな事よりも僕にとつては亡き江頭俊一兄と最後の合宿であったが故に、忘れがたい思ひ出がある。あの時は君が二班の内が一番元氣であった。君が寺尾と自然科学に就いて激論した事、そして後から僕も加はつて、それに関聯して学問全般の事に就いて三人でしみぐ語りあつた事が忘れられない。

江頭兄、君は死ぬる時僕に「自分は幸福であつた」と言つた。「あふぐべき大君いまし、よき母いまし、よき友います」と言ひし君の最後の言葉はそのまゝ、僕の思ひである。僕らはかくの如き良き友達を持ちえた機縁をたゞ感謝しまつる



前列左より田所廣泰氏・関正臣氏・多田光氏・江頭俊一氏・加藤敏治氏・杉浦直樹氏

のである。身を粉にし骨を碎きても報すべき御恩を思ふのである。

最後の晩だったか、皆で演芸会をやった。その時君の原作「名草の妻」を僕ら二班で演じたのである。君がうれしさうに挨拶した姿が目先から去らぬ。あ、君の思ひ出は盡くることを知らぬ。

あ、君が生きてをればと、今出征にあたりて痛感する。

かぎりなき大御心にいのりつゝ、したがひゆかむ大御軍に

(19) (西教寺合宿スナップ写真)

行く雲のかへらぬ運命さだめ思ひつゝ、かへりみるかな過ぎにしかたを

今は世に亡き友どちの年ごとに数そひゆくはかなしかりけり

か、なべて五年いっしゅうご足らねどたどりこし道ははろけしかへりみすれば

橿原の宮のおきてゆさかりゆく御国のありさま正目にぞみし

皇国の行末すめくに思ひ民草と生れし運命に目覚めぬわれは

神代より今に一すぢつたへこし道をしゆかむとねがひ定めぬ

国の為生命ささげし先人のみあとつがむとちかひまつりぬ

ちかひたる心一つを守りつつたどりきたりぬますらをの道を

この道をたどるさなかにむらぎもの心の友を我はえたりき

ますらをのちかふ心の一すぢにむすばれあひぬ心の友らと

心しる友らのなさけにいくたびかよみがへりけりまよひの底より

現し世にまことの友にめぐりあひしさだめ思へばありがたきかな

日の本のとはのいのちにつながりて我は生きしか友らとともに

一人にて生くるにあらじと思ふとき胸にほろびぬ力うまれぬ

み友らとむつぶ思ひよにぎはしき我らの生よなにか恐れむ

にぎはしき生にはあれど国のため戦ふ日々はかなしかりけり

「現し世は悲し御国に仕ふるはますらたけをのねがひなれども」(三井甲之先生)

ますらをのかなしきねがひいだきつゝ、我は生きけり友らとともに

いくとせかすごしきにけむ皇国のとはのいのちを守らむとして

年月は夢と過ぐれど神かけてちかひしねがひ忘ると思へや

胸内にきざみしちかひ水泡みなわなし消えむと思へやはたす日もなく

(20) (昭和十七年夏、佐高同信会々員十名、同信寮にて)

佐賀高校の後輩である。僕は山口の出身ではあるけれども、山口在学中から佐高とは縁が深かった。僕は真の友を佐高同信会の中に見出したからである。

その後九大に入学してから佐高とは特に縁が深くなった。日奈久の合宿も佐高の同信相統を中心として行った。その結果佐高には次ぎ／＼に同志が出来てゆく。九州に来てから僕の努力の大半は佐高の後輩指導のためにそそがれたのである。

(21) (昭和十七年十一月末頃、久留米水天宮前にて、米重政行兄、三角信義兄の出征記念撮影)

今は和多山儀平兄は海軍、川上富貴兄も陸軍に入った。五人とも皆期せずして一点を注目してゐる。再びこれらの友と相見るとは出来ぬかも知れぬ。然しながら魂となりて必ず一つに集ふであらう。宮城の大前に再開する日を待ちつゝ。

左より加藤敏治氏・米重政行氏・川上富貴氏・
三角信義氏、前に和多山儀平氏



九重の宮居はるかにをろがみて出でたちゆ
かむいくさのにはに

みいくさのうへしぬびます大君の大御心を
やすめまつらむ

「汝等国民ノ忠誠勇武ニ信倚シ」とふ大御
言葉のたゞにかしこき

かくばかり我らみたまを信倚したまふ大御
心にこたへまつらむ

骨をくだき身を粉にしても大君の大御心に
こたへまつらむ

末つひに開けゆくべしかくばかり乱れに乱
るる今の世なれども

天つ日のてらさむかぎり日の本のくにはう
ごかじ神代ながらに

(22) (昭和十七年十二月二十五日より二十九日まで熊本県日奈久で開催した九州中国四国の合同合宿の記念撮影)

最後の日に東大在学中の宝辺正久・龍野清澄君が激励の為来てくれたので、日奈久町の温泉神社の階段で並んで写したものである。合宿場所はここから約五十米南東に入り谷間にある喜安寺である。この時も和多山家より合宿所や食料の世話までしていた。指導は小生一人であった。

この合宿の感想を儀平君は、当時新潟県で病氣静養中の高瀬伸一君に次の通り連絡してゐる。

「小柳、諸永、小林、亀川、三根の諸兄とも泣き合ひ抱き合つて語りました。今こそ先輩によって開かれた機縁を戴きつつ、自立せる意志によって山口、佐賀、福岡、熊本、松山の連絡は確保せらるべしと信じつつ、起て九州の健男兒と絶叫してゐます」と。

最後の夜、全員の強烈なストームで本堂の床がかたむいたことも忘れがたい。

(23) (昭和十八年九月七日、和多山儀平君、海軍予備学生として土浦航空隊入隊のため送別の集ひ)

その時のうた

露霜の生命をすて、かぎりなき天つみ空を飛びゆく君はも

亡き友のみたまと共に天がけりゆけよ我が友大わだこえて

今日よりは流れ消えゆく雲見つ、君をしぬばむ空飛ぶ君を

門出の祝ひにもかゝらず涙が流れて止まらなかった。その夜は私だけ和多山家に一泊した。翌日更に熊本駅近くの北岡神社に参拝した。前夜集まった友等も一緒だった。そしてそのまゝ、上京する儀平君と一緒に福岡まで同行した。汽車の中でも話は盡きなかった。博多駅で儀平君の乗った汽車が見えなくなるまで見送ったのである。

(24) (昭和十八年十月十三、十四日、田所広泰、加納祐五、南波恕一の三先輩と十二人の同友、打ちつれて鹿島神宮参拝、潮来に一泊し小舟の上で撮った記念写真)

潮来では水郷の流れが眺望できる旅館に宿泊した。酒は乏しかったが時の経つのも忘れて一夜を送った。思ひ出深い「五木の子守唄」「椎葉の種搗節」等の民謡を合唱し万葉集の防人の歌も朗詠した。そして最後に「神州不滅」「進めこの道」（註・日本学生協会々歌）を、手をつなぎ肩を抱き合ひながら合唱し、更けゆく夜を惜しんだのである。

その後他の友人達と別れて成富正好君と旅行に出た。江頭の死去の様子等を三井甲之先生にお話したいといふ気持もあり、又出征前に先生にお別れの御挨拶をしようと思ったからであった。中央線で甲府に向った。東京を夜行で出発したと思ふ。朝になって思ひつくまゝに途中下車し、猿橋の奇橋や勝沼のぶどう園を見物した。三井先生宅では先生から黒上先生の思ひ出をお聞きした。先生は私が出征することを聞かれると、急いで奥様に言はれて赤飯を炊いて祝って下さった。帰る時、門の前まで御二人で出られ、いつまでも帰る姿を見送っていただいたことを忘れることができない。

その足で水戸高校在学中に急死した野中孝夫君の御遺族を甲府郊外に訪ねた。実家の近くにある御墓に詣り、その夜は心から歓待をいただいた。甘えてすっかり酩酊して御迷惑をかけてしまった。

(25) (昭和十八年十一月二十九日、八代市和多山智子様宛はがき・佐賀市より——「まほろば」は同信諸友の留守家族交流のための刷り文)

「まほろば」発刊については色々と御骨折下さいまして本当に有難う御座居ます。日本武尊の国しぬびのうたの内から名前を選ばれる事は非常に有難いと思ひました。僕らが戦場に立つて故郷をしぬぶ思ひは「まほろば」に統一されてゆくと思ひます。

小生友を送り迎へつゝ、あはたぐしい日々を送つてゐます。この手紙も佐賀駅で書いてゐます。これから久留米まで行きます。八代には一日か二日に行くやうになると思ひます。儀平兄からは度々便りがあります。

今後の「まほろば」には佐賀からも大分あつまりますから今度行く時に持って行って、歌をなほしたり色々お手伝をしたいと思ひます。」(後略)

(26) (昭和十八年十二月八日、洲崎海軍航空隊和多山儀平宛はがき三枚・八代市より)

「昨夜貴兄の軍刀を持って八代に來た。留守宅の皆様は大變御元気で安心した。昨夜は田辺兄も一緒になつて夜遅く迄貴兄の上をしぬびつつ話し合つた。今朝は開戦二周年である。君の家で十二月八日をむかへるのも何かの因縁であらう。よく／＼貴兄とは縁が深いと思ふ。八代宮に参拝した。大詔を拝した時の一瞬の思ひが再び蘇ってくる。昨日ギルバート方面航空部隊の勇戦奮闘を御嘉尚したまひて賜りたる御勅語の内に

惟フニ戦局ハ益多端ヲ加フ汝等愈々奮勵努力以テ朕カ信倚ニ副ハムコトヲ期セヨ

と仰せられし大御心をかしこみまつるのである。良き死場所を得るとか云つてゐる内は未だだめだ。たゞ「朕カ信倚ニ副ハムコトヲ期セヨ」とかしこくもいたらぬ我らを「信倚」したまふ大御心をかしこみまつり、たゞ大御心をあふぎつゝ進みゆくのみである。

松陰先生が「生きて国のためになるならば生き、死して国のためになるならば死す」と言はれた心が痛切に偲ばれるのである。「自分が死ぬる」と云ふことが問題ではないと思ふ。立派な死に方をしようがしまいが、そんなことは問題ではない。たゞ我ら国民にそゝがせたまふ大御心を

あふぎまつり、大御心を安めまつらむことをこそ我らは祈念し念願すべきではなからうか。

何を書いたか自分で判らぬ。今の世をみそなはします大御心をしぬびまつれば、乱る、思ひをとゞむるすべもない。あ、大御心を安めまつらむ日は何時ぞ！そのためにこそ我らは！

この十日間ぐらゐ全く寸暇も無い生活を送りつ、ある。廿六日佐賀の林さん宅で送別会、廿七日百武方で送別会、廿八日福岡県吉井町の山田輝彦兄のところ、廿九日佐賀の江頭方で、三十日福岡にてと、その間小生は飛び廻り皆を送った。

百武は久留米の歩兵、小林、高橋は大村の歩兵、龍野、川井は佐賀電信隊、渡辺は久留米の戦車、下畑、山田は福岡の歩兵（たゞし山田は残念ながら痔のために即日帰郷、一年ぐらゐ徴集延期、今その治療のために入院中）であった。陸軍を送ると今度は海軍だ。

四日佐賀に行き三根方で佐世保に入る三根、小柳の送別会、五日は下関に飛んで大竹に入る宝辺の、六日は柳河に帰って佐世保に入る池上を送り、昨日八代に来たところだ。明日は山口に行く。松吉、寺尾が宝辺と同じく大竹に入るので。佐世保には福田、辻本も入る。

学校の状態は以前に比較すれば学生は緊張して来たが、相変わらず教育は形式主義、学問の内容は従前通りだ。今学生は真剣に求めつ、ある。それが証拠には佐賀には新しき友が次々に来つ、ある。十二月廿五日―廿九日迄は日奈久合宿を再現する。国内にとゞまる方が任務が重いかも知

れぬぞ。小生入宮迄は戦ふ。それが亡き友にこたへる唯一の道。」

(27) (昭和十八年十二月廿七日、八代市和多山智子様宛はがき・福岡市より)

「御手紙昨夜佐賀に来て拝見致しました。愈々離福する時になって様々の用事が次々に起つたため御連絡も充分とれず色々御心配を御掛け致したこと、思ひます。『まほろば』は見られるとほり貧弱なものになってしまひましたが、それでも良い歌がぎっしりつまつてゐると思ひます。小田村兄よりも昨日御禮の手紙を受取りました。」

貴女様には十部御送り致しましたが、今度の分は出征同志を目標としたため余分には刷らずにゐました故、もうそれだけしかありませんからそちらで適当に處分してくださいませんか。首藤様には御送附してゐませんからそちらから御送り願ひます。この次からは少し余分が出来る様に刷らせますから。」

米重、三角、河崎、川上兄の御宅には是非御送り下さい。後の方はこの次から御送付することも出来ませんが何卒よろしく。明後日福岡発帰郷します。次から岡山市小原町三六へ御連絡下さい。」

(28) (昭和十九年一月七日、八代市和多山智子様宛はがき・岡山市より)

「度々御手紙をいただきながら返事が遅れて申し訳ありません。先づ以て新年の御祝ひ申し上げます。小生一日やつと帰岡、それより挨拶廻りや何やで毎日多忙な日々を送つてゐます。江頭兄の遺稿の整理をしたり、又出征同志の歌集の編輯をしたりしてゐます。まほろばも小生出征迄に第二号を出したいと思つてゐますが、出来るかどうかと案じてゐます。それで小生十一日岡山発、広島の親類に一泊し、十四日門司に行く予定にしております。それで今度の歌稿は一応佐賀江頭様方宛御送り下さい。十日迄に集まつた分を一緒にして出来るだけをまとめて御送り下さい。それからまほろば一号、山口に二部程あつたさうで貴女様のところに御送りする様に依頼しておきました。

今度佐賀へは母も一緒に行きますが、八代の方へは時間が無いので行かれず失禮させていただきます。末筆失禮乍ら御両親様によろしく。」

(29) (昭和十九年一月出征前、福岡下宿先、
田中氏宅玄関前の写真)

現^うそ身は北満の野に埋むとも魂やとどめむ
大和島根に

北満の白雪染めて現そ身は倒る、とても絶
えせず我が信

なな八たび生きかへりつ、大君に仕へまつ
らむ民草我は

なな八たび生きかへりつ、大君のみいづか
かがやく御代となしてむ



前列左より下宿主人田中氏・加藤敏治氏御母
堂・加藤敏治氏、後列左より山田輝彦氏・村
上清司氏・田中秀男氏・正岡寛忠氏

学生時代の詩歌

(昭和十五年・山口高商二年)

新入生を迎へるころ (四月)

新しき友を得られし喜びを友と語りて小夜を過しぬ
かくばかり誤解さるるも至らざる己が故ぞと一人なげくも

浜田収二郎兄 (東大生・日本学生協会による遊説のため巡訪) を迎へて (六月)

我が兄にまみえし如きなつかしさ我は感ずと友は語るも (友Ⅱ 一條浩通君)

浜田兄を広島駅に送る

動き出す汽車の窓よりまた会はむその日待たると告げし君はも

短くも楽しくありし思ひ出をのせて我が乗る汽車は進みゆく

学校当局の故なき弾圧を機に、校内座談会開催など積極的に行動せしころ（九月）

御国思ひひた進みゆく我らをは危険なりとてさまたげんとす

新体制の美名にかくれ我らをはさまたげんとするか心なき人よ

思はざるさまたげ起りともすればとだえ勝ちなり我等の戦ひは

さまたぐるもの打払ひ進まんとすれども悲し力及ばず

力足らず戦ひやぶれ戦闘の意力ともすればにぶり行くかな

我等今ふるひた、ずば神代より受継ぎ来たる道はとだえむ

大御歌よみまつりまた友の呼ぶ声に目ざめて戦ひゆくなり

丈夫の猛き心をふるひ起しふるひ起しつゝ、戦ひ行かなむ

（昭和十六年・山口高商三年）

佐賀高校同信会諸兄（長崎県）に訪ふ（六月）

手を振りて別れを惜む友どちも見えずなりゆく岬のかげに
鷹島の荒磯あひそに立ちて船影の見ゆる限りは手ふりし友はも

長詩 今

外に従順を装ひつゝ、内にひそむる陰險意志、

「今は国民思想が混乱してはゐない」てふ巧な言葉、

あ、人心を誑たぶらかし現実を歪曲する言語魔術、

国際関係の逼迫を危機と稱へて国民の注目関心を内より外へ、

この時なり、空虚となりし国内に 着々実行せむとす不逞意志、

生活の窮乏と、政治の矛盾に不満を覚ゆる人心を煽動し、巧に兇逆不逞意志を実現せむとす

る言語魔術瀾漫す、今の御国に！

あ、隠蔽されし危機の正体よ！

「御国危し、戦ひ戦ひ進み進め」てふ友の言葉に 驚き目覚めて戦ひ進む今、

現実を直視し 不逞陰謀魔術を看破しつゝ、

わが胸に、わが生命に、刻々と迫り襲ひ来る不逞意志と死闘しつゝあり、今われらは。

あ、苦闘の底ひより湧き上る確信

戦へばあらはれ出づるしきしまの大和魂、現しき神の守りに新しき世界開けぬ。

つぎ／＼に我等の信ひろごり行く歓喜よ。

戦ひ疲れて寮舎に歸り 友等と我等の思ひ通ひし喜びを語り合ふ 一とき！

苦しみも悲しみも一切をうち忘れ 手握り肩抱きあひて喜ぶ 戦の勝利を！

その時し、しのばるゝは、都の友等また全国に別れ戦ふなつかしき友ら、

あゝ、にぎはしけれども悲しみつきせず、我等の戦ひ、なつかしき友等と別れて戦ふ、我等の

運命さだめよ。

悲しき思ひに夜空あふげば、はてしもあらず暗れたる夜空、月は出でねどつらなる星影 さ

やかな光、

あゝ、星よ！夜空に別れひろごりて輝く星よ！汝もなげくか、悲しき運命を、母なる太陽、友

なる星と、一つに住みしいにしへしぬび、つきぬ思ひに、別れし母を、なつかし友をしたひて泣くか、夜空に汝は！

あ、人の運命に目覚むる時に胸にわきくる不滅の力よ！さかしき人智のはからひ捨て、運命のまに／＼神意のまに／＼生き行く外にすべなし今は。

あ、友よ、全国に別れひろごりて戦ふなつかしき友等よ！時は今なり！進撃の時は今なり！

「神州不滅」と信ずる我等のもゆる思ひを 人てふ人の胸につながむ時は今なり！

群がり立ちて今こそ我等は進撃せむかな！友よ！友らよ！

み民と生れし我等の運命を思ひて 今こそ進撃せむかな！

友よ！友らよ！

大道の浦（九月）

秋雨のそぼふる今日よ瀬戸の海の海辺したひて我は来にけり

浜松のおふる磯辺を友どちと歩みゆくなり雨にぬれつ、

白貝の散らふ磯辺の真砂路をたどりて行けば寄せくさゞ波

磯にたちけぶる海原みわたせばいづち行くらむ船の音きこゆ

砂浜のつくる彼方は小ヶ浜かあまの家居ゆ煙たつなり

ひるげたく家居の煙松原の上にたゆたひなびく静けさ

秋雨にけぶる瀬戸海眺めつゝなごむ思ひに御酒くみかはず

都路の友らへひゞけと磯に立ちうたひつゞけぬ「神洲不滅」を

み友らとうたふうたごゑはてしなくひろごりゆくなり瀬戸の内海に

西山先生（註・山口高商教授）を訪問しての歸途（十月）

身をいやすいとまあらずに戦ひ戦ひ進む今はも

今日もまた戦ひつかれぬばたまの夜道たどりて歸り行くなり

道のべの小川のせゝらぎさら／＼にきゝつゝ行けば月さし出でぬ

黒雲のたえまゆ月の影もれてかゞやく野辺に虫のなくなり

秋ふかみ野辺の枯生かれふになく虫の声たえ／＼になりし頃かな

たどりゆく一すぢ野路のはてまでもさやかに見ゆる月の光に

稲をこぐ機械のひゞき遠近とちの農家ゆきこえく夜空つたひて

夫や子は戦に出でて人手なき里のいとなみしぬばる、かな
もだしつ、働く人のもろ肩にさ、へらるるか今の御国は
人知れずもだえ苦しむ国民の思ひは一つにつながり行くなり
人の世の運命に目覚め生き行けば心やすらぐ苦しけれど
わが歸りまちていまさむ友どちを思へば軽し足のはこびも

(昭和十七年・九州帝大一年)

和多山儀平兄へかへし (七月)

友ら恋ひ浜辺に来ればわだつみの沖辺はるかにかゝる綿雲
博多の海波たちさわぎ沖辺なる志賀島しかのしまを舟のゆく見ゆ
見さくれば日影をうけて遠山の峯より峯につづく横雲
浜松の根ろにまろびてみ空ゆく雲ながめつ、友恋ひわたる
しほさゐの聞こゆるかなし友らこふるわが下思ひいやつのるがに

山口佐賀の友、前日熊本に会し、十九名打ち連れて阿蘇に登る。阿蘇移動合宿なり。

その時の歌（十月十八日）

神さぶる阿蘇の高峯たかねにもゆる火の消えざる力今あり我らに

出発式の歌（十二月、九州日奈久合宿において即席に詠める）

一、不知火海をみはるかす

火の国の辺に我等今

新防人にひさきもろと集ひ来て

なき師なき友神々の

み霊をろがみなげきつつ

いのりまつりぬもろともに

二、雲たれこめて星影も

かくろひはてし闇空に

ひびくは風か海鳴か

嵐近づく刻々と

聞けよ友らよ大空に

神語かみこと聞こゆ亡き友の

三、五十鈴の宮の大前に

いのりたまひし大君の

大御心をかしこみて

あふぎまつればみたみ我れ

生くるおもひもたえはてて

涙ながるとどめなく

四、あゝかしくも今の世を

みそなはします大君の

大御心をひたすらに

あふぎまつればみ民わが

務は重しいたづらに

たゆたふべしや友どちよ

五、ゆく手に暗雲はてしなし

されど闇路に一すぢの

神意かしこみ梓弓

ひきかへさじと誓ひあふ

われらのことばききたまひ

見守り給へ行末を

六、思ひをこめて前進の

太鼓をうてば遠山に

こだましひびきつたふなり

聞けよ友らよ全国の

友らも雄叫びこたふなり

あ、靈戦のかしこさよ

七、あ、靈戦のかしこさよ

たゞ大御心あふぎつ、

三世分たず一すぢに

戦ひゆかむもろともに

大天地おほあめつちのあるかぎり

たゆることなし戦列は

（『桜井の訣別』の節）

(昭和十八年)

小柳兄へのかへし(一月)

あゝ御国の行末思ふに今の世の乱れゆく様たゞに悲しき

今の世に生くる我が身のつとめ思ひ戦ひゆくなり力なき身も

力なき身をなげきつゝ、今の世を正さむねがひに戦ふ我は

解決をもとめて迷ひ苦しみし君の御歌よめどすべなし

我もまた迷ひ苦しみなげきつゝ、悲しこの世に戦ひ生きゆく

友の手にすがりて悲し胸内の思ひはるゝまで泣くべく思ほゆ

手をにぎり肩あひいだき友どちと泣きてちかひし言葉忘れじ

現し身は別れゆけどもむらぎもの心のちぎりたえむと思へや

現し身の迷ひ苦しみ消失すべき時あらめやも生くるかぎりは

悲しみも苦しきもみなうたひつゝ、戦ひゆくより外にすべなし

なつかしき友らをしぬぶたまゆらのやすらぎにあゝ力うるかな

ますらをは悲しみたへて一すぢに生くべくありけりみことのまに

霧島にて（十一月七日）

亡き友の思ひこもりし劔太刀とりて立つべしいくさのにはに

註・学徒出陣の日を控へ、諸友連れ立って霧島に遊ぶ。同行の者、百武禮之（戦死）・寺尾博之（自

刃）・宝辺正久・首藤雅也（病死）・高瀬伸一（戦死）・小林国男・諸永好孝・三根淳・渡

辺二郎（戦死）・小柳陽太郎の十一名であった。

江頭兄のおくつきに詣でて（『若桜集』より）

今生のいとまつぐるとみ友らとまうで來にけりおくつきどころに

おくつきの片邊にさける白菊を折りてさ、げぬ香華たきつ、

秋の日の光かゝよふおくつきに香華の煙ほそなびくなり

君が名を呼べどもかなしいらへなく石のおくつきもだしたつなり

面影は眼先さらねど現し世に再びあひみむすべなし今は

いきたゆるいまはのきはに我か手とりゑまひし面影まなさきさらぬに

もだし立つおくつきいだき胸内の思ひつげなむおくつきいだきて

同じき思ひいだきてあるかみ友らもだしたつなりさりがてにして
おくつきのまへに集ひてともどちと酒くみかはす別れのしるしに
ありし日に君のこのみしうま酒をのめば悲しもつものる下思ひ
亡き友をしぬびてあふぐ夕空に片割月の影ほのじろし
亡き友のみ墓に再びまうづべき時はあらじな防人我は
一つ信につながるえにし絶ゆる時ありと思へや君みまかれど
現し世のかたみにのこりしうつつしをいだきて立たむいくさのにはに

故郷の母に送りし歌（『若桜集第二輯』より）

灰色にみ空くもりてをやみなく雪ふりしきる風はあらねど
大空に咲ける白花あらがねの土にふりくる立ち舞ふごとくに
はろばろと天路つたひてくだりくる雪の白花土をつゝめり
ながむれば胸あたゝかしをやみなき雪手にとればひやゝかなれども
火のもとに親子はらからまどゐせし昔思ほゆ雪のふれば
故郷は山の紅葉も散りはてて北風寒くなりまさるらむ

つかれます身をいたはりて過しませ北風寒くなりゆく夜ごろを

故郷の北山こえて吹く風よわぎへの方はよきてかよひね

外界の寂寥と冷厳とは内心にともしびの如きほのあた、かさを與へつ、あり

まほろば 創刊号 附 記（十二月十二日）

不備なものが皆様のお手元に “まほろば” 第一号を御届け致します。友等次々に戦の場に出でて征くのでありますが、たとへ國の為とは言ひながら、年老いし両親や弟妹の上に思ひをのこすこと、思ひます。戦場に立つても母の面影は胸より去らぬと思ひます。このすりぶみも戦地にありて、ふるさとを偲ぶ思ひを、母を懐かしむ思ひを、日本武尊の國しぬびの歌にあふぎて “まほろば” にあつまると思ひます。前線と銃後を結ぶ橋となることを祈念して出したものであります。僕らは今迄皆様方の御子息と一つ信にむすばれて学校生活を送つて来ました。僕らの家庭の間がむすばれ、僕らなき後、互になくさめあひ助けあひつ、ある事を知る時如何に喜ばしく力強き事か、戦地の友、更には亡き友らもそれを一番願つてゐること、思つてこのすりぶみを出しました。急に思ひ立ったために、歌も少く不備なものが、これが契機となつてお互に文通したり、うたをかはしあつたりしていただきましたと思ひます。今、中国、九州だけの同志でも五十名

近く出征してゐます。この次号には皆様から歌や消息をいたゞいて完備したものを出したと思ひます。連絡は八代市横手町和多山智子様宛御願ひします。歌や簡単な家庭の通信、戦地の御子息の便り、なんでも結構です。十二月中に御送り下さい。

○

本日は十二月十二日昨年かしこくも

陛下皇太神宮御親拜の一周年の記念すべき日であります。この良き日にこのすりぶみを出すことが出来た機縁と意義とをかしこみまつります。大御心をやすめまつらむ日の一日も早かれと祈りまつりたいと思ひます。いのりつゝ、つとめはたらきしぬびつゝ、戦ひゆきたいと思ひます。しぬびあふ思ひに力をあたへられるのだと思ひます。戦場にありてこのすりぶみを手にする友もあると思ひます。『まほろば』を手にして故郷をしぬびたまへや。

最後に皆様の御健康を御祈りしつゝ、後記をとゞめます。

冬と言へど（以下「かぎりなき」まで『若桜集』より）

冬と言へど日ざしをうけてもだしたつ天山が嶺の姿なごめり

心しる友らのなさけに送られて我は出で征くつくしののべを

み友らの「神洲不滅」のうたごゑに送られ我は筑紫路出でゆく
亡き友の立てしちかひのとゞまりしつくし國原いまさかりゆく
いつまでも片手うちふりおくります友らの姿をろがみまつる

時のまに汽車はすぎゆく送ります友のみ姿見えかくれつ、
北海に身はさかりても心はも常とゞまらむ友らのうへに

學びやに正道守り戦ひゆく友護りたまへ天地の神

しらぬひのつくしののべにますらが立てしちかひをうけつぎたまへや

亡き友のみたまのまつり永久にたやすべきやは友あるかぎりは

亡き友のみたまもろとも敵陣に突撃すべき時ぞ待たる、

義姉に

苦しくもたへて生きませ再びの春のめぐりを待ちのぞみつ、

人の世は悲しかれどもたへしぬび生くればあらむ天なるめぐみは

しぬびあふ思ひ交はさむ幾山河さかりて遠く別れ征くとも

北風の寒き夕べは北海に銃とる我をしぬびたまへや

大君は

大君は大みめぐみをかけませり生きとし生けるものにあまねく
ちりひぢの数ならぬ身も大君の大みめぐみのかゝるかしこさ
君がため捨て、くいなし我が生命大みめぐみのかゝると思へば
大君の大みめぐみに末つひに開けゆくべし亂るゝこの世も
大君のみいづかがふり千萬の敵うちはらはむ海原こえて

かぎりなき

かぎりなき大御心に末つひに開けゆくべし亂るゝこの世も
天つ日のてらさむかぎり日の本のくにのいのちのたゆる日あらめや
ほろびざるみくにのいのち信じつゝ、したがひゆかむ大みいくさに
かへりみずいくさのにはいいでゆかむ大君のみいづを頼りまつりて
君のため捨て、くいなし我がいのち大みめぐみのかゝると思へば
ねがはくは七度人と生まれきてつかへまつらむ我が大君に

七八たび生きかへりつ、大君のみいづかゞやく御代となしてん

江頭賢二君に（『まほろば第二号』より、註・賢二君は江頭俊一氏令弟）

賢ちゃんとはなれてゐてもいつもしぬびつ、僕は日々をくらせり

お正月が来たけど兄さんもかへり来ずさびしき日々を送りますらむ

昭ちゃんやふみ子姉さんとにぎはしくむつびいまさびしき内にも

年ごとにつよくかしくくなりませといのりまつるも年のはじめに

亡き兄のこゝろざしつぐますらをになれよ賢坊つとめはげみて

賢ちゃんが早くおひたち亡き兄のこゝろざしつぐ時ぞ待たる、

（昭和十九年）

まほろば 第二号 後 記（一月十五日）

小生愈々一月十八日門司集合、満洲第四十九部隊入営となり、本日十五日佐賀江頭様のお宅に来て早急に第二号をまとめました。御覧の通り貧弱なものでありますが、然し乍らこの内にこも

る無限の思ひをくみとつて頂き度いと思ひます。先輩の方々、又出征中の友らからも第一号を見られて喜びやら御激励をいたゞきました。さ、やかながらこの結びをたやさぬやうに続けたいと思つてゐます。然し小生も入営のため編輯が出来ませんので、次号から誰れか適当な人に御願ひして編輯していたゞきたいと思つてゐます。いまだ新年の御挨拶も致して居りませんが、御息様を戦場に送られてゐられる皆様には新年と言つても御淋しき日々を送つてゐられることと御慰び申し上げます。されど再びの春も決して遅くないと確信してゐます。又さうあらしめたいと祈念してゐます。

明治天皇御製

述懐（明治三十七年）

おほづゝの響はたえて四方のうみよろこびの聲いつかきこえむ

盃（同）

しづかにも世のをさまりてよろこびの盃あげむ時ぞまたるる

日露戦争最中の大御歌であります。「よろこびの聲いつかきこえむ」「よろこびの盃あげむ時ぞ

またるゝ」と仰せられし

大御心をあふぎまつり

今上陛下の大御心をしぬびまつれば、一日も早く戦争を解決し、大御心を安めまつらむと決意せしめられます。皆様とともによろこびの盃をあげる時がまたれます。その日のために生死を超えて戦ひたいと思ひます。

最後に皆様の御健康を御祈りします。

大君のみことかしくみ玄海の荒波こえて我は征くなり

あだ舟のみごもり（水鼓り）かくるゝ玄海の波路をゆかむまけのまにまに

北風の寒き夕べは北満に銃とる我を偲びたまへや

『従軍歌集』抄

(昭和十九年)

今日四時集合・採血などあり、宿舎につきしは七時過なりき

出発に当り母より

「生命かけはぐくみそだてし若桜捧げまつらむ今日の日よりは」

と一首の歌示されければそのかへしとて（一月十七日）

母が手にはぐ、まれにしますらをの生命捧げむ時はきにけり

幼くて父亡へどたらちねのなさけ思へば幸あり我は

みなさげにこたふることもあらずして出で征く我を許したまへや

防人と出で征く我をゑまひつ、見送りたまふかなし母はも

雲はなれはなれゆくともたらちねのかなし面影我忘れめや

天地に一人の母を故郷にのこして出で征く防人我は

今日よりは安寝もされず戦にはなる我をしぬびますらむ

戦のにはのかりねの夢にだにかよへよかなし母が面影

戦のにはにたつとも吾が影は常いだかれむ母のみ胸に

君がため捨つとも何か惜しむべき大みめぐみのかゝる我が身は

故郷の空をあふぎてあけくれに母をしぬばむ戦の庭ゆ

たらちねの母が手はなれ今日よりは新防人といでゆく我は

愈々国家の干城となるべき日が来たのである。今日まで母の手一つで育てたまひし御

恩をかしこみまつりつゝ、入營するのである。ただ 五ヶ條のかしこき大御言葉をかしこ

みまつり、大御心のまに／＼生き又死するのみである。「汝等臣民ノ忠誠勇武に信倚シ」

と我らを股肱とたのませたまふ大御心にこたへまつるのみである。

出發にあたりて

朝戸出にあふぐみ空は朝日子の影さしそめぬたなびく雲に

いづる日の方をあふぎてはるかにもをろがみまつる大宮所を

數ならぬ身にはあれども大君の御楯となりて出で立つ我は

故郷のとなり人らもことほぎて見送りましたまふ防人我を

もろびとのあつきなさけに送られて出で立ちゆくなり故郷の地を

大君のみことかしこみ玄海の荒波こえて我は征くなり

あだ舟の水ごもりかくる、玄海の波路をゆかむまけのまにく

大君のみいづかゝふり千萬の敵たうちはらはむ生命死すまで

北満の守りとなりて我は征く大御心にただ祈りつつ

身はたとへ北海の野に果つるとも魂とゞめて御國守らむ

ねがはくは七度人と生れ來て仕へまつらむ我が大君に

七八度生きかへりつつ大君のみいづかがやく御代となしてむ

かぎりなき大御心に末つひに開けざらめや乱るるこの世も

午前中荷物発送、新しい軍服を着て少し戸惑ふ。然し愈々士氣旺盛なり。午後四時半兵器受領。午後六時愈々玄海を渡るとて門司駅に集合す。未だ星影は見えねど空には雲もなし。恐らく明朝出帆ならむもはるかに航路の思ひやられて心さわがし。されど我はたゞ

大君のみことかしこみ出でゆくのみ。萬葉の防人の古より、日清・日露の戦争に至る迄、幾度かおしわたりし玄海灘を我も渡り征くと思へば、日本の伝統につながる思ひに無限の力が胸に湧く。その時の思ひを（一月十九日）

夕ぐれの停車場にぞ集ひける玄海灘を越えよの命令めいに

明日の日は玄海灘をこえゆかむ思へばはるけし我が行く道は

古ゆ日露のいくさにいたるまでみ祖らこえし玄海灘はも

み祖らの開きし道を我も又たどりてゆかむまけのまに〜

万葉の防人の心しぬびつ、我はこえゆく玄海灘を

星かげは未だ見えねど夕ぞらは晴れわたりたり明日はなぎなむ

明日の日は玄海灘を越えゆかむ名に聞く荒波あは頻きたつなゆめ

大君のみことかしこみ征く我を見守りたまへ天地の神

○

朝ぎりの早瀬の瀬戸を船出してこえてかゆかむ玄海なだを
戦友とかたりゑらぎつ、船出せむ時をひたまつはやる心に
大君のみことかしこみ玄海の荒波こえて我は征くなり

「しづがやに一人淋しく暮らすとも心残すな益良男子は

つぎつぎに捧げし若桜散らば散れとことこしへに名をぞ残して

亡き夫のうつしゑにむかひて祈るかな三人の我が子守りたまへと」

母より右の三首の歌送られたれば、その返しに（四月、在満洲国ハルピン）

なつかしき母のみ便りはる／＼と海山こえて我にとどけり

見るからになつかし母のしぬばれてたへがてぬかもあ、うれしもよ

戦のにはなる我をしぬびますあつきみなさけこもれり文に

益良男とはげましたまふ母君のあつき心にこたへむすべなし

今更に心は後に残らねどいかで忘れむ母の面影

大君のみことかしこみ来れどもわがたらちねの忘れえぬかも

若桜散らば散れよとのりたまふ心しぬびて我は泣くなり

若桜散らば散りなむ国のため捧げし我が身かへりみはせじ

君がためいづこの野辺に死するとも我が影かへりて母につかへむ

「今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は」(防人の歌)

我こそは新防人よ君が為生命死すともかへりみはせじ

母のたよりに、故郷は梅の花さかりなりとの知らせあり、満洲はまだ寒さきびしく冬

枯れの小草野に満ち寒ければ、いたく故郷の春しぬばれて作りし歌

故郷は春立ちぬらむ梅の花今まさかりと母はつげます

故郷の春しぬびつつ満洲の雪解ゆきげの空を仰ぎ見るかな

春されば梅咲き野辺は緑せむなつかし故郷いたも偲おもばゆ

たたかひのはげしくあれば故郷の花見て遊ぶ人もなからむ

国のためつとめにはげみ国民は一つ心に戦いくさひるるなり

春さればわがたらちねは家内いへうちにこもりていまさむ心さびしく

さびしくば我がうつしゑをとりだしてしぬびたまへやなつかし母よ

たとへ身はさかりてあれどしぬびあふ心はかよはむ海山こえて
国のためいくさのつとめにはげみなむ故郷の母つねしぬびつつ

マーシャル群島に敵迫り我が将兵六千玉砕の報を聞く。感に堪へず。「全国民全滅の、
即ち神州不滅の確信」とは三井先生の言葉なり。今この言葉の意義を痛感す。たとひ全
国民全滅すとも堅信こそ日本を守る最後の拠所たるべき精神なり。今こそこの確信
が全国民の胸内に充溢せねばならぬ。玉砕した忠勇なる将兵は身を以てこれを教示した
のである。

マーシャルに敵うちせまりぬ皇神の生みませし国けがさむとして
君が代の千代のみ栄えいのりつつ戦ひ死にけむつはものことごと
たたかひてたふれきづつき息たゆるいまはの思ひしぬはるかな
ますらをの運命かなしも妻も子も国のためにはかへりみずして
ますらをは生命を捨てて皇国の守りとなりて戦ひゆくなり
皇国にあだなす夷八つ裂きにするとも足らじじき人しぬべば
現そ身の生命絶ゆともみ魂はも戦ひいまさむ仇なす夷と

いまはとて思ひ定めてますらをら突撃しけむ敵陣目指して

しきしまの大和心を仇人に示してことごと戦ひ死にけむ

神州の永久とほの不滅を信じつつ戦ひ死にけむつはものことごとく

戦ひてたふれし人らのみ魂はも永久につながるみくにのいのちに

戦ひのにはのたよりを聞かたびに大御心の偲ばるるかな

大御心いかにますらむかくばかり四方の海原波さわぐ世に

平らかに世のおさまりて大御心を安めまつらむ時のまたるる

かしこくも大御心を安めまつるつとめになひて戦ふわれは

たまきはる生命を捨ててますらをのゆくてふ道を我もふみゆく

山田（輝彦）兄より三月の休暇を利用して、大道にて山口、佐賀、福岡の友ら相寄り合宿する由便りあれば、幾度か我も訪れゆきし思ひ出ある大道浦のいたもしぬばれて作りし歌。三井先生は詩に「本来の生命を思ひて独りゆくに眞実の道は極めて狭小なりき」と歌はれたり。一人にてたどりゆく道は狭小なれども友らとともにし行く時に、天地の公道となり、易行道となるのである。自性唯心に沈みと親鸞は告白した。他と共なる生

に目覚めて共にゆく道は、たとひ一人一人に如何に苦惱が荷重されようとも、それをわ
かちあひつつ行くことによりて易行道となるのである。かく思ふ時学生時代にまことの
友を得し我が幸が痛感されると共に、別れし友を恋ふる思ひのたへがたくて（四月二十

三日、大連の倉庫にて）

なつかしき大道浦に我が友らうちつどひけむみ国守らむと

にぎはしきつどひしぬべば過ぎし日の思ひはよみがへる我が胸内に

旅心胸に湧く日は白砂の大道浦をいたも恋ひにき

万葉の歌巻持ちて大道の浦辺松原さまよひ歩きし

真砂路に散らふ白貝拾ひつつ一日あそびしこともありしか

天地のゆたけき生命に開けゆく思ひせしかも海辺に遊びて

せぐくまる思ひも晴れて海原に舟のりいだし友と遊びし

秋雨にけぶる瀬戸の海眺めつつ酒くみかはせし友はいづこに

大道の浦辺にともに酒くみしなつかし友らしぬばるるかな

大君のみことかしこみ友ら今戦ひるなり相別れつつ

友どちと離りてあれどちかひにし願ひは永久に我が胸にあり

心知る友らと共にたどりこし道を思へばただにかしこし

泣き笑ひなべての思ひを相分ち友とたどりぬ一すぢの道を

力足らぬ我にしあれども一すぢの道たどりきぬ友らのなさけに

大御歌をろがみよみつつみ友らと共に生きけり悲しこの世を

ああ友のなさけあらずば常闇とこやみに落ちはてつらむつたなき我は

かりそめのえにしと思へやむらぎもの心の友と相むすびしは

戦のにはに出でにし我があとを守りて立てり若き友らは

常若とこわかの大和の生命絶ゆる時ありと思へや友あるかぎりは

神州不滅我らは信ずとたからかにうたふ友らの偲おもはるるかな

世の様を思ひみ祖を思ふ時さだかなりけりゆくべき道は

たゆたひてよかるべきやは皇国の守りと立たむつとめ思へば

みづみづし久米の若子わかことうたはれしみ祖の生命うけつけよ友

我があとにつづく友らを思ふ時つきせぬ力湧き出づるかも

こぞり立ち友らつかふる御軍にしたがひゆくになりますらを我も

永久とこしへの友情の記念留まれる大道浦を我は忘れじ

たまきはる命全けば再びし訪れゆかむ大道浦を

大道の浦辺によする白波と絶ゆる日もなし友とのむすびは

演習の休憩時、枯草の中に土にまみれし若草一もと見出しぬ。未だ余寒きびしかれども空行く雲にも春のきざし見え初めぬ。天地の豊かな生命思はれて息づく思ひす。天地のいのちと共なるいのちに帰依しまつらむ。その時の思ひを回想して作りし歌(同日、大

連の倉庫にて)

冬枯の草にまじりて若草の萌えいでそめぬ満洲の野も

凍てつきし土にひそみて幾月かかくれるにけむともし若草

天地のつきせぬ永久とほの生命はも内にこもれり名も無き草にも

大君はものおほすらむ皇国の四方に仇迫りただならぬ世に

野辺に咲く名も無き草の我が身にも大みめぐみのかかるかしこさ

みめぐみにこたふることもあらずしてむなしく日々を送るべしやは

しづが身を捧げまつりて大君の大御心を安めまつらむ

九重の宮居はるかにをろがみて捧げまつらむみたみのちかひを

ハルピン駐屯当時、演習のいとまに空を雁鳴きわたりしを見ぬ。そは四月初め頃なりし。今は南に行くか北に行くか、計り知らざれども、第一線に出動すべく十四日旅順に集合。そこにて一週間余り天幕生活を送り出発の時をひた待ちぬ。四月二十三日突然の命令にて我が分隊大連に先発す。いかだ組作業に従事するなれども今迄にかはりて暇多ければ、折にふれて過ぎし方の思ひを表現しぬ。

軍隊生活にはうるほひなしと云へども、そは眞の生活にあらず、「軍人と詩人との統一」をドイツの哲人は「将来のドイツの指導者」の資格たりと論じぬ。日本にありてはまことの軍人は詩人なり。乃木將軍はその代表者たり。詩は柔弱のものにあらず、古事記を見よ。詩は内なる生命の表現なり。特に軍人は生死の間に常に直面せり。故に緊張せる日常生活よりまことの詩は生るべきなり。日々を弛緩せる生活を送る歌人にまことの詩の生るべくもなし。歌をして専門歌人の手より全国民の手に奪回すべし、「詩は政治と相昇降す」まことのうたよ出でよ、特に今国家興亡の時に際して国民の胸奥にひそむすべての思ひを雄渾なる大和言葉に表現するまことの詩が生れ出でねばならぬ。かく思ひかく信じ、つたなかれども我はうたをつくるなり。

ハルピン駐屯当時、空を雁鳴きわたるを見し時の思ひを回想してつくりしうた（四月二

十四日、大連の倉庫にて）

白雲のたなびくはるか大空を鳴きわたりゆく雁の一つら

梓弓春のおとづれ告ぐるがに鳴きわたるなり一つらの雁

もろともに手をとりあひて大空の旅路ゆくらむともし雁がね

東びがしの雲間がくれに消えゆきぬ雁の一つら声をのこして

東といへばなつかし故郷の春の山河ひたにしぬばゆ

東に飛び行く雁よ故郷の母につげかし我がおとづれを

つ、がなくつとめはげむと故郷の母につげかし飛びゆく雁がね

今はあふすべもなき、別れし友らのことしぬばれて（四月二十五日、大連の倉庫にて）

今更にかへりみるかなむらぎもの心の友らと過せし日々を

み友らとなべての思ひ語りあひむすばれあひぬかたききづなに

ますらをの雄心ともにきたへつ、くらし、日々のなつかしきかな

現し身の迷ひ苦しみに耐へてゆく力えにけり友とのむすびに

「一信海」と親鸞の告白せし言葉はもまことにあらはせり我らのむすびを
み友らと一つの信につながりて共に生きけりこの世の海を
別れても共につながり生きありと思ふに安らぐかなしき胸も
ますらをのゆくてふ道のみ友らとともにゆくなり相別るれど
別れこし友らをしぬぶたまゆらの思ひに得るかなつきざる力を
いかならむことしあるとも我はたゞ誠のみちをゆかむとぞ思ふ

歌

語るべき友もあらねば胸内の思ひをとどむししまの道に
胸内にひそみし思ひししまの道にあらはし一人なぐさむ
一人つむ言の葉ぐさのなかりせばとよみたまひけり明治のみかどは
かしこくも明治のみかどの大御うたかしこみまつり我もうたよむ
言霊のたすくる国と言ひつたへ語りつがれぬ大和の国は
まごころをこめてうたへばそのうたにこもりてありけり人の生命は
月花のもてあそびならず我がうたはこの世に生きし生の記念ぞ

しきしまの道をしゆかずば現し世に生きしるしをなに、とどめむ
もだしつ、日々をくらせどうたうたふすべ知る我はたのしくもあるか
胸内にひそみし思ひ一時にあらはれいでむ時し来れば

相聞

現し世の悲しき運命さだめに目覚めしゆ我が胸去らずかなし思ひの
現し世に一人のきみのいませりと思ふにやすらぐ悲しき胸も
幼子のすぐなる生命こもりしと思へばさらにしたはしき君
人の世は悲しきものとつゆ知らぬ君のおこなひすなほなりけり
すなほなる君が姿を見るごとに清き思ひの胸に湧き来し
あゝ我はかなし君ゆゑ現し世に生くる力を得つゝ来しかな
苦しみはつきしにあらざしかれどもたふる力を得にけり君故
現し世のまやみをてらす一すぢの光とあふぎぬ清けき君を
心はも千重ちへ頻波しきなみのしく／＼に君によりにきたへがてぬまで
幾度か胸の思ひを告げなむと思ひさだめつつためらひすこしつ

わぎもこと心に呼べど口にはも出さず過しき一年ひととせあまりを

かくばかり恋ひしたひつゝ、告げざりし我を弱しと思ひたまふな

えたへぬにたふるぞまことますらをと思ひ定めて身をばささへし

ますらをの運命はすでに一すぢに定まりてあり神代ゆ今に

ますらをはかへりみずして大君きみのためいで立ちゆくべしいくさのにはに

若草の妻が手離れ出で征きし遠き昔の防人しぬばゆ

ますらをの運命思ひて告げざりし胸の思ひをしぬばせわぎも

君こふる思ひもつげず満洲の新防人と我は来にけり

一すぢに君につながるきづなはも絶ゆることなし遠ざかれども

恩愛のたちえぬきづないだきつゝ、戦ひゆかむみことのまに〜

戦ひて死ぬるたまゆら大君のみ名をば呼ばむ生命のかぎり

現し世のかりの生命をなにかせむ御国の生命を信ずる我は

現し世のなべての思ひを一ことにこめて叫ばむ大君きみがみ栄え

我も人もみ国の生命につながりて共に生きあり悲しこの世に

人の世に於て迷ひ苦しきは絶ゆることはない。名利愛欲の大海とは人生の姿である。思へば我のたどりし道は苦難迷執の一路であった。されど我らの生は戦死の一瞬に極まるのである。我らのはかなき生命は戦死の一瞬に祖国無窮の生命につながらしめられるのである。全生涯の思ひをこめて戦死の一瞬に、陛下の万歳を呼ばはむ。

五月七日、今、小郡附近（註・山口県）を通過する車中でこの日記をした、めてゐる。五月二日大連発、釜山着は五月四日の夜、小学校で一泊し、五月五日、午前四時半起床の後、八時乗船、九時頃出帆した。

ハルピンで出勤命令を受取つてからはや一ヶ月余りになった。「第一線の重要任務に就く」それだけが知らされた。旅順で一週間足らずの幕舎生活の後、自分達の分隊は先発となつて大連に行った。その時は必ず南方行と思つてゐた。防蚊手袋、浄水剤等もあつてさう思つてゐた。ところが急に命令が變つたらしく、釜山經由となつたのである。然しまさかこんなに早く再び内地の土を踏むとは思はなかつた。然も上陸地が第二の故郷博多であらうとは。福岡には忘れ得ぬ友らがある。特に信友江頭兄病死の地である。何か不思議な運命の糸に操られてゐる思ひがした。

玄海は相当荒れた。皆船酔を感じた様だが自分は何ともなかった。午後四時頃甲板に出ると、波路に遠く九州の山脈やまなみが見えた。霞の中にこもる大和島根を見た時自然に頭が下がった。感傷的な感情は少しも湧かない、新しい任務が待ってゐると思へば。ただ陛下の国土、我が祖先の国との実感を強くした。そして自然に礼拝する思ひがした。「帰りゆくべし祖国の胸に」と三井先生は言はれた。何処の地、何処の野辺に屍をさらすとも、魂をとどむるは唯祖国日本、あふぎまつるは唯上御一人である。再び踏まじと期して離れた日本内地であるが、今かうして帰って見ると、絶対にたちがたい国土とのつながりを感じしめらるる。

高うねりよせくる荒波おしわけて進みゆくなり我が乗る船は

防人の船出よそひてしらぬひの筑紫路さして我はゆくなり

ふたたびは踏む日もあらじと思ひしに今かへりゆく筑紫の国に

船腹をしきうちよする波の音の高なるきけばさやぐ我が胸

筑紫路ははやまちかしと聞くからに心をどりて甲板に出づ

海の面にたなびく雲と思ひしはあ、なつかしもつくし山脈

大君のしきます皇国の山川と思へばかしこし筑紫山脈

玄海の八十島めぐり我がくれば神さびて見ゆ背振山脈

歌には表現し得ざれども、其の時の思ひを自分は一生忘れぬであらう。埠頭に上陸して汽車に乗る迄の間、自分の心は追憶の情に満ちてゐた。背振山の西に落ちてゆく夕日が実に美しかった。その頃を好んで町を歩いたことなど思ひ出した。やがて夜になった。

白色の九大医科の病棟も見えなくなった。たゞ病室の光がまたたいてゐた。信友江頭兄病死の地、忘るることも出来ない六月八日の思ひ出が胸に蘇つて来てたまらなくなつた。何時だったか自分は詩の一節に「友、あ、その言葉よ、友あらずば全てあらし」とうたつたことがある。今の自分はこれらの友と離れてゐるが……。

翻つていま自分は友なき淋しさを感じず。軍隊の中で同じ戦友として心通はぬ悲しみ苦しみを、他の人々は感ぜぬのであらうか。断じて改革せられなければならぬ。現状に満足する者は生命なき者である。これが国軍の幹部であり、陛下真率の軍隊の姿であらうか。全国民生活が日本本来の姿にかへらなければならぬ様に、軍隊も亦日本の真の軍隊の姿に返らねばならぬ。何と軍人の精神生活の低級なることよ。彼等の口から歌はれる流行歌を聞いて見よ。そこに何の文化があるか。戦争に勝たなければ文化は滅びてしまふと

云ふ考へ方は如何に誤つてゐることか。戦勝とは文化の勝利である。何ぞと云へば「いざと云ふ時は立派に死ぬ」と云ふ。然し死ぬるといふことに意義があるのではない。死は一個人の問題である。松陰先生は江戸の獄中に於いて生死の問題に就いて考へられ、様々に迷はれた末「生も死もなし」と入江杉蔵宛の書翰で云はれた。我々軍人にとって死ぬるといふことが任務ではない。大御心を安めまつることのみである。そのためこそ生き且つ死ぬのである。生死は問題ではない。是非共生きねばならぬことがあるだろう。正成が「正成一人だに生きてありと聞こし召さば」と言つた絶対の責任感が偲ばれる。

黙してゐよう。何時かはきつと胸の思ひを一時に表現する時があるだらう。その時をひた待つのみ、愚人になつて。

大道を通過したのは五月七日午前六時頃だったらう。丁度朝日が山の端からそのすがしき光を大道浦になげかけてゐる頃だった。山の影、岬の影に隠れて浦辺は見えなかつた。しかしそれで心一ぱい満足感を味はつた。浜辺の松原、いつも泊まった旅館、さては白砂にしみ入る波の音すら聞く思ひがした。軍隊に入つても過去の思ひは切断することは

出来ぬ。否自分には一生出来ぬ。それ程迄に過去の自分の生きし道は明確であつた。大御歌ををろがみまつりつゝ友らと共にたどり来し一すぢの道、それは直に軍隊生活にながるものであつた。しかし今は何と孤独感を感じることもよ。自分の心は悲哀にたへられなくなつては絶えず過去を追憶する。別れし友らを憶念せずにはゐられなくなる。こんな弱い事と思ふけれども境遇を打破せむとする勇氣は湧かぬ。しかし自分はこの現狀に満足することは出来ぬ。一日も早く班内の、少なくとも初年兵だけでも精神的統一と協力を實現せねばならぬ。

いきどほり胸にいだきて送りゆく日々は悲しも友なしにして

すめぐにのとはの行末思ふとき悲しからずや乱るゝ今の世

今にしてみ民の道をまさやかにあらはさゞればあやふし世のさま

宣戦の大詔あふがむみ民らのゆくべき道は示されてあり

大御心かしこみまつりゆく時し恐るることなし万の敵も

千万の夷来るともたちろかず討ちはらふべしすらを我は

ますらをのゆくてふ道をかしこみて行きなむ我は一人なりとも

いきどほり胸にひめつつますらをの利心とみがかむ時をまちつゝ

時來なば我が胸内のいきどほりあらはし示さむ迷へる戦友らに
ひた黙し過ごす我が身をあざけりて笑はば笑へかへりみはせじ
愚人になりて往生すとの親鸞の言葉思ほゆこの時にしも

一人してゆく道ならずみ民らのゆくべき道はもろともにして
己が身のためのみ思ひふるまふは道にはづれたりみ民の道に

いきどほりひめにし胸ゆたえまなくなりいづるなりますらをのうた
火の山の荒れ狂ふごと胸内の思ひうたはむますらをを我は

天地の神聞こし召せますらをのいきどほりこめうたふ我がうた
大君のみいづかやく大御代をいのりつゝゆくますらをの道を

大道浦を過りしときの思ひを

朝日影のどかにさして大道の入海こめて霞たつなり

あさなぎの大道浦の真砂路に寄せ返るらむともし小波

白砂にしみこむともし波の音をしぬびつゝ過ぐ大道浦を

大道の浦辺松原恋ふれどもかくれて見えず岬のかげに

時のまに過りゆくかも大道の浦辺松原ひたに恋へども

五月七日、午後五時頃岡山停車、停車時間は約十分なり。人ごみの中に知人を捜したれども見当たらず残念なり。母は如何にますらむ。自分が通過せる事を聞けば定めし驚かれなむと思へどせんなし。東山、児島山脈等なつかし故郷の山川見ゆ。

旅順出發後、母の便りを受取りぬ。その内に

「故郷の春しぬびつ、北滿に銃取る吾子を偲びくらさん」
の一首の歌送られたればその返しとして

故郷の母ゆみ便り来し日はも心たのしく送りすごしつ

なつかしき母のみうたをくりかへしよみつ、送りぬ便りこし日は
戦のにはなる吾をなくさめむねがひにうたをつくりますらむ

うたつくるすべ知りまさねど吾を思ふあつきなさけにうたつくります

長からぬうたにしあれどそのうたにこもりてありけり母の愛は

うたつくりなくさめたまふ我が母の心かしこみ我もうたよむ

かたみにぞうたよみかはせば心はも常にかよひてたのしかりけり

江頭俊一兄の一周忌（註・六月八日）が近くなつて来た。この頃はいつも江頭兄の事がしぬばれる。特に臨終の日の記憶が、今は悲しき思ひ出となつて胸に蘇る。江頭兄の死は戦死である。それは兄の最後が客証してゐる。学生運動の不滅を信じつゝ、志半ばにして倒れていった友にこたへる道は唯一である。僕のこれからの一生はそのために捧げられるべきである。今その当時を回顧しつゝ、胸に浮かび上る思ひ出をペンの走りにまかせて記してゆく。

江頭兄より「キウダイキタビョウトウニキタスグコイ」との電報を受取つたのは今年の四月廿五日であつたらう。思はず躍り上つて喜びぬ。再びは会ひ得ぬと思ひしに思ひがけなくも内地に、然も九大病院に迄帰り来しとの知らせ全く夢かと思はれぬ。喜びのあまり大声あげしを下宿のおばさんいぶかりしも今は悲しき思ひ出となりぬ。電車の走りももどかしく山田輝彦、田中秀男両兄と病院を訪れしは夕方なりき。病院前の花屋にて君の好む草花あがなひて持ち行きぬ。戸をあけて内に入りぬ。我を見し友の眼には一時に涙あふれぬ。涙あふるる眼にこやかにほほゑみぬ。我も一時に涙こみ上げて声をのみ

ぬ。我泣けば友泣きて心たかぶり病に悪しと思ひてじつと耐へ居りし。

友の元氣は衰へしとも思はず。ひげのび身体やせたれども嬉しさうに語る友の面は輝きをりぬ。

予は帰宅するや直に東京の友に手紙を出しぬ。「大丈夫なり」と。

故郷に君帰れりとの知らせうけ夢かと思ひし昨年ししぬばゆ

一とせのみたまのまつり近づけば君ありし日のひたに偲ばゆ

再びはあひまみえじと思ひしに帰りきませりなつかし君は

君病むと聞きし日よりはとくいえよといのりまつりし朝夕にして

友もなき病床生活の淋しさをひたにしぬべばせむすべなかりき

幾山河離りてあれば訪れむこともかなはずあせり過しつ

休みともならば君ます満洲にゆかむと思ひぬ何をおきても

病み床にふしつ、君は都路の友をひたこひうたにうたひし

病みどこにふせてあれども力はもこもりてありけり君がみうたに

み病のあつしと聞きて友つどひ君なぐさむるすべを語りし

うつしゑにとりし我らのすがたをば送りとどけぬ会ふすべなければ

帰りぬとの知らせを受けてとるものもとりあへずして家をいでにき

ゆきかひのしげき街路をひたゆきぬ君待ちまさむと心はせつ、

君が名をか、げし部屋の前にしてしばし立ちにき心さやぎて

君います部屋の戸あけむとせし手はもふるへてありけり心をどりて

戸をあけて内に入りし我を見し君のまなこに涙あふれつ

我もまたなみだあふれつ病みたまふ君の面わを相見したまゆら

あふれくる涙をたへつわが泣かば友なきますと思ひかへして

友こふる思ひ一つにはろばると帰り来まししか筑紫の国に

病める身に君がたどりし旅路はも苦しかりけむたゞにしぬべば

病みこやしあれどもゑみつ、語ります君の面わはかゝやきてあり

「なつかし」と語りし君の一言に全ての思ひこもりてありけり

語らへば笑みつ、いらふ君が面の眼先さらず悲しきまでに

それから一週間ばかり後の事なりき。何時もの如く君を見舞ひて帰らむとせし我を呼び止めたまひし母君は「到底治癒の見込みなく医者にも見放され居りぬ」と語りたまひて

泣きたまひし。あ、その時の思ひよ。夢の如く病院を出し我は、声をかざりに泣きぬ。
はからざりき、かくまで元氣なる君なれどすでに全身病魔にをかされ居りしなり。電車
にも乗らず一里以上の道を下宿まで歩きぬ。歩きつ、我はあまりにも悲しき運命を思ひ
て涙とどまらず。天地に神いませぬか、これが神意かと、かつうらみ、かつ悲しみ身も
心も消えよと願ひつ。

されど我は断じてあきらめず、我が誠心もて友の病ひをなほすべく決心せり。その日帰
りて山田兄と共に泣きぬ。その夜は天も暗かりき。

今ははや医師の力も及ばじと泣きたまひつ、語る母君

かくばかり君がみ病重しとは露知らずして過ごしつ我は

天地もくづる、思ひあ、君のみ病すでに治りえぬとは

声のみ泣きくづれます母君のみ心はあ、いかにあるらむ

なくさむる言葉もあらじ我もたゞ共に泣くよりすべもあらなく

夢のごと外とに出てあふぐ夕空は黒雲くろぐもこもれり雨ふるらむか

低空に立ち舞ふ雨雲見つつゆくつちはふめども空ゆく思ひに

天地に神いませぬかあまりにも思へば悲し君が運命さだめは(樺太、敷香行きの車中にて)

戦ひより還りて

(昭和二十一年)

小柳陽太郎宛書簡(二月八日・八代より)

出発の時は貴兄には会へず残念でした。在佐中は色々と御世話になりました。昨日は和多山の父と一緒に日奈久に行きました。(註・「生の記念」(22)参照)

あの山寺に通ずる道のほとりには梅がところ／＼に咲いてゐます。毎朝御製拝誦した神社にも詣りました。ストームをしたところの相撲場も昔のまゝであります。峰を過ぐる風の音、遠くに見える天草の山脈、丁度潮が干てゐたので見渡す限りの入江は干潟となつて、波が次々に転波してゆくのを、自分の心のゆらぎの様に感じました。

山寺はもとのまゝである。ストームの為に床を落したことなど本当に懐しくなります。(但し今は修繕されてゐますが)和尚さんは先日亡くなられた由。こゝに集ひし友らの何人かは遂に歸

らずなりしことを思へば、あの時「靈戦」と言ふことを実感したことが恐しい迄心によみがへつて来ます。「生きるといふことは死ぬことだ」と確か其の時僕は求道の意志とつながりしめて、生死の不測決定を話したことがあつたと思ひますが、今その思ひを新たにしてゐます。生死のつながりを思ふとき、そこに、はかなき内にも人生の不断の開展と連絡とに気付かしめられ、友とのつながりを実感せしめられます。先立ちし友、生き残る我ら、それを貫き結ぶ信の世界を思ひます。過去の一切は無に帰さうとも、この事實は不滅であります。

さて十一日に会合は出来ますか。実はこちらに来て相談の結果十二日に式（註・和多山智子さんととの結婚式）を挙げる事になりました故、会合には出席しかねると思ひますが、古賀（秀男）兄、稲垣（武一）兄を中心にして心ゆく迄話し合つて下さい。「充実せる生命は溢れて無窮に触れなむとしき」の三井先生の言葉を引用して、僕が日奈久の合宿の時、「僕らの心は通ひ合つたのではない。話せば必ず通ずると言ふ事實を確信するのみだ」と言ふ様な意味の事を言つたと思ひますが、「あるともなきともはかりがたき」が精神生活であると思ひます。「ともすれば思はぬ方に移りゆく」のであります。その意味で精神生活は常に狭少の白道びやくどうであります。孤独に耐へてこの一すぢをゆかんと今は決意してゐます。同信世界を楽しむ心理は求道意志の欠如を示してをります。僕らの同信世界は悲しき事実の連続であります。失敗と錯誤と、別離と生滅と、人生

さながらの運命のまゝに連続して来ました。又将来もさうであらうと思はしめられます。たゞ念ずるは「連続無窮むぎにしてねがはくは休止しせざらむことを」のみであります。佐賀の諸兄の進みゆく将来を念じてゐます。では又、諸兄よろしく。

巡 礼（大阪にて）

野末の雲に

風ふくまゝに

名残の光

なびく草原

うすくさしつゝ

波うつごとき

入りゆく夕日

うねりのどよめき

夜べは風か

見よ 鈴の音

笠かたむけて

ひゞかしつゝ

道をいそぐに

夕べの広野を

こし方ゆく末

巡礼のゆくを

なべて――

かへらぬ過去の

すゝきかやはら

捨てえぬ記念か

亡き人の位牌を

背に――

杖つきゆくに

夕べの風は汝が

身にしまん

反省の過去も

憧憬の未来も

ことごとく

苦悶と悲哀

懺愧の思ひを

白衣につゝみ

同行二人

はてしなき旅をゆく

汝がうたごゑは

風に消ゆるに

ゆく足ごとに

うたふは

悲し流浪のうたか

自然の変化に

人生の波瀾を

予測して

流転の生に

わが身を忘れむ

くだけで玉ちる

この世の差別

生れんこゝに

まことの芸術

あゝ淋しきとても佛あり

母に（三月二十日夜・大阪より）

難波路や横伏す生駒山脈いこまやまなみの嶺ろの上高く澄める月かも

うごくともあらず東にうつりゆく雲ほの白し月影うけて

筑紫路の母ぞ偲おもはるるこの日頃くもる夜空に晴る、月夜に

知らぬ間に白髪まじりし我が母を偲おもびて思ふ不孝なる身を

子と生れしつとめも果さではたらあまり二十余七つの年を重ねこしかな

とつくにに出でてかへらぬ愛子いとこを偲おもびてなげく母にしありけり

いづくべに月見であるらむ弟よ生きてかへらね母待ちませば

かへり来ばかくせん何せん手をとりに共にし泣かめ愛はしき弟

雲うつる夜空の合ひ間一つ星見ゆるかなしさ月てりまさるに

岡山駅を汽車通過するときよめるうた（三月二十五日）

岡山と呼ぶ声なつかし今はわが故郷の家焼けてなけれど

汽車着きし一ときホームに降り立ちてなつかしむかな故郷の地を

知り人をさがせどあらず停車場を旅行く人らゆきかひすれども

梓弓春さりくるに焼け失せし故郷の地はさびしかるらむ
われら皆みそばにあらねば故郷の父のみ墓もあれてやあらむ
故郷を失ひ今はさすらひの旅ゆく我ぞゆるしたまへや
星影はさやかなれども故郷の山は見えずよ月のあらねば
焼けのこる家のともしかやみ内にまばらに見ゆるもかすかな光は
闇空のかなたよ父のみ墓べををろがみまつり旅ゆく我は

かへしの歌 母に（四月十日・大阪より）

母がうたよめばなつかし面影の目に浮びくもあひ見ることくに
母が住む筑紫国原春さりて霞立つらむ四方の山辺に
西の辺は海に開くる葦北の八代の地ぞ母いますところ
天草の島山遠くかすみこめ有明の海はなぎるらむか
筑紫路の君を偲ばむ水がめにさしし桜をながめやりつつ
手折りたる桜小枝の二つ三つさしし水瓶見らくしよしも
水かめの水を少みさす枝の花のうす紅色あせにけり

かめにさす桜小枝にむらがりて咲くがともしさうすべにの花
花ちりし梢が末うらにいちはやく桜若葉の芽立ちそめけり
水かめにさしし桜のうつろひを見つ、偲びぬ筑紫路の春
筑紫路は桜散るらむこ、にして遠く偲べど行きがてぬかも

夜汽車（大阪にて）

雨ふる夜べ記憶の糸はもつれぬ

追想は悲哀を生み

過剰せる意識は

眠りをうばひぬ

人の世眠れば目覚むる心

こし方を 今の世を 思ふ

若き日の夢か 無知の勇氣か 感情の流転か

過去の体験はたゞ紙にゑがきし

人生の模型に過ぎざりしか

否——

空をのたうつ人間の知慮

水にゑがきしはかなき望み

土にしみいる春雨の音
消ゆれば又起るつばやき
我が心ひく

——道かよふ人もたえはてぬ——

おこりしもの、立ちては去りて

さむればむなし影画のうつり

消えよことごと

厳いづかしき現実の光の下に

ふと聞く夜汽車のひゞき

遠空より土をつたひて

ひゞく振動

近づきて又去りゆきぬ

雨ふる音にまぎれて

消えしに

一しきりかすかにひゞく

細長き汽笛のねいろ

あ、夜汽車よ

汝もまた泣きつ、ゆくか

はてしなき鉄路をつたひて

闇夜ゆく己が運命を

なげくなげきか

あはれかそけし汝が吹く

笛の音――

奈良行のうた（四月二十二日）

大和路は空も晴れたりゆうべより雨ふるらむと思ひてありしに
雲もなき天つ御空に照れる日の光にかすむ大和群山

人波のあとにしたがひ我もゆく奈良の都の春の大路を

春日てる都大路を人ゆけど我は淋し多君しあらねば

猿沢の池水にごり人たかる岸によりくる真鯉のくろき

五重の塔の影はうつらずにごりたる池の面にぶく光りをれども

夕まけばもやなびくらむあかねさす入日の光池に映えつゝ、

いくとせの昔なりけむ心しる友と訪ねし日を偲びつゝ、

夕ぐれをなつかしみつゝ、この池のほとりを友とあゆみゆきしに

若き日の夢かあらずか奈良の宿に一夜をいねて語りしことども

ひなびたる大和乙女の言葉つきまねて喜ぶ君なりしかな

過ぎし日はたゞになつかしまねくともかへらぬ夢と今は思へど

○

鹿の子はいとしからずや人馴れて手にふるれどもおびえずあれば

二月堂の鐘ぞ鳴るなり手向山やまかけ山陰道をのほりてをれば

並び立つ木の間をとほし道の辺に散りしく落葉をてらす天つ日

あらがねの土の生命にかへりゆく木の葉落葉をともしと我が見む

手にとりてにぎればかそけき音立て、こぼる、落葉いとしかりけり

落葉しく山陰道の木がくれに一本咲ける八重桜花

赤目四十八滝に遊びて

四十余り八つもあるとふ名にひかれ滝見にぞゆく名張山路を

沖つ藻の名張の山をいくまがりまがりてめぐる早瀬谷川

川にそひはてなくつゞけり名張山越えの道は青葉茂りて

谷川の水清くして川底の枯葉落葉のけざやかに見ゆ

岩の上に人一人見ゆ底浅き鳴る瀬を渡る鮎つるらしも

山陰の川の大淀水青み岸の若葉の影もうつらず

青測の岸の藤浪色あせて花の長房さゆらぎもせず

山峽やまがひは風も吹かぬか大空を雲うつろひて流れやまぬに

壁なせる高き岩崖そが上の空ゆく雲に心ひかれぬ

み空ゆく雲ともしもよあはたゞし世によろほひて生くる身思へば

胸戸つきうづまきかへる我が思ひ歌はなよしや人知らずとも

語らはむ人もあらねばもだしつゝもの思ひたどる長手山道

名張山越えては来つれ山の上ゆたどりし道をふりかへりつゝ

萬葉の歌ぞ思ほゆ新妻を家に残してゆく身にしあれば

峠茶屋人なしにして荒れはてし杉皮屋根ゆもるゝ天つ日

岩ばしりながるゝ水につかれたる足ひたしつしばしやすらふ

岩がねにせかれし水のたちまちに下り落つなり高滝なして

切り崖の上ゆ一すぢ流れ落つる滝のひびかひ岩間にこもれり

丸木橋わたりてあふげば布引きて落つる白滝ゑにかくごとし

滝壺に枝さしのべし紅葉木の若葉にかゝる水のしぶきは

人の世のさやりに迷ひかゝづらふ身を思ひつつ滝あふぐかも

くだくだしことも思はずはかなかることもねがはず一日遊びぬ

あかね雲はつかに残りかへりみる名張の嶺ろに月さしいでぬ
まろやかな月あふぎつ、夕がすむ名張山脈さかりゆくかも

母に（大阪より）

母の文読みつ、泣きぬ抱きつ、あやしますがに告げます文に
我が心母は知ります生きがたき世に迷ひつ、もだゆる心を
「信ず」とふ母の言葉の悲しさよ不幸なる身を思はざらめや
たらちねの母はしたはし妻をもつ身とはなれども稚子のごとくに

智子に（七月十四日・大阪より）

ひさぐゝに來し文見つ、偲ぶかな身ごもる妻のほゝのやつれを
一針の縫ひのはこびもかしこみて産衣ぬふらむはしきわが妻
すこやかな生命を享けよ汝が父は悲しき運命さだめによるほひ生くれど
汝が父は荒海渡る舟子かこなれやからくも生きて今の世渡る
昭和の御代の不忠の民草汝が父の罪のとがめをそ、げよ吾子よ

世の常の幸はねがはず我が希望のぞみたゞに託せり吾子よ汝が上に
吾子なれど大みたからとかしこみて妹もまつらむ生あれくる生命を

小柳陽太郎宛書簡（七月十六日・大阪より）

小柳兄、君の便りを読んで僕は泣くにも泣けぬ。余りにも運命は悲惨だ。何故かく僕らの上のみかゝる悲劇を神は与へ給ふのであらうか。寺尾の死以来、百武の帰還は僕らの最大の希望であつた。然し今はそれも失ひ、更に又僕らの師表とも仰いでゐた田所大兄を失ふとは。涙も出ぬ。僕は今嵐の中に掲げられた我らの旗が倒れ去つた事を感じる。一切の希望を失ひ、確信を失つて広野をさまよふ人の心が今痛切に怱おぼばれるのである。福岡で見た田所大兄の手紙、それが思へば僕にとつて最後の言葉であつた。その言葉は僕にとつて、死を予感せる先輩の祈念の言葉であるとはどうしても思へなかつた。そこには何時も田所大兄に接する毎に感じてゐた、眠れる者をも呼びめざめしめる焼けつく様な意志しか感じ得なかつたといふ事は、何といふ僕自身の精神生活の弛緩ちかんであらうか。今はかへらぬ過去の懺愧の情を百度繰返しなげくのみである。

君がどうして生きて行つてよいか判らぬと言ふ告白を、僕は悲しき事実ながら君と共にする以外に別に言ふべき言葉を知らぬ。然しながら僕は寺尾と共に

倒れたる友を嘆かずいつの日か吾もたどりゆく道と思へば

と今は亡き人らのみ魂に誓願するのみである。僕らのゆくべき道は常に「奥の細道」である。先覚者、それは僕らの思ひあがった言葉では無く、道に参ずるものの責務と運命を自覚する告白の言葉である。僕らの一生はこの一言につきるのであるまいか。成果を見ずして倒れゆくべき運命を負荷されてゐるのではあるまいか。そこに僕は日本の道の不可思議を信知せしめられる。

僕らの今迄やって来た事は何一つ成功しなかった。否寧ろ願ひしことが仇となつて僕らの上に絶えずかへつて来た。然し乍らそれをなげきはしない。そこに僕は道に参ずるものの運命を見るのである。

君が言ふ様に僕らは今道を見失つた。「国家再建ノ確信無ク」と告白した寺尾の心を今更の様に回顧するのである。僕は最近、僕らの学生運動は寺尾の死を以て完結したと感じてゐた。これは運動の成否では無く、寺尾の死こそは、国家の運命に殉せんと念願した僕らの信の正しき發露であつた。寺尾はそれを身を以て完成してくれたのである、と思つてゐた。今、田所大兄の病死を聞き僕は再び三たびその感を新たにするのである。東京に最後のいとまごひに行つた時、田所大兄は「僕はこの大東亜戦争で戦死する」と言つて居られた事等思ひ出される。

僕が学生運動が終つたと言ふのは、その自覚に立つて再び道を開かむとする決意の言葉である。

「連続無窮にして休止せざらむことを」と祈念の言葉で教行信證を結んだ親鸞の心を偲ぶのであります。僕らが再び第二の田所さんとならねばならぬ。そして田所大兄から僕らに受け継がれた精神の系譜を、再び僕らの手で継承してゆかねばならぬ、と僕は思つてゐます。自分の身の至らなさも忘れて。

今こそ僕らは思ひをひそめて、僕らの学生運動の源泉を回想すべきでは無いでせうか。君が「往年のやうな希有の交流をつゞけるのでないならば、僕らは結局一人々々ばら／＼に道を失つたまゝで死んでゆく外ないではなからうかとさへ思へます」と云ふ気持には共感されます。然し僕は一人々々ばら／＼になつても道を守らむとするので無ければ、もう集る価値も無いと思つて居ります。再び僕らは原始の孤独感を痛感しなければならぬ。その痛感から再びの同信生活は開展する事を確信して居ります。

色々と言ひたい事が一ぱいです。八月七日、百武兄の慰霊祭の由、或はそれには出席出来ぬかも判りません。その時は母にでも行つてもらひます。僕は二十五日から十日間ぐらゐ歸れるのは無いかと思ひます。

その間に出来たら合宿形式の追悼会をやり度いと思つて居ります。僕ももう永い事大阪には居りません。一週間程前宝辺が来て色々と話し合ひましたが、宝辺と二人が中心になって新しい仕

事を起し、「伊都之男建」の様な雑誌を今年中に出すべく相談がまとまりました。二人で奈良の郊外を六里ばかりさまよひ、薬師寺、唐招提寺、法華寺へと詣り乍ら二人で色々と話し合った事でした。思ふ様にはなりません、やれる丈はやって見ようと思つて居ります。江頭の家的事、三根の事、又末安の身体の事色々心配はしますが、どうにもならず居ります。

藤田則之兄から手紙が来て、明日ぐらゐ訪ねてくるだらうと思つて居ります。

では又。百武の家には今すぐ手紙も出せませんが、君から呉々もよろしく御傳へ下さい。末筆乍ら御母堂様によろしく。

小柳陽太郎宛書簡（七月十八日・大阪より）

「世間虚假、唯佛是真」と仰せられし太子の御言葉は今程しみじみと戴かしめられる時はありません。「眞」と言ふ讃仰は、虚假と痛感する時に始めて心の底から湧きいづる言葉であります。それはどうにもならぬと云ふ消極的な人生に対する悟りの言葉ではなく、かくせしめむと意志し願望する苦闘の底ひから、人間の無力を悲泣し呻吟する声であります。「世間虚假」その短き御言葉にこもる無量の思ひを憶念せしめられます。

僕らの今眞向ひつゝある運命は、それが如何に悲惨であらうとも、避くべからざる又替ふべか

らざるものと痛感する時に、そこに不退転の意志力を、我が胸の不安の鼓動の内にはつきりと認め得るのであります。小柳兄、運命に直面して生きてゆかねばならぬ。思ひきり運命の力でこの地上にたゞきつけられねばならぬ。地にはらばひて、大地の香をこの不安の胸に心ゆく迄呼吸せねばならぬ。かく信ぜしめられます。

「入信とは苦闘への轉信である」と亀井勝一郎は親鸞を読んだ感想文の内に書きとめてあります。光明の世界へと云ふが如き観念的宗教論ではなく、人生のなまなましい実相に直面してたゞろぐ心に、苦闘をも超えてゆかむとする意志力を與へしめられるのが入信でありませう。親鸞が「たまはりたる」信と云つたのは、意志力は論理的な反省又知的計量に依つて生ずるものではないといふ体験の告白でありませう。意志はものにふれて激發するものであります。その時の心理は知的計量を超ゆるものなることを親鸞は「たまはりたる」とかしくんだのでありませう。「憶念」と云ふ言葉はかゝる消息を暗示して居ります。かく思ひかく信じ、僕は与へられし運命を甘受して直進せんと祈念するのである。

悲しきこの世であひがたき師友に邂逅した機縁をたゞ感謝するのみであります。

では又。末筆乍ら御母堂様によろしく。

海底（九月十四日 大阪にて）

海上の嵐の音もこゝからは聞えない。

ほんのかすかな光線で物の存在だけは判る

けれども

それも奇妙に大きくなったり小さくなったり

して少しも固定せぬ。

時々大きな人喰鱗が水中を横切るけれども

岩陰にかくれてゐる僕を発見しさうにもない。

呼吸がだん／＼急迫してきた。

末安兄の病死を聞きて（九月二十日・大阪にて）

友よ今の時代に生くるはかくも罪悪なりしか

唯一の生命を守らむ願ひは

我が心に絶えざれども

行くに行かれぬ現世の岐路に

知覚を失つた五体は一切の運動を

拒否するのみである。

僕の肺臓の中に餘つた空気は

もう水面迄の保持にも足らなくなつてしまった。

それでも僕は惰性でじつと海底の

岩にへばりついてゐる。

海上の嵐はいよ／＼はげしくなるのに。

幾度か

立ちまどひなづみこし一年よ

思へば一切は虚假なりき

懺愧の思ひ百度くりかへせども

過ぎし日の行跡はさくべからざる

重荷となりてかへりきたりぬ

あゝ――

野よ

山よ

木々よ

ゆくにかはらぬ自然の推移も

心を酔はす人生の歓楽も

たゞ悲哀の象徴

共感の信樂しんぎやうは遠く去り

孤独の悲哀は

忘恩の苦痛となりて

累積されぬ

あゝ過去は失はれしか

いまはの焦慮に言葉も出でず

今空間に手抱くはたゞ

胸奥に残されし

消えざる印象――

唯一の記念――

あゝ亡き友らの面影よ

(昭和二十二年)

をりにふれて(五月八日・八代にて)

朝鳥の鳴く声すがし戸のひまゆさしくる光にねむりさむれば

目ざむれど立ちがてにして一ときをふしどにこもり鳥のねをきく
たまさかにとく起き出でし我を見て驚きしごと妻のゑまふも
外にいづれば朝影させども霧たちて日奈久山脈影をかくせり
裏畑のねぶの長葉におく露のうすひかりつ、朝日さすなり
新たなるよそひせしがに目にふる、ものみな光れり朝影うけつ、
久しくもくゝもる思ひ朝影に消えゆく露と晴る、うれしさ
歌心胸にわきくもこの朝明吾子いだきつ、紙とりいだすに
柿の木の枝うつりつ、鳴きかはす子雀を見て吾子は笑へり
ものいはぬ吾子のゑまひのかなしさよ汝がよろこべば吾もたぬしき
今朝見ればむらさきの花散り過ぎぬ藤の茂葉の色まされども
あはたゞし日々のつとめに藤浪の花のうつりも知らで過しつ
朝餉の支度と、のひぬらむくりやより妻は呼ぶなり歌つくる吾を
遠山の谷間しるけく朝霧のなほ残れども空は晴れたり

(昭和二十三年)

病床の友に

春が来たけれどなんと云ふ心寒さか

今日も冷え／＼とした風が野を吹き流す。

友よ

み病いかに

長い病床生活につかれきつて居るのではないか

と心配して居た僕は

君の手紙を見、その内に表現され又表現され

つゝある君のたゆまざる生のいとなみに

驚きと、喜びのまなこをみはるのみである。

思へば歌もよまず文も書かず

過し来し過去半年よ、

その間に僕は人の子の親となった。

生業なつぎの道のけはしさに

悶え苦しみつゝも

もの言はぬ幼子のゑまひは

僕の唯一の慰安であつた。

生れし子のために——その思ひは

直接に御国につながむ

僕はかく信じて居る。

祖先以来幾年か守りつゞけ来りし

日本国民の家庭生活、

その中に生き且つ死ぬる

名も無き民草の勤労生活に

僕は今全身心を没入して

奮闘しつゝあるのだ。

僕は生れし子を「恭子」と名付けた。

つゝしみてはぐくみ育てむ。

僕は親の願ひをその名にこめたのである。

友よ！

過去六ヶ月僕は歌を失った詩人であった。

絶えず空のはるかにものを思ひ続けながらも、

現実の厳しさは僕から歌をうばったのである。

されど友よ！

僕は子守唄を唄ってゐる。むづかる子をあやしつ

つ唄ふ僕の唄はとだえ勝ちではあるけれども

それから僕の新しい歌が生れて

くるのであらう。

友よ

揺籃の日の思ひ出をこめて

過去一切の体験をこめて

唄ふ僕の子守唄を聞きたまへや

芽立つ木々

やはらく大地

されど未だ遠い未来であらう

僕らの上に

春の日ざしのふりそぐのは。

(昭和二十六年)

別離 (五月一日)

汽車はゆく筑紫の野辺を

菜種咲く夕ぐれの野を

過りこし

町、

村、

野、

畑、

川ぞひの長手道をたどりゆく人も

夕べの仕事に忙しき街の人影も

やがて夜の闇に没し去る、

そして

野末に明滅する燈あかしの

また、きのみが

人間のはかなきいとなみを

記念するのだ。

さらば夕映の遠空に向つて

言ひ忘れた一言を告げよう。

「さやうなら——」

球磨のひとり

(昭和二十八年)

小田村寅二郎大兄宛書翰(四月一日)

度々御連絡を戴きながら本日迄返事が遅延し誠に申訳ありません。「新公論」有難く拝見致しました。以前より宝辺、小柳君達と表現機関紙の発行を企図して居りましたが、今回大兄の御骨折に依り其の希望が実現せられ感謝に堪へません。終戦後種々の企図を有しながら、それが今日迄全て中断してしまつて居りますのは小生の怠惰の至すところと慥愧に耐へません。「新公論」に就きましたは、遠隔の地に居りまして十分な御手伝も出来ませんが、今後小生も発刊される大兄達と一緒に出来るだけの協力を致し度いと考へて居ります。本日差当り金九千円也興風会口座に振込みして置きました故御受納下さい。特別維持会員として毎月三千円を負担致し度いと考へ

て居りますが、其の他資金面でお困りの事がありますれば御遠慮無く御申出下さい。宝辺其の他当地の林君達と相談して出来るだけ御協力を致します。(略)

小田村寅二郎大兄宛葉書(八月二日)

御手紙有難く拝見致しました。会合の件は二ヶ所でやる事に決定しました。山口高商出身者七名、それに福岡の小柳・小林・それに小生と川井君で八月十七日夕方より八月十九日午後迄、山口県吉敷郡大道村潮湯旅館にて会合します。大道は山陽本線三田尻駅より一駅下関寄りです。学生時代小生達が屢々合宿し又清遊したところでありました。何か「新公論」に投稿する様な感想なり論文を持ち寄り度いと計画して居ります。宝辺も十分元気になってこの二、三日前電話した時は医者が許せば日帰りでも参加すると言つて居りました。

次に八月二十日から八月二十二日午前迄は福岡市油山正覚寺内で、これは小生も川井も大道の婦りを立寄り、それに福岡の二人、又古賀、高橋外の諸兄にも連絡して居ります。この時は旧軍需管理部及び玄洋社の方々が毎年集つて、寺尾君及び同時に自刃した長島中佐の法要をしてくれるので、この人達とも話し度いと思ひます。でもし御暇が出来ますれば福岡の方へと、貴兄の御来訪をお待ちします。(略)

(昭和二十九年)

合宿案内（八代・春光寺合宿）

終戦後既に拾年の歳月が経過せんとして居ります。

この間に終戦当時の混乱と困窮は平静に復し、占領の拘束より独立と自由に、時代は進展しつつ、あるかの如く外見されます。然し又同時に幾百の論議と多大の努力が集積されたにも拘らず、終戦当時にもまさる国家と民族の危機が醸成されつゝある事を、心ある者は直視するでありませう。政治も、教育も、文化も全て刻々と崩壊の深淵に近づきつゝあると懸念するのは僕らの徒なる杞憂であらうか。

かくして僕らは、僕らが学生時代に希求し念願せしものは、終戦に依る国家生活の激変にも拘らず、国家と民族の存続する限りは、不変の問題として、この国土の上に継承すべきものなることを確信するのであります。勿論終戦後僕らは夫々の職業と家庭に分れ、その経験内容も複雑異常化して居ります。然しそれらの相違を越えて一つに結ばれんとする希求と願望こそ、この時代を開導する鍵となる事を確信します。

こゝに昨年の大道合宿に引続き、年一度の会合を左記要領により計画しました故、萬障繰合せの上御参加の程御待ち致します。

記

一、日時 集合、八月十四日(土)午後一時、解散、八月十六日(月)正午

一、合宿地 八代市外、宮地村麓^{フット}春光寺(略図参照)

一、合宿経費 三日間、五百円也

一、合宿計画の大要 東京より小田村、南波兄外の参加がある予定に就き、これら諸兄の講義を中心として実施する。

一、附記 (イ)我々のみの合宿に留めず、他に志ある方を勧誘下さい。既に川井修治兄より学生二、三名の参加がある旨連絡がありました。

(ロ)準備の都合があります故希望者は至急御通知下さい。尚八代駅到着時刻を通知下されば出迎へます。

(昭和三十一年)

国民文化研究会主催第一回合宿教室（霧島）の報告書『混迷の時代に指標を求めて』送付に添へて

終戦以後僕等が集る度に回顧されることは、戦死せる友らのありし日であり、更には学生時代の合宿であった。戦後十数年、それ〴〵職を別にし、相違せる体験を重ねつゝも、つながる一点は、そこにたとへ相対立する意見が交はされようともし、否定し得ざるものとして、僕らの胸奥に刻印されて居たのである。

合宿！その一語に僕等の内奥の感情と意志は統一された。そしてその実現の為に種々の努力が重ねられたのである。更に全国の諸友より激励の文や貴重なる御寄附を戴いた。それらが如何に僕らを力づけたことか、謝すべき言葉も無い思ひで居りました。

霧島の霊峯の一角で開催される合宿には僕等の内にも、参加し得なかつたものもあつたが、参加者全員は来り得ざりし友、又亡き友らと共にある思ひに終始したのである。勿論合宿の成果には反省すべき点が多々あるけれども、少くとも僕らの手でかゝる合宿を開催し得たと云ふ事實は何にも勝る得難き体験であつた。思考の空轉と反省の反復より、自ら一步前進すること、そこにおのづから道の開けくることを再び痛感したのである。

失はれたる国家国民生活の復生の為に、既に第二回目の合宿が計画されて居る。かくて僕らは

さ、やかながら消えざる生命の火を掲げて、着実に前進したいと念願してをります。

ここに無量の思ひをこめて合宿記録を貴兄に御送付します。御批判と御助力を心より御願ひします。十一月十八日（加藤敏治記）

（昭和三十七年）

二十年前友らと登山せし日を偲んで

——第七回阿蘇合宿教室詠草

さす日ざしなほ強けれど窓辺より吹くそよ風は肌にすがしも
疲れたる身もよみがへり窓辺より大阿蘇が嶺を眺めやるかな
中岳に燃ゆる火を恋ひ友あまた集ひ登りし日ぞ偲ばるる（註・40頁参照）
中岳の嶺ろのうへ近くおく雲の動くともなししばし見れども
福岡ゆ我は来りて佐賀の友熊本の友らと共にのほりき
火を噴きし名残りとどむる岩肌をつたひ登りき友らとともに
いただきに立ちて歌ひつ歌声の離れし友らに届けと祈りて

春浅き大阿蘇が嶺の草千里若草の上に酒を酌みしか
酒に酔ひ声たからかに歌うたひをどりし亡き友偲ばるるかな
まなかひを去らぬ面影たまきはるいのちのかぎり我は忘れず
つきせざる思ひに仰ぐ中岳の恋しき煙見えずよ今は

(昭和三十八年)

第八回雲仙合宿教室詠草

我が友ら待ちてあらむと心せきあはたしくも乗れるこの船
待ちわびし集ひ明日より始まると思ふ心のぎはしきかな
あけくれにたつきのために働きて疲れし身にも力湧きくる

(昭和四十一年)

第十一回雲仙合宿教室詠草

たまさかに相まみえては語り合ふ友のなさけにすがりて生き来し
我が家のゆく末今はかへりみずこの一筋の道をたどらむ
むらぎもの心ゆ心につたへゆく教への道をたどらむ我は
我が生命かたむけつくしてくいなき道とし信ず教への道は

(昭和四十二年)

中岳に登る——第十二回阿蘇合宿教室詠草

見あぐれば前ゆく友の姿遠く真日てる岩路ゆくにはしき
山はだをつらなり登る人影のうちにまじりて吾子も行くらむ(註・吾子は長男邦泰君)
いただきはま近しと思ひ足早に登りくれどもなほも道あり
道一つかなたに見ゆる中岳の大き火口ゆ煙立つなり
をやみなく立ちくる煙のほりゆき果てはつらなるみ空の雲に

(昭和四十三年)

韓国岳にて——第十三回霧島合宿教室詠草

大浪の池をし見むと韓国の山路つたひて息せき登るも

つかれたる身を草原に横伏してやすらひをれば鳥のなくなり

まなかひの山肌低くかすめつつながるる雲足げざやかに見ゆ

(昭和四十四年)

第十四回阿蘇合宿教室詠草

空晴れて東に雲はうつりつつ阿蘇国原は夕まけんとす

夕もやにうす霞みつつ頂は雲にかくろひ中岳の見ゆ

(昭和四十五年)

年賀状に

五十才の新春を迎へるにあたり出征前二十才頃つくった拙い詩を思ひ出してをります。おかげで長女恭子は去る十一月結婚、長男次女は上京在学中の為、今年の元旦は初めて母と私達夫婦の新世帯となりました。

青春をふたたび取りもどして新出発したいと思ひます。

くめども くめども つきせぬ清水よ

忘るるなかれ旅人われを

木の間まがくれを流るる水よ

人に知られずこの奥山に

岩根つたひて人住む里に流れゆくとも

こもりてあれと祈りし我を

はてなき海にすゑは入るとも

船中にて——第十五回雲仙合宿教室詠草

船ゆくに有明の海波たたず雲仙岳はうすがすむなり

友らみな待ちつつあらむと心せきゆく舟足ももどかしきかな

一とせを会はず過ぎこし友の顔偲びつつゆく夕づく海を
若き友あまたつどひてにぎはしく語らふつどひ偲びつつゆく
日々のつとめあはただしくてつかれたる身にも力のよみがへるがに
有明の海の底ひの岩がねとゆるがぬ雄心よみがへれ今

(昭和四十六年)

長内兄を偲びて——第十六回霧島合宿教室詠草

西空に残る光のうすれつつ薩摩国原夕ぐれにけり

遠空にかすかに見えし開聞ははやくも隠れぬ眺めあかぬに

桜島に夕居る雲を眺めつつはるかに君を偲びをるなり

北海に離れてあれば来ることもかなはぬ君を偲びをるなり

七夕のちぎりにあやかり一年ひとしせに一度の会ひを楽しみをりしに

君が顔見えぬさびしさにぎはしく集ひし友と語らひをれども

(昭和四十七年)

宝辺兄に——第十七回阿蘇合宿教室詠草

吹く風に夏草群はそよぎつつ阿蘇国原は夕まけにけり
夕鳥の鳴く声絶えて虫の音のしげくなりゆく日ぐるる原に
にぎはしく友らと語り笑ひつつあれども淋し君しあらねば
なくさめの言葉も知らにただ君のたへえぬ苦しみ偲びつつをり
君います方を思ひて眺めやる外輪山は夕がすむかな

(昭和四十八年)

年賀状に

あたたかき日和つづきてわが住める筑紫国原年は暮れゆく
雪深き北国に住む友どちの上しのびつつ年を送るも
世はかはり時の流れの速けれど年暮るる空のどかなるかな

幾山河越え来し思ひにかへりみる過ぎにし日々をなつかしみをり
嫁ぎゆく日も近くしてはなやげる吾娘と迎へむ新たな年を
早けれど梅も咲くべし幼しと思ひし吾娘の嫁ぎゆく日は

第十八回雲仙合宿教室詠草

谷間ゆ湧きこしものか山肌をつたひて流るる白雲のあり
雲たえししばしの間なつかしき妙見岳の嶺あらはれぬ
嶺近く群がり見ゆる人影の内に友らもまじりてあらむ
若きはたのもしきかな妙見の山の高きも徒歩より登りぬ
先ゆくも後につづくもむらぎもの心一つにゆかむこの道
帰り来る友待ちをれば樅の木の木群がくれにほとどきす鳴く

(昭和四十九年)

年賀状に

火の国に移り住ひて三十の年月過ぎしをふりかへりつつ

八代の言葉なまりをまねするをかしと妻は笑ひしものを

旅路より帰りきたれば耳なれし言葉なまりもなつかしかりき

今はわが故郷と思ひ重きつとめになひてはげまむ力の限りを

また

老いませる母すこやかにいます身の幸思ひつつ年を迎へつ

孫あやす妻にも老いゆくかげ見えて新しき年我も重ねつ

おきふしの多かりしかなさまさまに泣きみ笑ひみ年重ねつつ

孫二人持つ身となれど若き日にいだきし願ひ忘れえぬかな

第十九回霧島合宿教室詠草

おくれたる友をはげまし呼ぶ声か谷越え聞えくかすかなれども

見上ぐれば高千穂の嶺雲おほひいつしか友らの姿かくれぬ

雨ふらずあれよと祈りけはしかる山路ゆくらむ友しのぶなり

若き友らに（十二月二十六日）

滅びにし城の櫓はあともなくしるしに植ゑし老木立つなり

古城ふるしろの堀面の浮草色あせれど枯れ果てもせず年を越すらむ

堀端の道を歩めばまき榎の実赤くみのれり冬枯のなかに

若き友あとつぎ来るをうれしみと榎に生ふる赤き実を見る

形あるもの滅ぶともかはらざるまごころもとめ友よはげまむ

（昭和五十年）

年賀状に（岩尾市長へ）

身を粉にし心を砕きつとめます君にしたがひ吾もゆくなり

かへりみて君の心に答へえず恥ぢ入ることの多かりしかな

むさぼりて人よりうばふあさましき心はえらばず苦しかれども

とほしくもたがひに分ち助けあふ心豊かな町づくりせむ

教へられみちびかれつつ君とゆく道はろばると開けゆくらむ

湯野朋子さん（秘書）の結婚式に（三月）

白梅の固きつぼみもほころびて春来るしと君嫁くなり

こまやかに心をくばり吾がためにとめたまひしみ心忘れじ

今日よりは二人手を取りゆく道ぞけはしき山路もこえてゆくらむ

先立ちし母君見送りますらむ花やぐ君の晴れの姿を

第二十回阿蘇合宿教室詠草

朝鳥の声も聞えて目ざむればまばゆきまでに日影さすなり

草の端に残りし露のうす光り雨雲晴れて心すがしも

若き友も待ちてあるらむ中岳に登る日なるを雨もあがりぬ

草原を歩みてあればをちこちにうす桃色の朝顔の咲く

(昭和五十一年)

たよりのはしに(七月)

天地のみめぐみ人のみ情も受けて病のいゆるかしこさ

輿風会慰霊祭献詠(九月)

国守る大き力となりぬべき友を多くも失ひしかな

夜もすがらしめやかにふる秋雨の音を聞きつつ亡き友偲ぶも

喪中欠札挨拶状に(註・岳父和多山喜一氏十二月十九日逝去)

あたたかき日と思ひしに音もなく夕かたまけて冬時雨ふる

暮れはてし空光りしと思ふまに時じくに鳴る冬の雷

苦しき悲しみもありてきびしさのつづきし年も暮れてゆくなり

再びは立つことかたしと嘆きしに人の情によみがへりきぬ

空しくも過ぎし一年かへりみて今は嘆かず春を待ちつつ

養ひし力つくしてみ情にこたへむ願ひに春を待つかな

(昭和五十二年)

長内兄に(二月二日)

北風の寒き朝明はとく目ざめ母みとります君偲ぶかな

親思ふみ心あつき君なれば安らぐまなくみとりますらむ

君が母病みたまひしと知りつつもみ便りもせずおこたり重ねぬ

いくたびもみ心こもりし歌よみて送りましたまひぬ我が病みし日に

わが友のあつきみ情忘れしかかへりみて我がおこたり恥づるも

病みたまふ母君みとり続けます君つかれますすらむいとひたまへや

珍しく小雪ふるなり底冷えのきびしき朝明と思ひをりしに

みちのくに積りし雪のとく解けてみ病いえよとただ祈るなり

長内俊平兄に（三月十一日）

病む母のきびしきみ姿よみませし君なくさむるすべなかりけり

くしびなる力にみ病いゆる日もあれよと遙かに祈りをりしに

靈たま送るみまつり悲し北国も春のおとづれま近きものを

去りませし母のみ魂の後追ひて行くがに君は嘆きますらむ

年老いし母もつ我には人ごとと思ほへぬかな君の嘆きは

手を取りて共に泣かむをいや遠く離さかりてあれば君偲ぶかな

長内兄を思ひて——第二十二回雲仙合宿教室詠草

北国の大間のみ崎に君立ちて我らが集ひを偲びませしか

君が影見えぬさびしさにぎはしく友らとともに語らひをれども

長伏なががしの病いえゆく喜びを君につげむと思ひ来にしを

昨年こぞの夏つどひのにはゆみ情のこもるみ便りたまひし君はも

今年はもつどひし友のみ名もそへ君なぐさむる便り送らむ

みちのくの友偲びつつ窓越しに眼路をおほひし霧をながむる

寺尾兄三十三年忌に（八月）

わが友の生命をたちし油山泪なみだが原はらに真日まひてらすなり

君が名をきざみし石ぶみ仰ぎつつ真日まひてる山やまべに靈祭れいさいるかな
夏蟬なつせみの鳴く音もたえて物音ものねの遠とほざかるがにしづまるひととき
現いまし世よにかたみと残のこせし君きみが文ふみよみゆく聞きけば涙なみだあふれく
ことの葉はにこもりて残のこる亡なき友とものかなしき願ねがひ忘れて思おもへや
わが友も同じ思おもひか歌うたをよむ声こゑもつまりて泣なくがごとくに
生き死しにのけじめを越こえて亡なき友ともも我われもつながら一信いっしん海うみに

（昭和五十三年）

年賀状に

波風なみかぜのしき吹き荒あれておきふしのはげしき年としも今は暮くれゆく
いくたびか人の情なさけにささへられよみがへりけり迷まよひの底そこより
末すえつひに道みちし開ひらけむ良よき人ひとのもとにしありてつとめ励むまば

ちぎれ雲はつかに見ゆれど冬日さす空晴れわたり年は暮れゆく
先だちし友らのねがひこもりたる歌文うたぶみいづる日をし待ちつつ

田坂順子ブラジルより来宅（二月）

遠海原越えて来にしか幼顔残れる君の面輪かほ愛しも

さまざまな嘆き悲しみ苦しみのあとも見えずよ明るき笑顔に
再びし会ふ日を待たむすこやかに愛いとしき順子よしこよ真幸まゆきくあれかし

『いのちささげて』出版される（三月）

海へだつ雲仙嶽もあざやかにま近くも見ゆま澄みし空に

亡き友らよみがへり来て語るがに現しく思ほゆ刷文読めば

日の本のますらたけをのゆく道をふみて倒れし亡き友偲おぼばゆ

寺尾兄慰靈祭に当りて（八月二日）

天草の島山の上に入りし日の光残りて夕べ暮れゆく

魂まつる日も近づきて亡き友を偲びつつあふぐ夕ぐれの空

亡き友のみ靈かあふぐ夕空に一つ星見ゆ雲のたえまに

若きらの後つぎつぎにつぎくると見守りますらむ君がみ魂は

油山に立つ碑いしぶみもまなかひに浮び来るなり君を偲べば

偲ぶだに胸痛きかな自からの生命をたちし君が雄心

亡き君のあとしたひつつ一すぢの道をしゆかむ友らとともに

霧雨のふりそめにしか空あふぐ我が面ぬるはつかなれども

第二十三回阿蘇合宿教室詠草

亡き友とともに登りし若き日の思ひ浮びく今もさだかに

火を噴きし昔偲ばす岩山の道なき道を友と登りぬ

亡き友のみ姿振舞あざやかに目には浮べど会ふ術もなし

先立ちし友らの残しし願ひはも我が胸に生く世にある限りは

亡き友の魂まつる時近づきてひぐらしの声しげくなりつつ
雨降らずあれよとただに祈りつつ魂まつるべき時を待つなり

興風会慰霊祭献詠（九月）

もだえぬし疾風速はやてのき白雲もはつかに見えて夕空晴れゆく
東の空に残れる黒雲の上に清しき月影見えきぬ

亡き友をしぬびてあれば秋空に千年ちとせをてらす月光るなり

語りつゝ酒をくみつゝ亡き友といくたびか見し月の影かな

霧島の出湯の里に亡き友と眺めし月影かはらず今も（註・43頁参照）
みまつりにまゐりえざれば東の空あふぎつつ亡き友偲ばむ

（昭和五十四年）

年賀状に

さまざまに思ひわづらひ泣き笑ひ年過ぎゆくが早くもあるかな

身にあまる重き務めを果さむとはげみきたれど力足らはず
至らざる吾を信じますみ心にこたへむ願ひにつとめ我は
良き人にしたがひつとめむ草も木も萌ゆる春迎をひたに待ちつつ
天地のめぐみと人のみなさけをうけつつ新たな年迎ふなり
白菊の花を捧げて先だちし友偲びつつ年迎ふなり

折田豊生君へ（二月廿四日）

春さりて白梅のごと美しき良き妻めとりし君をいははむ
二人して喜び悲しみ苦しみもわかちあひつつまさきく生きませ

和多山慶子さんに（三月十九日、義弟昭三病死）

天地もくづるる思ひに泣き伏して嘆き悲しむ妻子偲ばる
なくさむる言の葉もなく悲しみの涙をともしに流すのみなり

田之上正明君へ（四月二十八日）

青葉吹く風すがすがし新しき君が門出を祝ふごとくに

大球磨の川の流れと未長く幸つづけかし若き二人に

第二十四回霧島合宿教室詠草

み軍にいづる日近み友らと別れ惜しみて旅ゆきしかな（註・43頁参照）

大浪の池をし見むと岩根ふみ友らと山道をたどりゆきにし

静もれる池の水面に影うつし山の紅葉は美しかりき

おのがじし手折り来りしもみぢ葉を部屋にかざりて酒をくみしか

酒によひゑまひ手たたき歌ひにし楽しき宴思ひ出さるる

再びは来る日もあらじと歌ひにし亡き友忘れじ生くるかぎりは

亡き友を偲びてあれば鉾杉の木群がくれに日ぐらしの鳴く

興風会慰霊祭献詠（九月）

秋浅みてる日まばゆきさ庭への木立がぐれに蟬のしき鳴く
生き残る身を嘆くがに声かぎり蟬なきしきる友なしにして
み祭りの日も近づきて亡き友を偲ふ思ひのいやましつるも
亡き友と今なほともに一すぢの道ふみゆくがただにかしこし

いく年の願ひかなひて —— 一條浩通君の墓に詣でて ——

十一月一日朝六時二十分盛岡駅に到着

いねがての夜汽車の旅ゆはるけくも訪ね来りぬ友のふるさと
昨夜よべの間の雨もあがりて朝空に淡き光のさしそめにけり
君住みし所はいつくぞ朝冷えの盛岡の町たもとほりつつ

古柳岸かべに生ふる北上の川の流れにこころひかれつ

枯落葉みづも水面に浮び音もなく北上川は流れゆくなり

亡き友のふる里なれば町並みもゆきかふ人もなべてなつかし

會議迄に時間あり、盛岡城（一名不來方城こすかたじょう）に登る

あがなひし地図をたよりに盛岡の古き城あと訪ねきたりぬ
なだらかな坂道めぐり城山に登り来れど人影もなし

秋雨に色さえまざる紅葉木の群立むれつ見れば疲れわすれぬ

紅くれなゐは燃ゆるがごとくま黄なる色もさやかにみちするなり

亡き友が朝夕眺めし岩手山雲にかくろひ見えず悲しも

つらなりて雁飛ぶ方見えねども岩手の山を偲びやるかな

天守閣の跡にいこひて亡き友がこの世に残せし歌をよみゆく

君が歌くりかへし読みありし日を偲びてあれば百舌もす鳴きしきる

在りし日に君いくたびも登りけむ不來方の城去りがてぬかも

會議終了後、御遺族と待合はせ募參す

我が友のはらからなればなつかしく心せきつ、待ち合はすなり

み便りをいたゞきまつり面影を偲びてありし君とまみえぬ（妹のお様）

亡き友の面影に似るはらからのみ姿見れば涙あふれく
み子もまた弟君もともなひて訪ねきませしみ心かしこし
み墓べにみちびかれゆく車内語るはたゞに亡き友のこと
とりどりの秋菊の花そなへつつ今まゐるなり君が奥津城
いく年の願ひかなひて君眠る墓辺にたてばうつともなし
目をつむりをろがみをれば笑みませる君が面影うつしくも見ゆ
先立ちて君世を去れどももろともに誓ひし願ひ忘れて思へや
いつの日か会ふ日もあらむ先ゆけど君待ち給へやおくれし我を

弟真通様宅にて

はらからは語りたまへり亡き友の幼き頃のつきぬ思ひ出
満洲より山口までの五年の思ひ出吾も語りつづけぬ
別れにと君が教へし北国の民謡なつかしく思ひ出しつつ
いとし子の肌着にしあれば捨てまさずつくろひつづけし母君偲ばゆ
今はただくやまるかな怠りて友の母君に会ひ得ざりしを

いくたびか言葉つまりぬ亡き友の思ひ出語れば涙あふれて
語れども語れどもなほつきせざる思ひ残りて別れかねつも
かたはらに亡き友います思ひして秋の長夜もいつかふけゆく

十一月二日朝、再び一人墓参し、盛岡を発つ

盛岡をたつ日の朝明見放くれば空晴れわたり岩手山見ゆ

白雪のはやくも積る岩手山峯に一ひら雲かかるなり

別れをば惜むがごとし岩手山きのふは雲にかくれしものを

再びもまうで来りぬ去りがてに君が眠れる奥津城どころ

君眠るみ慕いづこと戸まどひてさがし歩きぬしはしのあひだ

黄しるき撫ぶなの木立のそば近く君のみ墓はたたずみであり

墓石に我が手をおきつつ亡き友のみ名をし呼べば涙あふれつ

いとまつけ墓辺を出づれば蝦夷松えぞの木末こぬれかくれに百舌ひゃくぜつのしき鳴く

車中にて

みちのくの荻田広がり岩手山汽車の窓より見えかくれつつ
再びもたづねむ願ひ抱きつつゆくみちのくの秋深むなり

(昭和五十五年)

年賀状に

備前のや生れし国ゆ移り来て三十路あまりの年月を経ぬ
深かりし縁えだしあるらむ若き日におとづれをれども暮し住むとは
住みなれし八代の地は故郷となりて愛かなしく美うるほしきかな
奥津城わづつきもこと定めて新しく家づくりして年迎ふなり
子ら三人すべてを育て巣だたせし思ひ出多き旧き家出ぬ
年老いし母なによりも喜びていますがうれし家づくりして
数多き人のみ情みめぐみに我が家やできぬと思ふかしこさ
為すことのさには残ればつたなくもつとめ励まむ誠つくして

昨年末、本籍を岡山市より移しました。また三十数年住みなれた家よりも移住しました。倍旧の御指導と御鞭撻を懇願します。

瀬上安正兄を偲びつつ——第二十五回雲仙合宿教室詠草

仁田峠登り来れど白き霧に目路閉されぬ小雨ふりつつ

去年こぞまでの集ひにつねにありませし君がみ姿見え悲しも

世を嘆き正しき道をときませし力こもれる君が目見まみはも

現し世に君が留めし雄心を受け継ぎゆかむ残りし我は

興風会慰霊祭献詠（九月）

昨日まで聞えし蟬の声たえて日暮れし庭べ秋虫のなく

夕闇の深まりゆくに呼びかはし鳴くか虫の音しげくなりつつ

亡き友ら喜びいまさむ若きらのたゆることなく後つぎきたるを

亡き友ら偲びてあふぐ秋の夜なかせらの中空高し三日月の影

(昭和五十六年)

年賀状に

家近く流るる球磨の川風の寒さつのりて年も暮れゆく
門の辺に植ゑしもちの木梢こすえにも赤き実うれて年は暮れゆく
もちの木に去年こぞは寄り来よこしひよ鳥のつがひ待ちつつ年は暮れゆく
おだやかに年暮れゆけどいや重き務め思ひて心正すも
つつがなく六十路むそぢも越えつ畏みて来こむ春迎へむ心あらたに

螢狩り(六月六日)

三日月は西に傾きいつしかに日は暮れはてぬ語らひをれば
時遅くなりしが故に見えぬかと案じつつゆく螢求めて
細谷のあひだを流れ下りくる水無川に螢見にゆく
若き友等と語り合ひつつ川沿ひの道をしゆけば螢火の見ゆ
水の辺の草むらかげにも川岸の木立ちにも見ゆともし螢火

水清きところにぞすむ螢火を眺めてをれば心静まる

第二十六回阿蘇合宿教室詠草

病みたれば阿蘇の集ひにゆくこともかなはじと思ひ悶えをりしに

幸ひに熱さがれるをかしこみて友待つ集ひに急ぎ来りぬ

三人の幼き孫も見送るとしたひ来りぬ宿の門まで

さらばとて手振り別るれど我が影の見えずなるまでたたずみをりしか

帰る日に

帰る日にうれしも空は晴れゆきてま陽ひてらすなり阿蘇の国原

見はるかす青田の上に影おとし一ひらの雲うごくともなし

つぎつぎに友ら帰りて一人居の窓越しかに聞く蟬の音かそけし

横なびく雲にかくろひ頂はかくれてあれど中岳も見ゆ

中岳や登る煙をしぬびつつ去りてゆくなり集ひ終りて

瀬上安正兄三回忌に（九月十九日）

若き友の知らせを受けてみ祭りにきづきし我をたゞに恥ぢつつ
ありませし日のごとさはに若き友ら集ひますらむ君をしたひて
み祭りにまうでえざれば亡き友の遺せし言の葉読みつつ偲ばむ
木がくれに散りや果つらむ桜花よませ給ひし大御歌はも
大御歌をろがみよみつゝ先ゆきし君がありし日偲びやまずも
亡き友も残りし我ももろともにつながりてあり祖国の生命に

興風会慰霊祭献詠（九月）

み祭りの日近づくにあふぎ見る空にしるけし夕茜雲
つぎぐぐに先立ちゆきしみ友らの面影思ひ出浮ぶうつつに
すぐれたるみ友ら多く倒れしを嘆きしやまず老いづく我は
亡き友のあとしたひつつ一すちの思ひ定めし道をゆきなむ

大道だいどうに行く車中にて（十月十一日）

幾年のねがひかなひてゆく旅の汽車のさ揺れに心はずむも

川渡り稔り田を過ぎ町よぎり汽車はゆくなり筑紫国原

ゆるやかに青空広がる我が目指す東の方に雲かかれども

いかばかり変りしものか年をへて大道浦を偲びつつ行く

大道の浦曲うらまわで歌ひし亡き友のみ歌よみつつ旅路ゆくかな

大道にて（同日、宝辺正久君とともに）

心知る友とつれだち周防のや大道浦を訪ね来にけり

秋雨のそほ降る日なりきみ友らと初めて訪ねし四十年よそとせまへは

町並みも変りてあればとまどひてさがしあぐねつ目ざす家居いへを

人に聞き見つけし家居しばしの間たたずみ眺めつなつかし家居を

幾度かおとづれ泊りし湯の宿の家は残れり古びてあれども

真砂まさごなる浜は削られ石堤いしづみの目路をさへぎり見えずよ海は

部屋へや内ゆ素足で浜辺におり立ちて散らばる白貝拾ひしものを

わづかにも残りし松に波寄する浜辺につづきし松原偲ばゆ
石の堤にあがれば遠く昔見し沖の鯖島明かに見ゆ

鯖島の沖つ海みはろかにうす霞みほのかにも見ゆ筑紫島山

夕風も吹かず入り海なぎ渡り亡き友偲びて立ち去りかねつも
人の世はうつりゆくとも亡き友の残せし願まごひ万代まごよまでに

(昭和五十七年)

年賀状に——御題「橋」にちなみて

球磨川に橋もかかりて新しく我が住む町も開けゆくなり

かよひ路の橋にぎはしも朝あしたには車や人らつづき渡りて

人らみな橋足早に渡るなり川風寒き師走の夕べを

万葉に名を留めにし水島も川下しもに見ゆ橋の上より

海中わたなかゆつさせず湧きし水島の真清水涸れぬ世はうつろひて

移りゆく世をば嘆かじ変らざる人の誠を信じて生きなむ

宝辺正久兄御尊父の逝去を悼みて（六月三十日）

深かりしえにしと共にたまはりし厚きみなさけ忘れて思へや

再びは会へぬものか亡きあとを慕ひて拜をえがむ野辺の送りを

天地もくづるる思ひにみまかりし父を慕ひて嘆く友はも

宝辺兄へ返し（八月廿六日台風九州に接近）

つきせざる力湧きくもくりかへしみ心こもるみ歌をよめば

かばかりの病に伏しておこたりの日々を過ごすを嘆きつつをり

おそろしき病にたへてますらをの雄心つらぬく友あるものを

いたづらに思ひ迷はずこれの身はゆだねてあらむ神のまにく

はやて風近づくしるしか夕空の雲足早し雨もふりつつ

かへし（宝辺、山田、小柳兄に九月十二日）

病む我をなくさめたまふ友の文つづき来るなり秋風にのりて

み文またみ歌をよめばみ友らと相見語らふ思ひすうつしく
友の歌の高き調べのつたはりて胸の奥がゆ力湧きくも
思はざる病に早く気付きしも亡きみ友らの守りなるらむ
とくいて力の限りつとめむと祈る思ひに病養ふ
夕ぐれの秋日うけつつうろこ雲はつかにうつらふ友住む方へ
三ヶ月は入院することになるでせう。

興風会慰霊祭献詠（九月）

若くして斃れし友ら偲ぶかなみ祭り近き秋の日ぐれに
六十路こえ年重ぬれどみ友らと立てし誓ひを忘れて思へや
亡き友のみ墓つぎつぎにまうづる日を待ちのぞむかな御代をさまりて
茜雲なほも残れり秋の日は西空遠く沈みゆけども

(昭和五十八年)

年賀状に——御題「鳥」にちなみて思ひを述ぶ

八代の海の向ひに冬日うけ近くにぞ見ゆ天草の鳥

天草の八十島やそしまたづね旅ゆきし日の家妻は若かりしかな

すこやかにいませど母は老いませしその子の我もいつか老いつつ

いつしかに年は暮れゆく遠くより帰りくる子と孫を待ちつつ

今の世のただならざるに天地あめつちのめぐり変らず年は暮れゆく

思ふこと多かりしかな夢のごと過ぎゆく年をふりかへりつつ

行末はきびしくごしき道なれど惑はずゆかむ心新たに

二月二十日助役退職、退院も遠からず、その挨拶状に

あまたなる人の情けにつつまれて務めを終へぬただにかしこし

かへりみて悔ゆることなし身を削り心碎きて務めこし身は

知らずしてあやまちしこと多からむ至らぬ我を許したまへや

長伏せの病を癒^いしみ情けにこたへまつらむ願ひ絶えめや
梅雨晴れて真日^{まひ}ほがらかに照^とすなり閉^とす我が胸開くごとに

『病中病後の歌』

(昭和五十八年)

三月二日、二ヶ月ぶりに病院より自宅に帰り、約一時間余りかかりて今年初めて詠みし

歌、二十首なり。(三月三十一日写)

いつの間に迷ひそめしか一片ひらと思ひし雲の心おほへり

わが病いゆる日知らに良き市長ひとの重荷となりて罪深きかな

わが罪の重きに身をばさいなみて知らず知らずに心病みたり

あらぬこと考へ過ぎて我が心千々に乱れぬ狂ふばかりに

夜半よはすぎて明け方近くなりゆくに悪しきことのみ思ひつづけぬ

このままに過ぎばつひに心狂ひ崩るると思ひ家に帰りぬ

二月ふたつきと帰らざりしに我が家に帰り来りぬ心空こころろに

帰り来し日は歌心湧かざりし色あざやかに梅は咲けども

帰り来て早くも六日は過ぎにけり起き伏しはげしく心揺れつつ

先立ちし友等の面影つきつきに思ひ出さるる夜も続きぬ

思はざる心の病人知らばと迷ひつづけて死をも思ひぬ

残されし母妻子らの悲しみを思ひつづけぬ我れ死にし後

嫁ぎにし子やその孫までも禍わざはひを及ぼすと思ひからくも止めぬ

明け方に雨しき降りて音をたて風吹き来る春来るしるしと

起きいでて見れば惜しくも紅梅こうばいのあまた花びら風に散りをり

吾あを待ちてをりしと思ひし門の辺の紅梅の花散りけり今朝は

さ庭べの白梅の花えださきに群がりて見ゆおそ咲きなるらむ

この冬は暖くして庭の辺の鶯うぐいすの木の実はさほに残れり

ひよ鳥のつがひは見えずつたまたまに一羽来れども実を食はず去る

うららかな春日ま近く我が病早くいえよと祈りつづけむ

三月二十日頃、眼鏡入れとともに妻より歌送られる。

「さにはべの芝生も青く芽をふいて日増しに春の色をましつつ」

四月一日夜、葉書に妻へ返しの歌を送る。

さにはべの若木の桜花開く頃ともなれど長伏す我は

四月二日、午前二時半目覚め約二時間二十首余り作歌す。六時前假眠から醒めて思ひ出さうとするも正確ならず、又約半分程度しか想起できず、不満足のまま記載する。

- 1、夢も見ず目覚めしあかつき臥し床に一番鶏の鳴く声聞えく
- 2、人の世は熟寝するらむ道を行く車の音もたえて久しき
- 3、玻璃戸越え外の面を見れば北の方家の光見ゆ二つ三つと
- 4、一時の後に変わらずやや低く二番鶏鳴く静寂のなかに
- 5、いねがての夜半に目覚むれば母妻子ら吾家偲ばゆうつつのごとくに
- 6、思はざる病にかかり老いませる母の心を悩ましつづけぬ
- 7、病癒え前にもまして母君に心つくして仕へまつらむ
- 8、歌よみてあればいつしか時過ぎて夜のとばりの明けてゆくなり

- 9、東雲しののめを告ぐるがごとく、鷄くだかけのしき鳴きつづくる声さやかなり
- 10、春されど肌薄寒くあたたかき臥所ふしどにこもり物思ひつつ
- 11、道をゆく車の音もひき続き人の動きの始まりにけり
- 12、天地のめぐりのまにまに夜は晝につづききたれりかしこきろかも
- 13、外輪やまなはの山脈かくれ朝日影霞みて見ゆれど今日は晴れなむ

5、6、7を次の様に訂正して中村秘書に送る。

いねがてに夜半に目覚めてつぎつぎに思ひ出すなり過ぎにし日々を
思はざる病にかかり言告げず来りし我れを許したまへや
吾が為につらく苦しきみ思ひを君したまふと聞くが悲しも
とく癒えて再びともにつとむる日を夢にみつつも病やしなふ

四月四日、一部自宅に送る。

目覚むれば東雲しののめ近く音たてて雨ふり来る風も吹くらむ
熟寝うまひして心足らへり今日もまた良き日であれとひたに祈るも

今は雨をやみて低く雲おほふ高遊原たかゆうばらはほのかに見ゆれど
早だちの飛機ぞ飛びたつ横なびく高遊原の丘の上より
飛機に乗り東路さして飛びゆかむ心の通ふ友らのもとに

四月五日

現し世に生きししるしとつたなくも心をこめて歌ふ我が歌

四月九日、妻面会に来た日の光景を思ひ出しつつ（四月十一日作）

約束の時間にたがはず面会に妻は来るかとひたに待ちつつ

窓ごしに妻の姿の見ゆるかな面会室へと廊下渡りて

妻渡る廊下のはしに一本もとの木の木立てり赤き実つけて

離れ病む吾あを案じつつ暮しゆく妻の苦しみ面影に見ゆ

頬もやや痩せてぞ見ゆるいかばかり心淋しく悩むわが妻

つれだちて旅行たびりしたしと告ぐる妻ああその心にぞこたふるはいつ

このままに病癒えずに倒るると心弱くも思ふ日もあり

病はも心ゆ生じむ我が心自ら正す外に道なし

閉されし病院の中さまさまの悩みいだきて病む人多し

おのがじし悩み苦しみ抱きつつ悲し現し世生きてゆくなり

平城や平安の都母つれて夫婦で旅行く日をし待ちつつ

いたはりのやさしき心吾が妻の眼にこもれり心なごむも

相見ては語る言葉は少くも心は通ふ夫婦なりせば

幼子にかへりゆくらむ病み床につくりし歌はなべてつたなし

四月二十日、妻面会に来る日早朝目ざめて

目ざめせし薄ら明りのあけほのに草雲雀なく近くの畑より

つぎつぎに草雲雀鳴くほど近きなづな畑ゆ飛び立つらしも

鶏くだかけも雀の鳴く音も聞え来てにきはしきかな朝明あさけのひととき

長寝ながいせし思ひするかもいたづらに迷ひ苦しみ夢見つづけて

我が心おほひし雲の拂はれて光り輝く天つ日もかも

五月十四日

水鳥の立ちの急ぎにわが母に別れも告げず来しをくやむも
現し世の縁えんじも薄くわが父と六十年むそとせ近くも前に別れつ

息絶ゆる父に別れを告げし日は夢のごとくに覺えをれども

わが父の面影浮ばず我れ五才いっつ余りに遠き思ひ出なれば

我が父のみ墓も建てず過し来し身のおこたりをかへりみるかな

昨年こぞの秋み墓を建てて我が父のみ魂を迎へ心安らぐ

幼くて父失へどわが母のいませし故に幸あり我は

今もなほ病に伏してみ心をなやます我なり許したまへや

すこやかにいませわが母わが病いゆる日近み待ちたまひつつ

(昭和五十九年)

母を思ふ (二月五日)

近頃は外にも出でずわが母は寝いねます日多しと妻は語れり

年すでに八十路を越えし母なれば寒さひとしほこたへますらむ

梅咲きし噂も聞え春来れどみ冬のごとき寒さつづきぬ

われ病みて久しく会はず離りゐて老いたる母をひた偲ぶかな

年老いし親の心を煩はす拙き子なり許したまへや

吾にかはり母に仕ふる家妻の言葉にこもる憂ひ偲ばる

いかばかり悩み苦しみ明け暮れを妻過すらむわれ病む故に

労りの言葉を妻に告げなむと心に思へど黙しつづをり

心なく言葉もかけず妻を帰し別れて後に悔みをるなり

身をいとひ待ちませ母よ病癒え吾家に帰る日も遠からじ

二月十四日、回想

一昨年せととしの夏なりしかな知らぬ間に病にをかされ床に伏せしは

病む故にひとしほ心にしみにしか二年ふたとせ前に聞きし蟬の音

法師蟬ひぐらしまた 蝸ひぐらしもとりどりに鳴く音を聞きぬ日暮るるまで

秋までの短き生命と知らずして声をかぎりに鳴く蟬かな愛しむ

二度の夏はや過ぎて病む身には苦しく寒きみ冬迎へぬ
よたたび

南の国にはあれど珍しく今年の冬は雪も積りぬ

雪投げて友とたはむれ遊びにし遠き思ひ出胸にかへりく
久しくも歌もつくらず病み伏して空しく年月送りこしかな
今日よりは心を開き豊かなる思ひに生きむと願ひつつをり

二月十五日、病棟の庭を見て

雪消えし枯芝原のあちこちに若草萌えて春近きかな

日当りの良き庭隅に片寄りて緑の小草生ひそめにけり

冬枯れの寒さにたへて萌えいづる名も無き草の生命思ほゆ

庭の面に緑の芝生くまもなくおほひつくさむ日をし待つなり

冬の日は夕暮れ早く晝の間は晴れにし空に夕雲の見ゆ

長伏せの病のいゆる日を近み歌よむ力よみがへるなり

二月十六日、妻の来院

冬枯の寒さきびしき今日もまた妻遠くより訪れしかな

病み床の我を偲びて眠られぬ昨夜よべ過しぬと妻は語れり

遠くより来し我が妻にいたはりの言葉もかけざりし我を悔むも

病癒え帰り来る日を母もまたひた待ち給ふと妻は告ぐるも

年老いてともにある日も一日づつ少くなると妻嘆くなり

病む故に心弱くもなりしかな妻と語れば涙溢れつ

「では又」と別れの言葉短くも妻の情の胸につたはる

ほほゑみて後を見返りゆく妻の面影残れり別れしのうちも

淋しげな後姿よ病院の廊下を渡り帰りゆく妻

我よりも長生きせよと我が妻の幸祈るかな心をこめて

興風会慰霊祭献進歌（九月五日）

亡きみ魂なくさめまつるみ祭りの庭偲ぶかふかな離わかりてあれば

亡き友のみ名つぎつぎに呼びまつりみ祭りすすむと聞くもかしこし

都路の祭りの庭にまうでむと願ひつづくれど果さず今も

爲すこともなく過す身も亡き友の残せし願ひ忘れて思へや

退院近く外泊帰宅せし時に（退院時の挨拶状に）

のぼりくる日ををろがむと球磨川の堤に立てば秋風の吹く
あかあかと燃えて朝日の出で初めぬ川上近き向ひの嶺より
一すぢの帯引くごとく日の光しばし川面に映えて輝く

時の間に嶺を離れて日はのぼり朝空くまなく晴れわたるかな

山田輝彦兄にかへし（十月十二日）

くりかへしみ歌をよめばわが友のみ情こもりてひびきく胸に
わが妻の心もしぬび涙ぐみたまふみ心忘れえぬかな

かへり来て二十日余りもたちにけり月日の流れのはやくもあるかな
友らみな励みてあるにいたづらに月日送るを悔みをれども

親鸞の自然法爾のみ教へを言葉に知れど迷ひつつ生く

昨日まで身をしばるがに法師蟬庭の立木に鳴きにしものを

生きの緒のあらむ限りは鳴きつづけ去りにし蟬のゆくへ偲ぶも
我もまた生くる限りは歌ひつつ友らとゆかむ一すぢの道

小柳陽太郎兄にかへし（十月十二日）

ごだますごとくに早も返りきぬ君ねんごろに書きしこの文
うれしくも恥ぢ入る思ひすいたらざる吾をも兄と君呼びたまへば
書もよまず便りもかかず心死ぬ思ひに過しぬ二年余りを
年多くあれども君に教へられともにたどりし長き年月
亡き友の残せし願ひ忘れねどおこたり続けし身を恥づるなり
重き傷背負ひてあれど喘ぎつつ友らの後につなかりゆきなむ
小庭べの木立さやさや音たてて秋風ぞ吹く文書きをれば

正大寮より合宿案内をいただいて（十一月十八日）

朝明より空かき曇り薄黒き雲広がれり雨は降らねど
くぐもれる思ひも晴れぬ都路の若き友より便りとどけば

一すぢの道を求めて若きは集ひ来るらむ御岳の山に
秋深み色もさやかに紅葉せし御岳の山も友を待つらむ
つながるは生命の姿と信じつつまことの友を求めたまへや
思ふことかざることなく語らへば心の通ふ道し開けむ
亡き友のみ魂も見守りいますらむ御岳の山の君らが集ひを
常若とこわかの国の生命を受けつがむ友らの集ひ偲びやまずも

福岡大觀塾に（十二月十一日）

後をつぐ若き友らの呼ぶ声をのせてとどきしこれの文はも
来む年は学びのつながりいやましに広げゆかむとしるすこの文
心知る友ら集ひて酒をくむにきはし宴うたげ偲はるるかな
すこやかにあらば友らと酒くみて語らむものと身を嘆くかな
常若の国の生命をうけつがむ若き友らよ真幸まごきくあれかし

（昭和六十年）

賀状の歌

——御題「旅」にちなみて——

み軍いぐさにゆく日を近み霰あられふる鹿島の宮にまうでし旅はも（註・『生の記念』(24参照)

都べのあまたの友らともなひて秋の常陸ひたちち路旅ゆきしかな

再びは会ふ日もあらじとかたみにぞ誓ひてゆきし旅なりしかな

湖にそひし潮来いたこの旅宿に泊りし一夜忘れかねつも

明日別れゆくと思へば夜の宴うたげ乏しき酒に友も酔ひにし

万葉の防人の歌も声あはせ友と歌ひぬ夜のふくるまで

水岸につなぎし小舟せにみ友らとならびてとりし写真うつつま残るも

歸らざる友いくたりぞ色あせし写真見つつ思ひはてなし

若き日の思ひ出の地に旅ゆかむ願ひ抱きて年迎ふなり

大観塾より「冬季合宿感想文集」を送られたれば（一月十一日）

朝の間あさは日のてらせどもいつのまに雲おほひしか冬空暗し

晴れやらぬ思ひ抱きてゐる我に届きしすりぶみあかず読みゆく

声あはせふみ読み合はすみ友らの声のひびきを聞く思ひすも

心こめ友らとともにふみをよみ涙流せし若き日思ほゆ

泉なし力湧きくも若きらのしるせし思ひと歌をし読めば

北空は黒雲おほひ友ら住む筑紫国原み雪ふるらむ

(倭建命と弟橘比売命の記述は古事記の中でも特に心惹かれしところなり)

昭和五十九年十二月三日妻入院す。二日程前、肝臓が血液検査の結果急速に悪化してゐる。家庭の事情より入院は無理かとは思ふがどうされるか、と内藤院長より電話あり。炊事、洗濯、衣類等、妻が入院すれば、今迄考へもしなかつた事として戸惑ふことのみ多く不安であつた。然し自宅で療養生活することは困難と考へたので、急いで入院することにし、その旨を院長に連絡する。入院までの二、三日間は、妻は入院に必要な衣類や食器等を急いで準備するとともに、炊事に必要なもの、衣類の置き場所等を概略教へてくれた。そして慌しく入院して行つた、心を後に残しながら。その時の思ひを表現しようとは何度か試みたが、どうしても思ふことの半分も歌ふことが出来ぬ。約二ヶ月余り

が経過した。二月三日、何とか作ったのが次の歌で、満足できぬまま一応記録する。今後も推敲したい。

わが妻の病すすむと医師より電話かかるに心さわぎし

恐ろしき病にあらずと思へども妻居ぬ後をいかに暮さむ

家があれば病をおしても働くが妻のかなしき性と知るなり

おのが身をかへりみずして長伏せの我につくして妻は倒れぬ

妻ゆけば母と力をあはせつつ家守らむと心に誓ひぬ

入院の準備をいそぎととのへて出でゆく妻の心憊ばる

老いませし母といまなほ病む我を残してあれば行きかぬらむ

門の辺に別るる時に我が手取り嘆きし妻の面輪忘れじ

あふれくる涙たたへて別れつけかそかにゑまひし妻の目見はも

妻の乗る車の影の消ゆるまで母と見送る門辺に立ちて

冬といへど風もとだえて暖き小春日和に妻はゆくなり

一條真通君より、兄浩通君が戦死したリングエン湾より北に約三〇軒のアムラングを、

昭和五十八年四月十一日訪問し、供養の旅の思ひ出をつづる録音テープを昭和六十年一月三十日送付される。同行せるは浩通君の戦友小岩京氏（一條迫撃砲小隊分隊長）及び高橋悟童氏（浩通君と同じ中里中隊の所属であったが間もなく他に転属、竜谷大出身の為導師を勤められる）。このテープは地元放送局に「私の昭和史」として募集があり、真通氏が「念願の旅を終えて」と題して応募したところ入選した。放送の日には兄と両親の写真を置き、ラヂオを静かに聞いたとのこと。なほ小生の入院中に、現地の写真と「盟兵団慰霊碑建立と巡拝供養の旅を終えて」と題して放送の骨子をプリントしたものが、令妹橋本のぶさんより送られて来たが、そのままになって返信も出来なかったのである。

一條真通君より「念願の旅を終えて」と題し亡き兄浩通君の戦死の地を訪れし思ひ出を語る録音テープを送られたれば（二月七日）

亡き兄をとむらひアムラング訪れし思ひ出語るテープ届きぬ

先に來し写真見つくり返しテープ聞くなり亡き友偲びて

高き木も見えず小高き丘に向け山肌つづけりアムラング村

写真の丘のかなたにリンガエン湾見ゆるがに思はるるかな

はげしくも戦ひつづけし跡もなく村静まると君は告げにし
亡き兄の戦ひ倒れしあとに立つ君を偲べばたへがてなくに
なきがらにかけよと香水ととのへて戦の庭に征きし友はも
土を盛り兄の願ひし香水をまきたまひしと聞くも悲しき
故郷ゆ持ちこし花の種子を蒔きとむらひませしか戦友らとともに
鐘の音の静かにひびき心こめお経となへし声聞く思ひす
たへかねて兄の名呼べどこだまさへ帰らざりしか異国の空に
胸にだく母の遺影を見し時にとどめもあへず泣き給ひしか
先立ちし吾子に会へると言ひ残し世を去りませし悲し母君
君も吾も思ひはかよふテープ聞くたびに涙の流れやまぬに
去りがてに離りゆくとき風にのり香水の匂ひの流れこしかな
亡き友のみ魂は君の後追ひて帰りましけむ故郷の地に
冬時雨ふりくる夕べ今日もまた君が送りしテープ聞くかな

元山義樹君の結婚を祝ひて（二月十五日）

春風に梅咲き桃もふくよかに花開くなり寿ぐごとく

良き人を迎へてつきせぬ喜びにひたりますらむみ親偲ふも

千代かけて固き契りを結びます今日の良き日を祝ひまつらむ

小柳陽太郎君の母君が昨日死去されたとの電話宝辺君よりありたれば、弔電に（五月十六日）

人ごとと思はれなくにたらちねの母を見送る君の嘆きは

慰むる言葉もあらじただ友とともに泣かむ亡き人したひて

ありし日のやさしきみ姿偲びつつ永久とほの別れを見送りまつるも

小柳君御母堂の御葬儀の模様を知らせてくれた御札に手紙を出したるところ、返事と

ともに次の歌を送られる、宝辺正久兄より（五月二十四日発信）

みいくさにいで立ちし頃かへりみれば共にはるけく来しものと思ふ

若かりし友の母刀自しのびつつおのが母かたる君の文かな

いたづきのいえつつ君が妹の君帰りてくるよと聞くがうれしさ

風薫る球磨川土手を夫婦して歩み給ふ日祈りて待たむ

その返しに送る（五月二十八日）

梅雨入りの近づくしるしと朝明あさけより雨降り続けり便りこし日は
庭の木の若葉青葉の雨にぬれ色もさやかに目にうつるなり
いづかたに飛び去りゆきしか一ときは雨ふるなかを鳴きし雀子
さ庭べにふる雨音のかそけきを聞きつつ君が歌をよむかな
わが母や妻にも心かけたまふ君のみ歌は心に沁みるも
妻歸る日も遠からじ待ちのぞむひと日ひと日の長くもあるかな

小柳兄に（五月三十日）

梅雨近く晴れやらぬ空あふぎつつ母先立てし君偲ぶかな
再びは帰りきまさぬたらちねを偲びていまさむ朝な夕なに
いつの日か君と同じき身の運命さだめ背負ひてありと思へば悲しも
永遠とこしへに真幸まさきくいませと祈れども母老いゆくをとどめかねつも

母よりも先には死ねずと誓ひつつ病にたへし頃思ふかな
さ庭べの木々に姿は見えなくに雀しばなく歌書きをれば
濃きもあり淡きもありてつつじ花時たつままに咲きて散るなり
庭草の上を舞ひ飛ぶ白き蝶見守りをれば亡き人偲ばる

徳永正巳兄に（六月十四日）

「会ひまつることなけれどもわが友の母ゆきますと聞くが悲しも
母慕ひ嘆きいまさむわが友を偲びてあれば風の鳴るなり
安らかに眠りたまへと祈りつつ晴れぬ思ひに仰ぐ梅雨空

小柳君より香典返しとともに「亡き母に見せましものを香椎ま参道のりの楠ちのみどりのいまさ
かりなる」の歌送り来れば、かへしに（七月十三日）

亡き母を偲びましつつ楠茂るまゐりちを行く君見ゆるかな
わが友の胸に生くると信ぜども隠れし人に会ふすべもなし
我もまた同じ運命を背負ふ身と思ひてぞ読む君がみ歌を

君が歌よみつつあれば梅雨明けのま近き空に西風吹き渡る

また

近ければ送らむものを小庭べに真白きむくげの花咲きにけり

再び

亡き母を偲びましつ楠青葉茂るまゐりぢ君ゆくらむか

楠の木の青葉はさかりと茂れどもともに見るべき母あらなくに

西風荒れし昨日と変りそよ風に木々の梢はさゆらぎやまずも

白雲のかかりてあれどはつはつに青空見えく薄日さしつ

余りにもつとめたまひて病み伏せし君身をいとひ休みたまへや

亡き母のみ魂現しく病む君の身にそひつつも守りますらむ

梅雨明けのしるしか今日は朝あしたより蟬なきつづく庭の木立に

七月十七日小柳陽太郎兄（福岡市原土井病院）より返し

吾がことをかくも思ひたまふありがたき御歌誦しまつりぬふたたびみたび

母なくして空しき心に温きみ心そそぎたまふ君がみ歌よ

遠き昔佐賀にいませしかの日々を偲びつつよむ君がみうたを
はからざる病にたふれ亡き母の病室の隣に今日も伏しつ
病すでに峠を越して日々書をよみつつ心励ましてをり
君を思ひ君に導かれつつ若き日ゆ長き長き月日すぎにき
温かき君がみ心なかりせば今日のわが身のありと思へや

七月二十六日五島和明君（熊本大学々生）より

プールサイドにて

姉さんで見えしをとめを先立ててソフトクリームひとつ買ひけり
三人は椅子にならんで姉さんがまづ弟にそを手渡しぬ
弟は姉さん先に食べなよとそをさしだして口ひらかぬも
姉さんは手をふりそつとおしもどし弟それを妹の手に
妹はまだ幼くて兄さんのそをうけとりて食べはじめけり
無邪気にも美味しさうに食ふおとむすめ七つばかりか姿かはゆし
兄さんもそれを横目にたへきれず妹の手からそをうばひけり

しばらくはソフトクリーム兄妹にかはるがはるになめられてゆく
なめられて小さくなりしクリームを姉さんつひにちよつと味はふ
姉さんはさすがに姉さん僕を見てほほゑみかける困りしごとくに
姉さんもまだ小学生ソフトクリームもつと食べたしと思ふ年頃
むつまじき三人の姿見てをればほんとはんとにうれしかりけり

かへし

三人の子らの姿をつばらかに歌につくりて送りし君はも

真夏日のプールサイドのたへがたき暑さ偲ばゆみ歌をよめば

弟にソフトクリームゆづりやるやさしき姉の姿見ゆがに

弟と姉ゆづりあひ温き心はかよふクリーム一つに

姉、妹、弟と三人のむつまじき姿を君は見つめましけむ

幼子のすぐなる心忘れじと誓ひて君が歌をよみつ

七月二十八日（日曜日）宝辺君夫妻来訪。いよいよ帰る前に一條真通君から送られてる

た「念願の旅を終えて」のテープを聞く。その時の思ひを、暑中見舞とともに橋本のぶ
様に送れり（八月二日）

はろばろと訪ねたまひし我が友と別る時の近づけりはや
帰りゆく友と聞くなかな亡き友の倒れし跡を弔ふテープを

亡き兄の跡を弔ふ思ひ出の旅路をつづる弟君は

身を正し心を清めて流れくるテープの音に耳傾けぬ

ありし日の友の面影うつしくも目に浮ぶなり吾を呼ぶごとくにか
しましく聞えしものを夏蟬の鳴く音も絶えてテープ廻るも

目つぶりてテープ聞くなりもの言へばとどめし涙溢れくるがに
我が友も同じ思ひかもだしつつ心傾け聞き入るテープに

病えて年老いゆくに亡き友とつながる思ひ深まりゆくなり

七月二十九日、宝辺正久兄より

（帰途に）

友とその家人訪ひて帰るさに大西雲もゆるを見たり

玄海に高く立ちたる雲のほかは澄みて暮れゆくこの夕かな

(うれしき思ひに)

あつかりし友の病をかへりみて今は笑みつつ聞きけるうれしき

つぎて病みし妻の君と立ち居まなならぬ母君も共に円居せりけり

一つ家にめをとが病みてめをと共に立ち直りたるまさめにわが見つ

一條君の戦死の跡を訪ねたる旅のテープを君と共に聞く

母君は庭の芝生につきつぎに水打たしけり夏の夕に

宝辺兄夫婦を迎へて(八月四日)

久しくも会はで過ごしし思ひせじただ我が友と相見し時は

交しあふ言葉は短ししかれども通ひくるかな友のみ心

にこやかに笑ひましつ病みし身をいたはり給ふ友の妻はも

再びを会ひ得し喜び胸内に溢れくるなり時たちゆけば

語るべき思ひ溢れく病み伏せし悲しき思ひ出友に告げつつ

心には楽しみ消えて二年を過ごし来にしか友なしにして

一度は地獄の底に落ちしごと悩み苦しみ悶え来にしを

夢のごと思はるるかな癒ゆる日はいつとは知れず病み伏せし日々

年老いし母を見送る我が務め思ひてからくも耐へて来にけり

我が後を追ふがに力つき果てて病に倒れし悲し妻はや

み佛の助けか病なほ残りあれども妻もかくいえにしは

妻も吾も病いえゆく姿見て喜びたまふ友あり我に

現し世に深きちぎりを結びにし良き友いませり何か嘆かむ

四十年の長き年月むつびにし友にしあれば思ひ出つきせじ

まどゐして友と語りつ酌む酒はとほしかれども身にしむるかな

若き日に酒に酔ひしれあやまちををかせしことも思ひ出しつつ

別れゆく時は近づくまた会ふ日遠からなくに名残りつきせず

万葉の歌に名高き水鳥を見て帰らむと友のいざなふ

我が家の近くを流るる球磨川の土手を下れば水鳥の見ゆ

球磨川の川口あたり岸近く神代ながらに水鳥の立つ

海中わたにつきせず湧きし水鳥の真清水今は涸れ果てにけり

高速の車路遠く帰りゆく友を送りぬインター近くに
言の葉は交しえざれど幸あれと祈りて送る手をふりながら
また会ふ日楽しみ待たむめをとなかむつまじくして助けあひつつ
遠空に祭花火のつきつきにあがるを聞きつつ文を書くかな

宝辺正久兄より、先に送りし小生の歌を読みて

手を振る友をしかと目に入れ別れたるかの日を思ふ君のみうたに

病みし時の君の思ひ出胸いたくまた聞く如しみうたよみつつ

いもせ共に病みては共に立ち直る恵みたふとし何か嘆かむ

八月七日、合宿開始の日（註・内はじめの四首、速達にて合宿地に送られたり）

今年こそ阿蘇の集ひに行きなむと定めし願ひも空しくなりしか

我が病ひ身をむしばみてきびしかる集ひにたへずと医師くすし告ぐるも

思へども思へどもなほあきらめぬ思ひに偲ばゆ阿蘇の集ひを

常若の国の生命を受けつがむ新しき友集へり今年も

三十年のみそとせ前思ひ出し霧島で撮りし写真一人見るかな

一すぢの道かへりみず進み来ぬ泣きみ笑ひみ友らとともに
遅れてもなほみ友らの後を追ひ進みゆきなむ生くる限りは

八月十二日、山田輝彦君より合宿終了を知らす葉書の端に

おのがじしかなしみ抱き生きをれどみくに思へば黙しがたしも

八月十二日、吉村浩之君（註・千葉工業大学生）宅に阿蘇合宿に参加せる学生約十五名一泊、
小生も招かれて約三時間会食に加はり、合宿参加の雰囲気的一端に触れる。喜びに耐へず（八

月十九日、吉村浩之君へ送る）

帰りゆく吾を送らむと声あはせ「進めこの道」若きら歌ふも

若きらと別れ惜しむに夏の夜の空に明るき一つ星見ゆ

一人ゆく道にはあらし若きらも後につづけりかへりみすれば

友ありと思へばにぎはしたへつつも生きてゆきなむ悲し現し世

八月二十日、寺尾博之自刃の命日なり、五時過ぎ薄暗き頃目覚めて彼を偲び、六時十分前、球磨川土手を白鷺橋まで往復散歩す。その途上しきりに寺尾君のこと追憶される。午後三時智子より、今日は因縁ありて寺尾君から貰った扇子と、結婚式の時寺尾君の母上より戴いた袱紗（小生と智子と二枚）思ひがけず発見したとのこと。扇子は江頭富美子さんと二本で「好きな方を取りなさい」と言つて戴いた由。現身は見えずとも切れざる糸で固く結ばれてゐることを実感す。寺尾君の御墓に詣でたいと思ひながら恐らく参詣することは出来ないであらう。次の歌は吉村君宛の歌とともに山田輝彦君に送る。

大君に生命捧げて君ゆきし日ゆ四十年過ぎぬ夢のごとくに
亡き友を偲びつつゆく朝まだき球磨川ぞひの一すぢの道

東の連山の嶺に黒雲の低くなびけり日をさへぎりて

あふぎ見る中空低く千切れ雲さやかに光れり日はかくるれど

咲く花は今見えなくに球磨川の土手を歩めば虫の鳴くなり

球磨川の川瀬を水は流れゆく低く音たてむせぶごとくに

清らかな君が面影浮び来て進みかねつも川ぞひの道

都路の空仰がむと暁の小暗き山路を君はゆきしか

いかならむ思ひに君はたどりけむ泪が原につづく山路を
現しくも祖国の胸に帰りにし君がみあとにつづかむ我も
吾家にかへり来りて朝あしたより蟬時雨聞く日もてらしつづ

山田輝彦君に送った歌（寺尾君命日の歌）を讀みて八月三十日宝辺君より「歌のあはれ」
を感じますとの感想とともに次の歌送付される。

暁の山路ゆく友をありし如く偲びてよみし歌のあはれさ

四十年祭の日の朝まだきふるさとの川辺の道を君ゆきしとふ

亡き友を思ひつつ球磨の水の音きくといふ歌心に沁みぬ

清らかな友の面影と君いへばこの四十年のへだたり失せぬ

悲し世と胸のおくどにおほえたる若き日のまま君思ふらむ

はりつめし弦いとをふたたびかなでけりと思ひやりつつ君の歌よむ

歌のいのちは果つべくあらずそのしらべにのりてよみがへるかわれらが生命も

亡き友を数へつつなほ生きしむるこの大御国をば何といふべき

九月三日、柴富浩君（註・熊本高工・昭和十八年卒）より「ちりめんじゃこ」を送付される。

豊後路の大入島の海原ゆ取りて送りしちりめんじゃこはも
未だ見ぬ君住む島をわが妻と訪れむ日を待ち望みつつ
水清き海を群なし泳ぎゆく「ちりめんじゃこ」を見る思ひする

九月十四日瀬上安正兄の七年忌あるも参加出来ぬ爲御霊前に謹んで捧ぐ（九月九日）

み祭りの日は近づきて亡き君を偲ぶ思ひの深くなりゆく

ありし日の君の写真うつしえとりいだしかへりみるかな深き縁えんじを

微笑ほほえみみて語りかけます思ひして見つめつづけり君が写真うつしえ

相模路の原当麻はらたいまにて集ひしが君との縁えんじの初めなりしか

若き日に見し夢のごとく過ぎゆきて遠くなりし原当麻かな

かかなべて四十年よそとせ余り亡き君とともにたどりし道をしぞ思ふ

我が兄のごとくに慕ひ数々の教へうけしを思ひ出しつつ

迷ひつつ苦しみつつもますらをの君とし行けば楽しかりしに

思はざるわざはひおこり今もなほあきらめかねつ君去りませしは
いたづらに年重ぬるを嘆くかな君ありし日の齢を越えて

若き友そだてむ願ひに己が身をかへりみずして務めし君はも

現し世に君が留めしとこしへの願ひつぎなむ残りし我らは

亡き君の思ひ出つきせすいつかはや時たちゆきて日は暮るるかな

天草の島山の上の茜雲うするるなべに蟬の音高し

み祭りに詣でえざればけふ一日独り静かに君を偲ばむ

九月二十一日興風会慰霊祭献進歌（九月十一日作）

亡き数に入る友のみ名年ごとに多くなりゆく運命さだめと思へど

月出でぬ夜空にひろがる星影の数かぞへつつ偲ぶなき友

若くして倒れし友ら身近くもよりそひきますと思ふこの頃

東の空あふぎつつ亡き友のみ名を呼ばはむ一人一人の

十二月三日作、昭和六十一年年賀の歌

——御題「水」にちなみて——

寒ければこもりてありしを球磨川の塘道とちをゆく小春日和に

足早にゆけば川原に群たちし枯葦なびけり風をうけつつ

川しもの水豊かにて鴨のむれ浮びて動かず向つ岸边に

ゆく舟もさけて通ひぬ鴨のむれ餌を求めて寄り来しものを

川岸に竿持つ人ら日はさせどみ冬に釣るはなにの魚ぞ

海近み上げ潮にのり時くれば川のほりくるすずき鱈ぼらも鱈も

ゆく水の帰らぬ思ひにこし方をふりかへりつつ道をゆくなり

正大寮より来る十三日より二泊三日の日程で在京学生の合宿をする旨十日夕方速達

着。正大寮へ（十二月十一日）

北風の寒き夕べに都路の若き友よりみ文とどきつ

寒ければ内にこもりし我が心開けと告ぐるみ文なるらむ

文よめば道を求むる真すぐなる思ひつたはる若きみ友の

聖徳の皇子のみ文をもろともに読みゆく集ひと聞くもかしこし

み友らの集ひ偲べば若き日の思ひ出湧きくつくることなく

若き日に幾たび訪ねゆきにしか三鷹の森の正大寮を

武蔵野の名残りとはどむる森内に建ちてありしか正大寮は

み友らと語りあひつつ森のなか池のほとりも歩みゆきにし

池の面の近くに咲きし辛夷の花歌によみにし友は今なし

若き日は再び帰らじ悔いのなき日を送りませ友らと共に

昭和六十一年三月十九日発の宝辺の葉書を戴く。健康を心配してくれてゐる。又青砥

君と小生を偲んだ歌を記してある。心打たれる。こんな健康状態では返歌は勿論返信

も出来ぬので缺礼する。宝辺君の歌を記す。

春の雪風に流れて筑紫野の遠賀の広き川見えわかず

レールひびき揺るる窓の外雪荒れて遠き友の上しのばしめらる

一時の雪ふりやみて野の果の遠山並みに日は射し照りぬ

「さびしい冬が来た」と師の詩かたみに読みたりし友をしのべば遠くあるかな

出雲の友失せつと思へどあめつちに通ふものこそとはのいのちか
しんしんと冷ゆる車内の窓に寄り夕日照る野をゆくがともしさ

【病中病後の歌】その後

(昭和六十一年)

一月二十九日、青砥宏一兄御霊前に

亡き友と共に辿りし長かりし道かへりみてなげきしやまず
しきしまのみち一すぢに心こめ燃えつきにしか君がみいのち
君ゆきて相別るとも行く末は共に帰らむ祖国の胸に

病床の窓より(七月十日)

目路近き丘をも山も雨霧のおほひつくして雨降る今朝も

時過ぎて風も強まりたちまちに雲うつりゆき山影見えくる

「君がある八代の空よりここに吹く南の風のおとなひうれしも」(宝辺)

我が友の喜びませし南みなみの風吹ききたる窓を明けなむ

見渡せば八谷やをのほり山肌をつたふ雨霧目にさやかなり

球磨川の流るゝあたりかたゆたひてとどまる霧もややに消えゆく

降る雨に水かさましし水無の川面はつかに窓越えて見ゆ

水無の川辺こむらの木群夜をこめて光りし螢子今はいづこに

若きらと川ぞひ道をつれだちて螢狩りせし夜なつかしも

五月雨のとだえししばしを親燕子らつれて飛ぶ窓辺近くを

高空にあがりもきらず親のあとたどしくも子燕ら飛ぶ

「雨霧のあしたの空をほととぎす鳴きてすぎゆきまた鳴く遠くに」(宝辺)

梅雨空に一声鳴きしほととぎす飛び去りゆきし山辺はいづこそぞ

窓越しに見ゆる山川目になじみ時を忘れて眺めつつをり

宝辺兄にかへし(七月十五日)

小波の寄せくるごとくつき／＼に歌文とどきぬ長門の友より
息つくも苦しく友の呼ぶ声にこたへもせず
に幾日か過しぬ
病む我をひたに偲びてよみませしかず／＼の歌心にしみぬ
吾を偲ぶみ心こもる友の文枕の下にしきて眠りぬ
やうやくに力湧ききてつたなくもかへしの歌よむ君偲びつつ

第三十一回 島原合宿教室に寄す（八月）

心しる友らとともに微笑かはしかたらふ夢のはやさめにけり
朝明けにやまばとしきなく島原につどひし友らしのびてあれば
集れば神となるてふみことばのうつつしくなるらむ友らつどへば

御題「木」にちなみて（十二月）

寒ければ色づき早く繭もちの木の木の実はうれつ飛び来よひよ鳥
木の幹もうつろとなりし老梅の一本ひと立てり我が門の辺に
年ふれど時来りなば美うらはしき花を咲かさむ梅の羨とらしさぞ

まずぐにも伸ぶる櫛の木よろしみと居間の南に植ゑて楽しむ
木枯のみ冬にたへて春を待つ我が家の庭の木々を愛かなしむ
樛つがの木のいやつきつぎに若き友後につづけりただにかしこし

(昭和六十三年)

前八代市長岩尾豊氏の御霊前に (八月)

よのためにつくしし人のあまりにも早くゆき給ひてけふもせみなく
さきだちし人をしたひてあふぎみる大空に一つ星かがやきてあり
さきだちし人思ひつづくれなむ遠きみ空の星をあふぎぬ

遺歌・遺文

(二) 友を憶ふ

一條浩通君

一條浩通君と初めて会ったのは滿洲の奉天であつた。二人は滿洲電業株式会社（発電と配電を独占してゐた国策会社）に就職し、独身寮も偶然同じであつた。会社には「貸費生制度」があり、会社の詮衡試験、更に学校の入学試験に合格すれば、学費一切を会社が貸與してくれる。條件としては卒業後会社に帰り、一定期間以上勤務すれば、学資の返済は免除されることになつてゐた。私は入社直後この制度があることを知つて、早速受験勉強を始めてゐた。二・三ヶ月後になつて、同じ目的を持つ者が寮内にをることを知つた。会つて見ると、それが一條君であつた。

一條君は一年前に入社した先輩だったが、すぐ意気投合し、二人は今後協力して目的を貫徹しようとして誓ひ合つた。当時寮は一人一部屋だつた。私達は共に励まし合ひ競ひあつて勉強する為、間もなく同室となつた。私達の友情関係は、それが始まりであつた。勤務の傍、疲労した身体に鞭打つて勉強するのだから、思ふやうに成果はあがらない。そして二年後の昭和十四年四月、一

條君は立派な成績で、私はやっと拾はれて憧れの山口高商に入学することになった。

満洲時代には、受験勉強に明け暮れ、二人で遊びに行ったことなどは思ひ出に残ってゐない。ただ他の寮生は全てバス通勤だったが、私達は吹雪する厳寒でも約四十分の道程を徒歩で通勤した。一高や北大予科の寮歌をよく大声で歌ひながら、氷りついた道を歩いたことが夢のごとく思ひ出される。また、その頃勉強の合間には、二人で人生について語り合つた。特に、宗教に対する憧憬は共通した問題として、よく話題にのぼつた。

一條君から西田天香師が主宰する「一燈園」のこと、その宗教的信条は「土下座の生活」と云ふ言葉に端的に表はれてゐること等を教へられたのも、その頃であつた。そして人の嫌がることを進んで実践すること、例へば便所の掃除を二人でしたことなど忘れられぬ思ひ出である。

山口高商に入学したのは昭和十四年、一條君が満二十歳、私が十九歳の時だつた。一学期は夢中で学業に専念した。その内に学校生活に対し不満と疑惑が生じて来たのである。知識は教へられた。然し、望むことが無理だつたのだと現在は思ふのだが、人間如何に生くべきかと云ふ根本問題は、いくら熱心に講義を聞いても、解決する方向さへも見出せない。これはと思ふ数人の教授の自宅にも二人で訪問したが、期待した指導は得られなかつた。そんな心理状態で一学期も終りに近づいたある日、二人はクラス担任の白尾陽光先生に呼び留められた。先生は大阪商大の田



崎仁義先生の愛弟子で、神宮皇学館教授に移られ、終戦後は亜細亜大学教授に招聘された方である。そして間も無く交通事故の為急死されたことは、まことに哀悼にたへない。その時先生から、東大文化科学研究会（現在の国民文化研究会の源流）が主催する「全国学生夏季合同合宿」に参加する様勧められた。一條君は都合で参加できないので、私達の先輩林正男兄に参加を勧誘した。林兄は当時三年生で満洲電業からの最初の貸費学生であり、私達の先輩に当る方である。林兄は結婚して、子供さんまでありながら受験勉強された努力家で、私達の指標ともなった方であった。

かくして、昭和十四年七月十七日より九泊十日間にわたり、神奈川県原当麻村「無量光寺」で開催された合宿に参加したのである（註・『生の記念』（1）参照）。参加校は合計二十八校、参加

者約百三十名の合宿であった。山口高商からは林正男兄や私を含め五名が参加したのである。指導者の殆んどが大学生で、青年が青年を指導し教育する新しい教育方式が始った第一回の全国的規模の合宿であった。この合宿で私達は初めて黒上正一郎先生、三井甲之先生、一高昭信会のこと等を知った。私はこの合宿の記念写真に、当時を回想し次の通り感想

を記してゐる。「この合宿に参加することによって僕の運命は定まったのである。祖国日本に対する信を、そして現状に対する改革意志を、この合宿の宗教的雰囲気の内でも與へられたのである。僕の誕生の地。あ、魂の故郷、原当麻よ」と。

二学期が始り、一條君にはすぐ原当麻の合宿で得た体験を伝へた。彼はすぐ共鳴共感してくれた。そして林兄が中心となり八月三十日より五泊六日の日程で学内合宿を計画したのである。場所は山口市内の善生寺で、白尾先生の外、東京からは九大出身の安田貞藏兄（現姓、三浦、国民文化研究会会員）が指導の爲に参加された（註・『生の記念』（2）参照）。学生は原当麻合宿参加者の外一條君、秦音次郎君（陸軍特別攻撃隊員として戦死）の八名程度だった。この合宿から私達の間には朝晩「明治天皇御製拜誦」が宗教的儀礼として定着してきた。御製拜誦は、昭和三年旧制第一高等学校に黒上先生を中心に、後の日本学生協会の始め、精神科学研究所の理事長となられた田所広泰先輩等によって創設された「昭信会」の伝統的行事であった。私達は御製を拜誦するやうになつて、「一高昭信会」の道統につながつたのである。そして、やがて全国各地の志を同じくする友（私達は同信の友と呼び交した）との精神交流の世界が広がってゆくやうになつた。

ともかく、この合宿が一條君の一生を決定したと云へよう。一條君との友情は従前にも増して

更に深まり、同じ志を抱き、共に眞実の道を求める同信の友として、強い絆で結ばれていった。この合宿での一條君の感想は、終了直後、家族宛に送られた手紙に明瞭に示されてゐる。

「今後は尚朝夕明治天皇御製を拜誦し続ける積りです。お母さんの家でも是非実行なさるやうにお勧めします。これを毎日少しづつ、でも拜誦すれば、皇道の何たるかが我々日本人である限り必ず体得され、大御心の奈辺におはすかがはっきり分り、日々の生活も決して自分一人の力でなされるものでなく、周囲のもの全てが自分の為にある様に感ぜられ、天皇の御稜威みづかみがひし／＼と身に感ずるのを覚ゆるのであります。」

また「御製を拜誦する内に自然にしきしまの道に入る事が出来ます」「御集を御手本にして毎日心に映じるままに和歌を作る事を勧めます」「何事も始めは窮屈な恥かしい気がするものですが、斯の道だけは決して間違ひのない、日本人の真に進むべき道ですから困難を押し通して行って下さい」などと家族にも勧め、自らも「しきしまの道」を踏みゆく決意を表明してをるのである。

また、宗教観及び祖国の現況については、その手紙には次の通り記されてあつた。

「日本仏教においてさへ、眞の究極の目的を見失つて居るのです。即ち、私達が仏陀を拜するのは、結局は畏くも天照大神を拜する事なのです。仏教に於ては、自分の生涯の理想即ち極楽

往生は釋迦を通して求めます。キリスト教ではキリストを拜することによって、自分の幸福を求めます。然し、日本では天照大神を拜する事が眞の宗教であり、日本仏教なのであります。仏教やキリスト教に於ける仏陀や天国は現在では皆理想或は空想です。實在しないからです。併し、日本では現人神たる天照大神の御直系の天皇陛下があらせられます。浄土宗及び眞宗では、俗人が仏に帰依する事によって救はれます。同じ様に我々日本人は陛下に帰依する事によって救はれるのです。」「我々学問する者は確乎たる国體觀念を根本として、その上に積み立てねばならぬものです。」「我々は日本人として天皇を扶翼し奉るべきだと云ふ事を眞面目に考へ直す事が、今事変（支那事變のこと）を処理し、又第二の欧州大戰に対処する最も重要な事と信じます。」「以上の事を合宿中に心から体得し得た気がします。」

この手紙は名越二荒之助君（高千穂商科大学教授、山口高商の後輩）が昨年（昭和五十一年）八月、一條君の墓参をした際、御遺族が保管してをられたものを借用して通知してくれたものである。一條君の強い確信が、簡潔な文章の内にこもつてゐる。たゞ一回の合宿で、このやうな心境に到達した一條君の眞摯な求道心に畏敬の念を改めて抱かずにはをられない。もちろん、その後一條君の思想と信仰は發展し深化していった。然し、この合宿で体得した初一念を一條君は生涯を賭けて貫き通したのである。

前掲の書翰には一條君の信仰が、結論だけ端的に語られてゐる。従つて、この点に就ては、なほ後述したいと思ふが、それにも増して、短いながらも充實した一條君の全生涯こそ、百万言を費すにも優つて、一條君の全貌を示すものと云へるだらう。

ともかく、合宿後急速に私達の会を創設しようといふ機運が熟し、白尾先生を顧問として「斯道会」を結成した。命名は教育勅語「斯ノ道」に由来する。林正男兄が幹事となり、一條君は創設当時からの中心メンバーであつた。そして「斯道会」発会を記念した第一回の合宿を山口市、野田神社で開催した。(註・「生の記念」(3)参照) この合宿は前回の原当麻合宿に参加した諸兄の外に、現在も交遊が続いてゐる二年生の荒木稔兄、私達と同じ一年生からは林榮一君も参加され、学生十五名の賑かな合宿であつた。また一高昭信会出身で当時東大在学中の吉田昇(戦死)・南波恕一両先輩が指導の爲東京から遙々参加して下さつた。

この合宿で一條君の作つた

ときをりに読まる、「祖国禮拜」の高き調べにあこがるかな

の歌は、当時東大文化科学研究会より全国に販売された雑誌「学生生活」の中に紹介された。尚「祖国禮拜」とは三井甲之先生の作られた長詩である。あとではその詩を私達は殆んど暗誦してゐた。

このやうな合宿生活を重ねることによって、一條君との心の結びつきは益々深く強くなっていった。もう一日も離れて生活することは出来ない。満洲時代と同じやうに一つ屋根の下で全生活を共にしよう。かうして、二人は山口市芳沢町堀ふみ方に同宿し、その後会員がつき／＼に移つて来て「斯道寮」が成立した。

この年の十二月下旬、学校が休みになるとすぐ、福岡市百道の青年道場にて開催された日本青年団の合宿に参加した。林正男兄を始め三年生六名、二年生からは荒木稔兄、一年生は一條君・林榮一君と私の計十名だった。この合宿では当時第五高等学校から瀬上安正兄（現在国民文化研究会常務理事）・工藤昌男兄（東大在学中病死）、手塚顯一兄（国学院大学・戦死）、佐賀高等学校一年生から江頭俊一君（東大在学中病死）・勝田禮之君（百武と改姓・戦死）と、その後同信の友となった友人が参加して親交が始ったことで意義深い合宿であった。この合宿は十二月廿七日に終了したが、一條君と私とは別れ難い思ひで佐高の江頭・勝田君と同道して佐賀まで足を延した。五高の瀬上兄、国学院大学の手塚兄も一緒だった。そして年末三十日まで佐賀市内の竜泰寺で佐高同信会の主催した合宿に参加したのである。東京からは東大在学中の夜久正雄先輩（現重細亜大学教授）も参加された。当時佐高には旧くから三井先生と御親交のあった高橋鴻助教授が在職され、先生を中心にして同信会が結成されてゐた。三年生には古賀秀男兄（東大卒・最近

まで佐賀県立博物館長)、大津留温兄(東大卒・最近まで建設省事務次官)、二年生に稲垣武一兄(東大卒・新制佐賀高校教諭在職中病死)、また一年生には前記江頭・百武君の外高橋先生の御長男和彦(東大卒・現在長崎県立大学教授)、龍野清澄(東大卒・最近まで朝日新聞社勤務)、下畑達男(京大卒・宮崎大学教授)、成富正好(東大卒・在佐賀県)君等優秀な人材が集つてゐた。佐賀合宿では、当時の「改造」「中央公論」等に掲載されてゐた諸論文を具体的に取り上げ、これらに表れてゐる流行思想を批判すること。時事批判の重要性を学んだ。一人に取つて、と云ふよりも山口の「斯道会」は全般的に主として宗教面より、この道に入つた為に、思想面については餘り研讀をしてゐない。その意味では、この合宿によつて新たな視野が開かれたと云へよう。祖国に対する篤信は、同時にその悠久生命を守らんとする決意となり、祖国に仇なす思想とは徹底的に戦ふ決意となつた。それを私達は思想戦と呼んだ。然し、より根本的に云へば、外国文化を正しく移入するための戦ひが思想戦である。異質文化の移入によつて、その民族の固有文化が崩壊し、遂に国家が滅亡した例は世界の歴史には数限りなく存在する。つまり、外国文化の移入は「文化の戦ひ」であり、それは先づ自らの精神生活の内なる戦から出発するのである。そのやうな外国文化を正しく我が国に攝取されたのが、遠くは聖徳太子であり、近くは明治天皇であらせられたのである。その意味でも、私達は御二方を尊崇し信順しまつたのである。私達は祖国

防護の思想戦において「文化の戦士」となるべく決意したのである。ともかく、佐賀合宿は私達に新しい視野を開いてくれた意義ある合宿となった。同時に、更に重要なことは、従来山口高商「斯道会」内部に留ってゐた同信生活が、学校差地域差を越えて、全国的広袤の上に展開してゆく契機となったことである。

其の後「斯道会」内部の合宿は三年生の送別の為に、三月の休暇と、新入生歓迎の為の四・五月頃とに毎年行ふやうになった。然し、何と云つても感銘深い印象を残してゐるのは全国合同合宿であつた。

昭和十五年五月日本学生協会が結成され、理事長には田所広泰先輩、理事には高木尚一（一高―東大―現在高崎市立経済大学教授）等の先輩が、また幹事には小田村寅二郎先輩（現、国民文化研究会理事長）等十七名が就任され、顧問として近衛文麿公爵・徳富蘇峯・三井甲之先生等当時の著名士二十数人が名を連ねられた。一高昭信会の四・五人の小グループから発足し、それが東大文化科学研究会となり、更に全国の大学・高校・高専を網羅した規模へと発展したのである。この日本学生協会の結成を記念し、七月、信州菅平高原で開催された「全国学生合同合宿」は画期的な大合宿となった。この合宿には遠くは満洲の建国大学や満洲医大、また台北高商からも参加者があり、全国の大学・高校・高専等からの参加校数八十四校約四百名を二十班に編成した大

合宿であつた。山口高商からは総員十四名が参加し、参加者の多い学校となつた。この合宿では久しぶりに江頭・百武君等佐高同信会の諸友と再会した。お互に手を取り名を呼び合つて喜びあつたことが思ひ出されるのである。一條君は第十三班に所属し、班長は当時東大在学中の瀬上兄で、同班には、水戸高校野中孝夫君（高校在学中急死）、佐賀高校の龍野清澄君、松江高校の平塚新君（九大在学中病死）、府立高校小田村四郎君（現行政管理庁事務次官）等多くの人材が集つた。このやうに全国的規模で一條君の精神交流世界は開けていつたのである。

そして、最後に残されたのが山口高校との交流であつた。山口高校には由道会があり、菅平合宿には元山俊彦兄が参加してゐた。また、学生協会の幹事であつた岩本重利先輩（東大―復員後病死）が山口高校の出身でもあつたが、然し、なか／＼交流が出来ず、それが実現したのは昭和十六年一月になってからであつた。この時のことを一條君は東京に次の通り連絡してゐる。「山高由道会の元山兄外二名と今や一体となりました。昨十六日由道会と斯道会座談会を行ひ両者間に存する紙一重の感情的対立を完全に打破し、なごやかな一夜を送りました。山高・高商の合体は無限の強さを感じます。山口を同信の町たらしめむとしてをります。」と。そして、宝辺正久君と松吉正資君（東大―戦死）とが堀ふみ方に移り、由道寮を創設し、両校が合併して中国正大寮が発足したのである。中国正大寮々々報「神洲不滅」（刷文の題名）創刊号には両校の交流実現

を一條君は次の通り歌つてゐる。それは一條君が高商二年の時である。

つながりてものは生るゝとふ師の御言葉は現しくなりぬ山口の地に

大君に仕へまつらむますらをが集ひ語れる今宵楽しき

また、当時山口高校一年の松吉君は

今宵はじめて逢ひし友らの間にも心と心流れかよひぬ

つどひたる友のまどゐに目に見えぬつながりを今感じけるかな

あひつどひ今更のごと今までにかたらはざりしことをくやむも

あはせたるわれらが強き力もて鴻城の地をふるひうごかさむ

と歌つてゐるのである。「鴻城」とは山口の別名である。そして、後記に私は

「あ、今迄幾度か為さんとして為し得ざりし由道会の友等との精神交流共感共鳴の世界は実現されたのである。不可測の神意によりて。『明治維新の原動力となりし防長二州の再建』これこそ我等の共通の念願である。我等は一体となりて共に／＼戦ひ行かん事を固く誓つたのである」

と、その時の感激と決意を示してゐた。

かうして、にぎはしき同信生活は開始された。私達が三年生になった時は、山口高校は三年生

に宝辺正久、二年生に松吉正資、一年生に松井英也（東大―戦死）、堀春夫（東大―在鎌倉）・高商は三年生に一條・林榮一と私、二年生に松尾誠一、森田伊佐夫、一年生に成松武久君の十名が、中国正大寮に入寮してゐた。寮は二階建てで、確か八部屋であつたと思ふ。二階の一番西の端の部屋を空き部屋とし、そこに神棚を祭つた。この部屋で、毎日夜は皇居を遙拜し、順番に明治天皇御製拜誦を行つた。また、しきしまの道会や三井・黒上先生の御著書や古典を輪読する部屋とした。この部屋が中心となつて寮生活は展開した。このことは、一條君も昭和十七年九月、秋田の連隊より中国正大寮の後輩宛に送つた葉書の中にも次の通り書いてゐる。

「未だ相見ぬ友等なれど、山口の正大寮の二階の一室は永劫に忘れられぬ記念の生活なれば、これを相続せんとする諸兄に限りなき懐しさを感じる」

今まで多くの枚数を中国正大寮成立までの経過に費してきた。これは一條君の思ひ出は、全てと云つて良い程斯道寮、更には中国正大寮での生活に繋つてゐるからである。前置きが長くなつたが、以下一條君の思ひ出を記して、故人の在りし日を偲ぶこととする。

以下のことは、戦歿病歿同志の遺稿集出版の計画が発足した直後、先にも紹介した私達旧制山口高商の二年後輩に当る名越二荒之助君（当時、高千穂商科大学助教授）が、昭和五十一年八月、

一條君の墓参と御遺族訪問を思ひ立ち、その折、弟妹に当る一條真通様、橋本信子様よりお聞きしたことを報告してくれた文章、及び妹信子様よりいただいた御手紙を参考にさせていただいてゐる。

第一に忘れられないことは、中国正大寮の同信の友の中で一條君程宗教的情操を湛へ、宗教的求道心を持った友はゐなかつたと云ふことである。例へば昭和十八年七月秋田の連隊から中国正大寮に届いた葉書にも

「唯今丁度三井先生の『親鸞研究』を読みつゝ、あり、同信生活の深遠なる意義を思はしめられて居ります。実に尊き道のしるべとなる書物と思ひます。」

と軍隊生活の中にあつても、余暇には尚学生時代そのまま、に読書求道の生活を続けてゐたことが判明する。

一條君の宗教観は、満洲時代の西田天香師への傾倒より始まり、親鸞への信仰に發展した。有名な「出家とその弟子」の著者倉田百三氏が「一燈園」に入信してゐたことも、親鸞の教へに導かれる契機となつた様にも思はれる。しかし、基本的には斯道会に入会し、三井甲之先生に直接御講義も聞き、御著書に導かれて、親鸞への信仰は開かれたのである。そして更に、三井先生の

「祖国禮拜」の長詩に示されてゐる如く、親鸞より祖国に対する信仰へと深化していつたことは、第一回斯道会合宿後の家族宛の書翰でも明らかに伺はれる通りである。三井先生の長詩を殆んど暗誦してゐたことは既に述べたが、その中で一條君が繰返して愛誦してゐたのは、

祖国を去りても 胸にはうかぶ 祖国の面影、見ゆる現実、見えざる信海、「ほっかん發願は決意生活、
執持しゅうぢは自信生活、信樂しんぎやうこそは同信生活と、三機を分つ心理分析、親鸞はかくこそ説きし」と
つぐる友よ、ああ樂しきわれらの同信同朋生活。「祖国主義」

といふ一節である。また、親鸞の和讃の一節「信樂まことに得る人は 憶念の心常にして 佛恩報ずる思ひあり」も、良く話の中に引用してゐた。

ともすれば自我に執着し、迷ひ挫けむとする心を、共に励まし力づけあひ、友の喜び悲しみを憶念しながら送る同信生活の内から、自然に祖国に報じようとする發願が、即ち決意が生れてくることを私達は体験した。

上述の一條君の葉書にも先に引用した文章の前に次の様な言葉が続いてゐた。「なつかしき君がみたより拜見し諸兄と親しく語れる如き氣持で読み終わりました」——一條君は秋田より山口に離れてゐる友らの上を「したしく語るが如き氣持ちで」憶念してゐたのである。同信生活は未だ見ぬ後輩との間に続いてゐたことが判明する葉書である。そして、それに続いて

「孤独の淋しさと交流の歓喜と交代する苦闘はいつまでもつきないのでありませう。まことに精神の展開のまに／＼生くる事、たゞその中に一すぢの信を貫かむとする意志を、そののみを思ひます。」

と、人生そのもの、の自然に信順しつつも「一すぢの信を貫かむ」との決意を記してゐるのである。一すぢの信について『親鸞研究』の中で三井先生は次の通り述べるのである。

「われらは個人意志を総体意志に結合する時に、信樂開発の感激に充たさるゝのである。：しからば、われらの歸命すべき総体意志は何であるか。それは日本意志である。それが本願力である。此の本願力としての日本意志に歸命し歸依するといふのは『日本は滅びず』と確信することである。現日本の日本人にとつては反復すべき名号は『祖国日本』である。われらの宗教は祖国礼拝である。『日本は滅びず』と信するが故に、われらのはかなき現実生活を悠久生命につながらしめらるるのである。それが攝取不捨である。攝取して捨てざるが故に阿彌陀佛といふ。即ち攝取して捨てざるが故に祖国といふ。」（註・傍点は筆者）

三井先生が「名号」と云はれるのは親鸞に取つては「南無阿彌陀佛」であつた。現代に生くる我々の稱ふべき名号は「南無日本」であり、禮拜の対象は「祖国日本」である。また、三井先生の云はれる「総体意志」「日本意志」とは「日本は滅びず」と確信し、われらのはかなき個人生

命を、祖、國の、悠、久、生、命につなぐんと発願し決意することではないだらうか。祖国が現在まで続いてきたのは、それを悠久たらしめんとする意志が持続継承された為ではないだらうか。祖国を防護せんとして苦闘して来た祖先を、また今もその志を継承して戦ひつゞけてゐる友を憶念する時、我々は同じ一つの信につながつたのである。かうして、一條君の信仰は親鸞から祖国に対する篤信に深化していったのである。

最近宝辺君は中国正大寮での一條君の印象を一連の歌に詠んで送ってくれたが、その中に次の様な歌があつた。

ゆるやかに南部ななぶなまりに親鸞を語りし友の生命消けうせず

これは、一條君と生活を共にした者全ての思ひである。一語／＼を噛んで含めるやうに、親鸞の言葉を、長詩「祖国禮拜」を引用しながら訥々と一條君は語つてゐた。その面影は三十年以上もたった今も私達の心の中に生きつづけてゐるのである。私は先立つた友の遺志を後世に言ひ継ぎ語り継ぐ責務をこそ痛感してゐる。

このやうな一條君の信仰を私達以上に知つてをられたのは肉親であつた。特に、御母堂のことを名越君は次の様に伝えてくれた。

「一條さんは肉親の中でも御母堂と一番親しんだ。二人の間の往復の歌や手紙も山のやうにた

まってるた。それだけに御母堂は我が子浩通の死をなげかれた。最初のうちは『現地に行つて見なければ信じられない。どうしても行く』と言ひ続けてをられた。『しかし晩年になつてからは『浩通はあの時戦死した方がよかつたのではないか。生きて敗戦を迎へたら自決したであらうし、たとへ生きて歸つても、今日のやうな日本は見るに忍びないのではないか。神洲不滅を信じつゝ、死んだ浩通は幸福であつたかも知れない』と悟りの心境になられ、死期が近づくと『これから浩通の所へ行く』『浩通に会へる』と云ひ残されて、安らかな大往生をとげられた』と。時に昭和三十六年であつたと云ふ。

この文章を読んで私の脳裏に直ちに浮んだのは、終戦直後の八月二十日福岡市郊外油山で自刃した寺尾博之君のことであつた。大東亜戦争の戦死者の御遺族の中には、世に知られざる一條君の御母堂の様な方が数知れぬ程をられたのである。これらの方々も年老いて数少くなりつゝ、ある現代である。このまゝで果して良いのであらうか。

第二に一條君は本当に友情に厚く、後輩に対しても細かい心遣ひをしてゐたことも忘れ得ぬ思ひ出である。自分一人で楽しむことをせず、友人を楽しませ喜ばすことを、自然に先にしてゐた。そして私達の喜ぶ顔を、本当に嬉しさうに眺めてゐた一條君の面影が目に見えるやうに浮かんで

くるのである。遺稿に「故郷の母より菓子送り来る」と題する歌が残つてゐる。その内に
「楽しさは母の賜ひし小包をながめすがめつ紐をとくととき

との一首の歌が残つてゐる。「ながめすがめつ」との言葉には一條君の喜びが巧まず自然に表現されてゐるのである。よく盛岡から菓子や時にはリングも送られてきた。私達は、皆同じ様なことであつたかもしれないが、特に一條君のその時の嬉しさうな顔は現在も忘れられない。

妹の信子さんの手紙にも「入隊は盛岡の隊でした。兄の隊はやがて幹部候補生となる一隊だったので、それはく厳しく外出は一さい無く訓練も一しほ厳しくて、たふれる者が出ると聞きました。母と私共は面会日には必ず出かけました。いよく乏しくなる食糧を工夫して何やかや作つて持つて行きました。兵隊は皆お腹をすかして面会を待つてゐるのです。浩兄は、あの様な人でしたから、面会の来ない友人を必ず二・三人つれて参りました。お腹一杯食べさせて、ニコくしながら兵舎から振り返つた顔が忘れられません。お知らせいたゞきました中国正大寮の兄のことが改めて想起され、思はず眼が曇つてしまひます。」とあるが、学生時代と少しも変らなかつた一條君が偲ばれる。

それだけに、一條君は友人や後輩から本当に信頼され慕はれてゐた。寡黙ではあつたが、一條君に接してゐるだけで、自然に苦しみや悲しみが温い太陽の光にあつて溶けるやうに感ぜられた。

辛いこと、苦しいこと、嫌なことは自分から進んで引受け、それも一條君が解決した後で私達が氣づくことが多かったのである。一條君は昭和二十年一月、フィリップン・ルソン島で戦死したのであるが、その間の軍隊生活について一條君のことを、名越君は次の様に知らせてゐる。

「私たち後輩もさうだったが、軍隊時代の一條さんは皆からも親しまれてゐたやうである。」「一條君は部下を撲ることができない人であり、また一條隊は氣合がかゝらないぞ、と指摘されたこともある。虚勢を張ったり要領をつくることを一番苦手とする人であつた。しかし隊員が寝靜つた後、一人起き出して昼間できない土工作業に黙々と取り組むこともあつた」とは一條先輩が小隊長であつた時の中里範清中隊長から御遺族が聞かれた話である。また、中里氏は遺骨収集派遣団員として三十年近くも経つてフィリップンに行かれた際、一條さんの戦死した部落に行つた時のことを次の様に伝えてゐる。

「私がアムラング部落（十五・六軒の土民小屋）に近づいて「フレックス・トニー」と知人の名を大声で呼ぶと、二十四・五人の現地人が近づいてきた。彼らはまだ私やイチジョーの名を記憶してをり、五十才くらゐの男が、キャプテン・イチジョーはあそこで死んだと指差した。彼ら現地人はその頃日本人と親しみ、戦闘中も夜になつて握り飯を運んでくれた。」一條先輩の人柄は彼ら戦友の心の中に生きてゐたのである。」と。

この文章を読んだ時、私の脳裏に浮かんだのは聖徳太子の御言葉であった。それは「自他の二境を平等にして」「物とその苦樂を同じくする。」（維摩經義疏）といふ御言葉であった。自分もひとも共に至らぬ凡夫にしかすぎないとの境地になってこそ、物（人々）とその苦樂を共にすることが出来るとの太子の御教へであるが一條君はその御教へを実行したのである。そして、日本人と他国人の差別をも越えて心を通はさうとしたであらう。私にはそのやうな一條君が偲ばれ、追慕の念を益々深くするのである。

一條君が後輩達に如何に慕はれてゐたかを示す思ひ出は數多く残つてゐる。ここでは、たゞ一例として、戦死した松吉正資君が次のやうな歌を残してゐることを紹介しておきたいと思ふ。それは昭和十七年一月初めのこと。前年十二月に高商を繰上げ卒業した一條君は、十二月末日から卒業と入隊挨拶の爲に、新京の満洲電業本社に行った。その歸りを待ちつゞけてゐた松吉君が、新京から一旦歸寮し、すぐ故郷岩手に歸る一條君を送る時に歌つたものである。

新京ゆかへりこむ君待ちわびつこ、だの日かずへし心地する

君恋ふと氷る冬の夜いく夜さを友らとともに待ちわたりしか

歸り来てあしたを待たず別れゆく君が姿のつきずかなしも

宵の道を送りてゆけば大空にちりしく星の何ぞ美しき

またあふはいつの日ならむいつまでもおろかなる吾を忘れたまふな

別の資料によれば一條君が山口を出発した日は一月十三日の夜と記されてゐる。新京に出発して歸寮するまでの僅か二週間ぐらゐを「友らとともに待ちつづけた」といふ歌からも全寮生が一條君をいかに慕つてゐたかが判る。「氷る冬の夜」と云ふ言葉には一條君の姿の見えぬ寮の淋しさがよく表れてゐる。だが「またあふ日はいつの日ならむ」と歌つた通り、二人は再会する日も無く、ともに戦死してしまつた。残された私達は現世で相まみえることの出来ぬ二人のありし日を偲び、追慕と哀悼の念に胸塞る思ひがする。

第三に忘れられないことは、一條君は心優しき反面、一つの信を貫き通す強き決意が自然と眼にこもり、生きて輝いてゐたことである。軍隊時代の一條君を評した中里中隊長の、「私には今尚彼のガッチリシタ長身、目の光、それでゐて温厚な部下思ひ、腹がしつかりとすわつてゐた沈着の姿が消え去りません」との言葉には、一條君の横顔が良く表れてゐる。「腹がしつかりとすわつてゐた」との印象は、自らの信を妨げる者、祖国に仇する者とは断乎として戦ふ不屈の意志と強い情熱を内に燃しつづけてゐたことを示してゐるのである。

例へば斯道会に対して、学校当局の看視の目が厳しくなり、つひに弾圧されんとした時期があつ

た。それは菅平合宿後、夏休みが終り二学期が始った昭和十五年九月の頃であった。その頃、文部省の指導により教育刷新の新体制が進められてゐた。これは私達が祖国の伝統に立脚して改革すべしと主張しつづけた教育内容には觸れることなく、單に組織や制度を中心とした改革で、この爲、学内の文化団体は再編成されることになり、私達斯道会も解散の岐路に立ってゐた。私達は名稱は変更されても何とか独立した団体として認められるやう学校当局に強く要望した。

一方、学生協会との連絡についても厳しい看視が行はれるやうになつた。その一契機になつたのは、所謂「小田村事件」(註、当時東大法学部学生であつた小田村寅二郎氏・現国民文化研究会理事長が法学部講義内容を批判したことにより退学処分を受けた事件)と云はれる問題からであつた。この点については、説明を省略するが、ともかく、対外的に発表する文章は必ず学校の検閲が必要となつたのである。

たま／＼昭和十五年十月七日から三泊四日の合宿を斯道会が挙行した。そしてその報告記録を「青年の進路」と題し、協会の機関紙に発表するため原稿は生徒主事に提出され、検閲を受けねばならなかつた。生徒主事の某教授は数多くの箇所を厳しく訂正し、或は削除を指示し挙句の果に発表を禁止した。指摘された箇所は例へば「祖国日本」「祖国防護」と云ふ表現は「皇国」と訂正すべきである。また「た、かひ」と云ふ表現は不穩当であると。私達はこの状態を放置して

ゐては今後彈圧が益々強くなると予感したので、私達の眞意を訴へるべく「生徒主事に奉るの書」を作成し、生徒主事に提出した。それは四百字詰原稿用紙で約六、七十枚の長い論文となった。

それを各項目に分け、荒木稔兄、一條君、林栄一君、松尾誠一君それに小生がそれぞれ分担執筆した。例へば、(一)序文は一條君 (二)現代学校教育については一條君と小生と云ふ風に分担し、(三)ジャーナリズム批判(註 当時の流行思想批判のこと) (四)大学問題 (五)新体制について (六)結論、と続くのだが、この内最も多くの部門を受け持ったのが一條君であつた。その一部分を紹介する。

「私達が『祖国』とか『た、かひ』と言ふ語を用ひるのは不穩当である、あたかもマルキシズムの盛んな時代にマルキストが用ひた語と同一であるとせられる。又先日生徒課の一先生が『斯道会の用ふる言葉から臣道実践を除いたならば、丁度往年の赤化運動と同じである』と云ふ意味の事を云はれたが実に意外でございます」

と、一條君は諄々と眞意を説いていく。「戦ひ」「戦ふ」と私達が言ふのは「文化の戦士」たうとして言ふのであり、そのためには先づ自らの内心の戦ひから出発せねばならぬという意味であつた。また近代戦は武力戦であると同時に思想戦であり、かゝる思想戦を「戦ひ」と云つたことも明らかに表明したのである。そして、

「かくの如く日本国体を防護せんが爲に文化の戦ひを行はむとする私達の意志行動を、赤化運

動と混同されてゐる様であるが、これは承諾必謹・臣道実践と、国家を破壊せんと意図する赤化思想とを同一視する學術的誤謬である。(中略)「斯道会から臣道実践の語を取去つたら……」と云はれるが、斯道会は「臣道実践」以外の何物でもなく、私達の現在の決意は「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」とのたまひし勅語をかしこみまつりて「軍いくさの場にはにたつもたためぬも」もろともひたすらに御国を思ひて此の世を終ふることより外に、私達民草の行くべき道はあるべくもないと信じてをる。従つて、私達が現在行ひつゝある事は全く日本国体を基準とし、国体に反するものは飽くまで之を非とし、是正せんとしてゐる事を御高察願ひ上げたい。」

と自己の信ずるところを堂々と明らかにしてゐるのである。

そんな場合でも、一條君は他を責める前に、批判する前に、先づ自らの至らざるところ、足らざるところなきかと不断に反省し、求道精進してゐたので、至誠心が自然に態度や行動にも表れてゐた。これは例へば、この論文の最初が次の様な言葉で書き始められてゐることを見るだけでも明らかである。

「この度『青年の進路』と題し月刊誌に投稿致し度く検閲を願ひ出た所、種々御厚情ある御批判御指導を賜はり、私達の精進に御力添を下され一同誠に感謝致して居ります。私達は未だ学

問浅く人並の体験も少く、修業も未熟故、将来益々御指導御鞭撻賜はり度く御頼み申し上げます」

先生に對して礼を失せざるやうな配慮、ここに一條君の謙虚な人柄があらはれてゐると思ふのは私一人ではあるまい。

第四に、忘れられないことは一條君が本当に親思ひ兄弟姉妹思ひであつたと云ふことである。前にも述べたやうに、御母堂と一條君の間には数多くの歌や手紙がかはされて残つてゐたのに、それらは殆んど御母堂が御逝去の際柩の中に一緒に葬られたのである。現在私の手許に残つてゐる遺歌の中にも、一條君のそんな氣持を表した歌は残つてはゐるが、多くは焼却されてしまったことは後悔される。

新しき年を迎へて祈りたり老いし父母幸あれかしと

木枯の吹きて故郷思ひけり寒さに弱き父にしありきと

わが好むくさぐさの菓子を故郷の母はえらびて送り給ひぬ

母よりの送りきませる包には餅もまじりぬ正月なれば

秋の夜も静けき夜半となりぬれば吾が父母はいねますらむか

その外にも、「支那に行く姉に」と題する歌も残つてゐる。

北支那にいましたんとするわが姉に我送たり御集二冊を

北支那のいしずゑたらむわが姉は雄々しくとつぎ渡りてゆきぬ

新しき道ふむといふ心もて北支那人をいつくしむべし

また、信子さんは、一條君が満洲に就職した当時のことを回想してお便りの中に次の通り記してをられた。

「長兄が医大に進み姉は花嫁修行、私は女学校にと、表向きは、はなやかに見えました。母は随分無理をしてゐた。うらうと子供ながらに思はれました。その様な時でしたので、浩兄は進んで社会に出ると云つたのです。親戚の方で電業会社に居られるとは聞きましたが、満洲に行くときめた時、私達はびっくりしました。浩兄は「僕はいいから眞通と泰徳を（注 二人とも浩通君の弟さん）大学にやっつて下さい。」とニコ／＼しながら母に云ひ、母はその事を終生、浩通に済まない涙で申して居りました。（中略）山口高商にやうやく入学出来たと聞かされた時、父がじつと涙をこらへて居た顔を思ひ出します。」

また、信子さんの御手紙には次の様な思ひ出も記されてゐた。

「戦争が大きくなり、長兄は軍医に、浩兄も入隊の時が来ました。その頃でしたか兄の衣類

などでもどり、それを見て母が驚きました。乏しい中から着替へを幾枚か持たせたのに、もどつたのはたった一枚の着物だけ、お尻も膝もぬけてポロ／＼でした。兄は、それを、この一枚が切れるか山口高商に入学出来るか頑張つてみた。おふくろさんの縫つたものはもつたいたいないと申しした由、母は浩通といふ子は……。と云ふだけでした。」

信子さんがポロ／＼になつた着物のことを書いてをられる点については、満洲時代から中国正大寮の生活の中で、ひとつのことが思ひ出される。先にも紹介した宝辺正久君の歌の中に「どてら着てくらき部屋ぬち文机（ぶんぐい）にむかひし後姿（まなづら）よわが眼裏（まなづら）に」と一條君の印象を歌つたものがある。この歌を読むと一條君の寮生活の一端が鮮明に思ひ出される。勿論、冬には火鉢に炭火は入つてゐたが、部屋全体が温まらないため、寒い時一條君はよく頭からすっぽりと、「どてら」を被つて読書してゐた。その時の後姿が今も眼裏に残つてゐる。その印象を私達は一生忘れることはできないであらう。満洲でもほぼ同じ様な印象が残つてゐる。奉天の寮でも冬は一晚中暖房が入つてゐた。日曜日や正月には布団を敷いて寝てゐたが、私も勉強に疲れ、ば「どてら」を着ただけで横になつて寝るやうな生活が続いた。恐らく一條君のポロ／＼になつた着物と云ふのは「どてら」のやうなものではなかつたかと思ふのである。

このやうに一條君が親を思ふ心にもまさる御母堂の親心を、名越君は次の通り知らせてくれた。

「御母堂は生前一條さんの軍隊時代の肌着をいつも着てをられた。修理に修理を重ね、雑巾のやうになつてもまだ肌から離されなかつた。」と。

なんと云ふ有難い親心であらうか。この文章を読みつゝ、私は声をたて、泣いてしまった。親子の情愛の深さと、心のつながりの美しさと悲しさに、身も震へるやうな強い感動を覚えたのである。

一方、名越君は、一條家の系図は甲斐武田家の末裔であり、十八万石の殿様であつたと、次の様に知らせてゐる。

「一條さんは御母堂だけでなく兄弟姉妹の中にも生きてゐる。御兄弟姉妹は子供が生まれると「浩」の名を必ずつけてをられる。浩子が二人、浩己、靖浩、浩明等。(中略)甲府にはその先祖の神田家が今も続いてゐる。その神田家に令妹の京子様を嫁いでをられる。戦後小田村理事長らの努力で、三井甲之歌碑(ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを)建立の運動が起つた。それを知つた京子様は「兄の遺志を生かしてほしい」として金一封を贈られた。」

この様に一條君の遺志は肉親の中に生き続けてゐるのである。

最後に、一條君の最期を御知らせすることとする。一條君の戦死の状況について名越君は次の通り伝えてゐる。

「十九年末レイテ決戦が終つて米軍の攻撃目標はルソン島に移つてゐた。当時一條さん所属の盟兵団庄司大隊は、ルソン島リンガエン湾、アムラング地区で現地民と結束して米軍の上陸に備へてゐた。人間死期が近づくときそれを予感するといふ。一條さんはそれを予知したのか、昭和二十年一月十七日夜、とても淋しがつて当番兵を自分のベッドに入れ、過去の生涯についてしみじみ語つた。もし自分が戦死したら軍刀をとつて指揮してくれとも言つたといふ。翌十八日朝、湾の彼方に突如艦隊が現はれた。最初は友軍かと思つたが忽ちに艦砲射撃が始まつた。それは山の形が変るぐらゐの猛砲撃であつた。現在の壕では持ちこたへられさうにない。一條小隊長は中隊長と相談し一時後退もやむなしと判断した。彼は隊員に「退路を偵察してくるから動かないやう」指示して、單身出かけた。その時また砲撃が始まつた。その直撃弾が彼に命中したのである。時に午前十時。隊員は小隊長がなかく歸つてこないで捜しに出かけて、その死体を発見した。その下半身は木端微塵、上半身はそのまま、残つてゐた。軍刀の柄をしっかりと握り、安らかな死顔であつた。」

この文章を一読した際の私の心情は筆舌に表はすことができなかった。一條君の思ひ出が一瞬間の内に脳裡に溢れ、悲歎の涙をながすのみであつた。その時の思ひを私は拙い歌に詠んだ。

戦ひに倒れし友のみ姿を知らせ給ひしこれの文はも

亡き友のみ姿うつしく見ゆるがに目に浮びくるみ文し読めば

さきがけて敵情さぐると部下残し君進みしか弾ふる最中を

飛び来る彈現せ身をうち碎き足も失せしか読むにえたはず

剣太刀手にぎりはなさず玉の緒の生命絶えにし悲し君はも

文読めば亡き友ひたに偲ばれてとゞめもあへず涙流るる

満洲の奉天なりき亡き君と初めて会ひて友となりしは

ありし日の君の面影ふるまひの目に見ゆるごと浮びくるかな

四十の年月過ぎしか相ともにはげましあひつつ学びし日々より

骨身まで氷る思ひもたへしのび異国の冬の街を行きしか

親鸞はかくこそ説きしと「歎異鈔」の言葉を示し教へたまひし

「善悪の人をえらばず」たすけます彌陀の本願ときし君はも

み仏の理想はうつしく我が祖国日本に生くると我ら信じぬ

国守る一つの願ひに結ばれて君とたどりし道をしぞ思ふ

亡き友と一信海につながりし深きえにしの絶ゆる日あらめや

夜もすがらしめやかに降る秋雨あきさめの音をききつつ君偲ぶなり

この歌以外につけ加へる言葉もない。そして、一條君の戦死と前後して同信の友の幾人か、フィリップで戦死してゐる。かく云ふ私の弟も五月、ルソン島の山奥で戦死してゐるが、戦死の状況等は八方手を盡したが判明しないまゝである。

なほ、ここで是非とも書きとめておかねばならぬのは先にも引用した秋田の連隊から名越君達中国正大寮の後輩に宛てた一條君の葉書の一節である。

「まことに死を予察せしめられる時に人の心は極度に緊張せしめられ、思ひを言葉に或は芸術に托せむとする衝動にかられます。諸兄等の入營を目前に控へ死を決して合宿してゐる有様、心情が今現実を感じられます。生死しようれいを分たず」といはる、強き言葉が想起せられる事と思ひます。親鸞によれば、死こそ生の全き進行と仰せられて居ります。実に無疲倦無畏怖意志を振起せしめられる言葉です。生を現実化せしめんと戦ひ居る諸兄よ。信疑を決すべし、死を決せよ。そは生の全き進行である」

この短き言葉には一條君の全生涯の思ひが全て集約集中して表現されてゐる。「死を決せよ。そは生の全き進行である」とは何と云ふ強い確信をこめた言葉であることか。既に無意識の内に戦死を予感してゐたのであらうか。一條君は生死を分たず一信海につながる道を進んでいったのである。

信子さんは御両親と一條君の最期の別離の日の思ひ出を次の通り知らせて下さった。

「最後の兵隊だと云はれてゐた秋田の部隊が秘密の出勤ときまった時、ひそかに兄から葉書がとゞき、父と母はとるものもとりあへず出掛けました。その一夜両親と語りあかしたのですが、それが兄の肉親に接した最後でした。翌日の夜中にザワ／＼と雨の音で母が目覚めたと思つたらそれが、兄達の出発の靴音でした。その時の様子を母は幾度も／＼私共に話しました。そして、やはり兄は戦死してしまひました。なつかしい兄です。」

この文章を読む時私は、戦死者と共に限り無く行進する一條君の靴音が耳に響く思ひがするものである。昭和十七年一月、一條君が山口を出発した日は、私は郷里岡山に歸つてゐた。一條君が岡山駅を通過したのは、未だ夜の明けきらぬ早朝であつたと思ふ。当然、駅のプラットホームまで別れに出た筈である。然し、その時の印象だけは全く思ひ出せない。つまり、今は幽明境を異にしてしまつたのであるが、一條君と私とは今なほ別れたとは思へないのである。

そして三井先生が黒上先生のみ靈に捧げられた「のりと」——「つながるは いのちのすがた、わかれては かなしかれども うまるるも 身まかるも つながるために わかるるなれば、」の一節を、くりかへして一條君のみ靈に捧げるのみである。

(五三・八・二六稿了)

百武禮之君

東京歌舞伎座の二階席の観衆が一斉に百武君に注目した。彼が広い歌舞伎座全体に響くやうな大声で「天皇陛下万歳」と叫んだからである。当日はビルマのパーモ首相が歌舞伎見物に来てゐた。そして、興行が終り帰途につくパーモ首相に敬意を表し、観衆も一緒に「パーモ首相万歳」を称へた直後であつた。一呼吸置く間も無く百武君は、ただ一人でさう叫ぶと平然として出口に歩んでいった。

「パーモ首相万歳」は政府関係者の音頭であつた。私もすぐ引き続いて「聖寿万歳」を何故称へないのかと不満に思った。然し一瞬躊躇してゐたのである。百武君の在りし日の思ひ出の中で、強い印象となつて残つてゐるのは、その時の光景である。耳の底に残つてゐるのは、その時の百武君の声である。昭和十八年十月であつた。その日から三十年以上の歲月は流れた。



百武君は佐賀中学出身の秀才で、中学時代は柔道部に入り段位も取つてゐたと思ふ。佐賀高校に入学するとすぐ同信会（校内団体・高橋鴻助教授指導）に入ったのであらう。昭和十四年七月の原当麻での第一回全国学生合同合宿（東大文化科学研究会主催）にも参加してゐたことが、その時の記念写真からも判明する。しかし、班が異つてゐたので、知り合ふ機会はなかつたのである。そして、初めて百武君との友情の交流が始つたのは、その年の十二月の末、福岡市青年道場で開催された日本青年団の合宿であつた。その時も百武君は江頭俊一君と一緒にあつた。二人は佐高一年の時から常に形影ともなふ如く、百武と云へば江頭が、江頭と云へば百武が思ひ出される間柄だつた。江頭君は私達の内でも最も長身であつたが、百武君は普通よりもやや低く、二人は対照的であつたが、内心に強靱な意志力を湛へてゐることは共通してゐた。然し、その性格にはそれぞれ特色があつた。百武君は、内なるものが自然に外面に浸透してをり、論理的思考力と的確な判断力及び果敢な実行力において優れてゐた。江頭君については名越君が「歌ふが如き詩的韻律に満ちた精神生活」と適評した様に、柔軟で弾力的な感性と思考

力を持つてゐた。百武君は喜怒哀楽を勉めて抑制してゐるやうに感じられる面があつたが、江頭君は明朗豁達な性格であつたことが印象に残つてゐる。二人はそれ／＼の長所を生かすつゝ、自然にお互ひの短所を補完しあつてゐたやうである。そして高校時代はどちらかと云へば百武君が佐高同信会をリードしてゐた。東大に入つてからは百武君が病氣した関係もあつて、寧ろ江頭君が学生運動の中心となつて活躍した。二人の内、一方の活動力が鈍つたとき、いよく責任を痛感したのであらうか、それが江頭君の早世の一原因となつたやうにも思へるのである。

百武君について忘れ得ぬ強烈な思ひ出の一つは、同君達佐高同信会の主要メンバーが停学処分、或は出校停止の処罰を受けた佐高問題である。事件は、昭和十六年四月の始業式の日に発生した。「昨日始業式の訓辞に、校長は生徒全部の前で我々を『密告者』『友達を売り』『師を陥れた』『佐高始つて以来の卑劣漢』呼ばはりをし、やむに止まれず我々は敢然立つて戦ひました。まことに思はざることのつきつきに起り、唯々力足らず誠足らざることを嘆いてをりますか……」と百武君は東京正大寮宛に連絡してゐる。「敢然立つて戦ひました」といふのは、校長の訓辞に対し、成富正好君と百武君が直ちに立つて、全生徒の前で校長に対し、「それは同信会を指して言はれてゐるのか」「具体的な根拠を示して下さい」といふ意味の質問をしたのである。

ところが、始業式において校長が発言した際には既に学校の方針は決してゐたのである。この

ことを百武君は次の通り知らせてゐる。「新校長は教授会に於て『学生協会は徹底的に弾圧する。これは当局の方針なり』と云ひ、『自分の任務は高橋、小林教授の処分と、佐高より学生協会を全面的に掃討することである』と闡明した。」と。そして十日放課後会員はクラス主任より呼ばれ、学生協会との連絡を禁止された。その内容は、協会発行の図書購読、販売の一切を禁止する。また、個人の文通も時候の挨拶、年賀状等の外、思想内容にわたるものは許さぬ。今後連絡を取つたことが判れば処分するといふものであつた。全く現在では信じられないやうな不当なものであつた。

当然、全員あくまでその理由を糺したのであるが、その返答は支離滅裂で、ともかく学校の方針だから、それに従ふかどうか。返答を一両日中に必ずすることを命ぜられる状況であつた。かくて「会員一同一致団結して、当局の強圧に屈することなく、断乎戦ふことを決意した」と百武君は東京に伝へてゐる。

教授宅の訪問等精力的な努力が傾注されたにも拘らず、遂に五月六日百武禮之・成富正好・高橋和彦君が停学処分、江頭俊一・下畑達雄・籠野清澄・岡本直正・池上明君の五名が出校停止の処分を受けるに至つたのである。その日は生徒主事により「生徒の本分に違反した」と云ふ理由で処分の申渡しがあつたのである。父兄の質問に対しても、何ら納得できるやうな説明はなかつ

た。その日、指導教官を訪ね具体的理由を質ねた処即答は無く、後で次の通り返答があったと百武君は知らせてゐる。

「その為急遽職員会議を開き、生徒主事より処分を改めて公表することであつた。かうして発表されたのが左の五ヶ条だったのである。(一)学生協会の事に夢中になり学業を放棄したこと(二)孝道をかへりみぬ事(三)師弟道に背いた事(国会に教授の講義内容を捏造して密告した)(四)思想上校紀を乱した事(学生協会を尊敬して、教授を馬鹿にする。始業式の時講堂で立つて質問した事)(五)下級生に対し害を加へた事(昨年某学生を強制的に入会せしむる為半日も監禁した。)しかも右の如き処分理由を、処分後作製するが如き始末で、然も小生達を唯一回も取調べる事なく痛憤やる方なかつた」

私達、山口高商斯道会が学校当局から弾圧を受けた時(昭和十五年十一月ころ)、松江や佐賀の友等よりの便りがどれだけ心の支へとなり力を与へられたことか。例へば、その頃百武君から送つて来た手紙には、次の様な歌もあつた。

筑紫なる広野にたちてはろくと思ひは駆せる君らの上に

こよひはも地図をし開きはるかなる君らが集ひをしのびてやまず

佐高事件が発生してより、私達は幾通も手紙を書いて百武君達を激励した。歌も送つた。

苦しみをたへしのびつ、もゆる火なす思ひいだきて戦ふ君はも

もゆる火のほ中に立ちて剣ふるひしますらをしぬばゆ君がみ文に

等の歌は、その頃私が佐賀の友等に送った歌であった。然し、処分解除の通知はなかなか届かない。私は手紙だけではどうしても安心することができなくなった。直接百武君達に会ふために佐賀に向った。幾多の紆余曲折はあったが、処分後五十日過ぎた六月二十四日に復学が許可されたのである。又同信会の顧問教官であった高橋鴻助先生は姫路高校へ、小林先生は山口高校に、強制的に転任を命ぜられた。

この事件においても、百武君は同信会の中心であった。彼の堅忍不拔の信念が最後まで会の分裂を防いだといつても過言ではあるまい。それにつけても忘れ得ぬのは百武君の御母堂のことである。御主人を戦争で失はれてゐたが、接する度に「武士の妻」の如き毅然たるご態度と自然に備った気品が感じられた。最初は百武君の行動について、特に学業成績の低下を憂へられて厳しく訓戒されたやうである。然し、百武君を深く信頼され、処分言ひ渡しの際も、「息子の行動が悪ければ処罰されるのも止むを得ないが、前以て一回の注意も指導も無く一方的に処罰されることは、教育者たる方が取られる措置であらうか」と強く糺されたと聞いてゐる。この様な御母堂の感化が、百武君に多大の影響を与へたことを今改めて回想するのである。

昭和十六年十月十八日、熊本同信寮で開催された九州・中国合同連絡会議の思ひ出も忘れられない（註・『生の記念』（7）参照）。この時初めて熊本高工の米重政行君達や宮崎高農の首藤雅也君に会ったのである。会する者十五、六名であったらうか。この時、百武君の提唱で慰霊祭を厳修した。その頃私達は若き後輩を二人失つてゐた。五月二日には松江高校二年生藤原邦夫君を、九月二十日には佐賀高校二年生百武尚美君を急病の爲失つたのである。私達はこの二人の友を思想戦の戦死者として、なほ共に戦ひつつあることを実感してゐたのである。生死を別たぬ戦ひ、その頃の思ひを私達は靈戦と云つた。この日の記念写真は現在私の手許に残つてゐる。藤原君の写真は首藤君が膝の上に、百武尚美君の写真は百武君が手に持つてゐた。百武君も首藤君も、江頭君、米重君、河崎由雄君、これらの友達は今この世で会ふことはできなくなつてしまつた。その夜は皆で酒を酌み交した。その時習つたのが「五木の子守唄」であつた。熊本高工の諸兄の内でも、特に米重君、河崎君は九州男子の典型の如く豪放磊落の一語で形容される風格があつた。然も同時に、微風にもゆらく小草の如き繊細な感情を内に秘めてゐた。百武君や私も米重君達と、その後合宿したことも無く、会つた機会は米重君達が入營するまでに、この連絡会議たゞ一回であつたと思ふ。それだけで私達は強い友情の絆で結ばれ、永久に忘れ得ぬ印象を今も私の胸に残してゐる。

話はずっと飛ぶが、昭和十七年十二月二十三日米重君は久留米の予備士官学校から、見習士官の輸送指導官として外地に出発した。その時、面会に行った和多山儀平君（熊本高工）が、急いで佐賀・熊本の友にそのことを電報で知らせてゐた。儀平君は門司港まで同乗して見送つてをるが、その時の状況を米重君の留守宅に知らせた手紙が残つてゐる。

「久留米駅出發は午后九時十分でしたがその一時間程前、佐賀に帰郷してゐた百武禮之兄が久留米駅に駆けつけ、互に奇遇を喜び駅頭で一緒に「神州不滅」を歌つて別れたのである。別れる時百武兄は自分の写真を米重兄に送り、「一緒に自分も戦地に君と行くのだ」と叫ばれました。写真の裏には『米重政行大兄の壮途を祝して』と題して

ふた、びは生きてかへらぬ武士ものふの門出の心今偲ぶなり

大君のまけのまにまに戦ひて生命すぎなむますらたけをは

七度も生きかへりつつ夷あいつをばはらはむ心今こそともに

再びは会はむ日知らに我が影を君に送らむこの世のしるしに」

この歌は私には百武君自身の辞世の歌のごとく思はれるのである。影ではなく、魂もともに戦場に出征したやうにしか思へぬのである。それにつけても、熊本同信寮の連絡会議は永久に忘れ得ぬ思ひ出となつてゐる。

昭和十八年六月八日、九大内科病棟で亡くなる江頭君の臨終にかけつけた百武君のことは、同君の遺した報告書簡に見えるし、終始枕頭にあった私の思ひ出も深いものがあるが、別に稿を改めたい。

十一月三十日久留米に入隊する百武君を佐賀で送った。その時たま／＼佐賀の通信隊へ入隊する為来佐した川井修治君も一緒になった。百武君の自宅の玄関前で、百武君の御母堂とともに四人で撮った写真が残ってゐる。彼の持つて征った日章旗には多くの同信の友の寄せ書きがあった。百武君は私に最初に大きく「饑はなむけの言葉を書くやうにと依頼した。私は「あらはさむ時はきにけりますらをがとぎし劍つるぎの清き光を」との明治天皇御製を謹書して渡したのである。それが百武君との今世の別れであった。

終戦直前の昭和二十年八月七日に百武君はジャワ島からビルマに移動する幹部候補生の輸送指導官となつて、海路シンガポールに上陸した。彼は抜群の成績で幹部候補生となつたのであらう。行進の先頭に立ってシンガポール・バンバイヤ停車場近辺に来た時、突然敵機が来襲した。身を隠す隙も無かつた。道路に俯した一瞬、低空で敵機が銃撃を加へて飛び去つて行つた。皆が立ちあがつたが、百武君は遂に再び立つことができなかつた。直射を受けてゐたと云ふ。

以上が伝聞した百武君の戦死の状況である。百武君を亡くされた御母堂のご悲歎はいかばかりか。お慰めする言葉も無く遂にお会ひすることもできなかった。終戦後の混乱した祖国を黙視することはできなかったのであらう。「禮之は浮かばれぬ」と口癖の様に言はれてゐた。「禮之の夢を見た」と云はれ、祖国の将来を憂ひ、歴代の総理大臣に長文の手紙を出されたことも度々であったと聞いてゐる。毎年秋東京飯田橋大神宮で挙行される興風会主催の慰霊祭にも亡くなられる迄毎回出席されてゐた。今は愛児禮之君のみ許に行かれたご母堂の御冥福を心より祈念するのみである。

（『国民同胞』昭和五十二年六月号）

江頭俊一君

「シュンイチ キウダイナイカ キタビョウトウ十二ゴウシツニキタ、マツ、エガシラ」と云ふ電報が突然下宿に届いたのは昭和十八年三月であった。余り突然のことに驚いて走るやうにして病院に駆けつけた。

その時の光景は不思議に今も鮮かに記憶してゐる。医学部の正門を通り、北に折れて三、四百米行つたところにある一階建の古い病棟であった。逸る心を抑へつつ、病室の名札を確認して部屋に入った。西教寺合宿（昭和十七年全国合宿）以来約半年ぶりの再会であった。江頭君は衰弱してゐた。然し、私の顔を見ると独特の笑顔で、すぐ手を差し伸べた。私の到着を待ちかねてゐた事が痛い程感ぜられた。二人は黙つて手を握り合つてゐた。その時の彼の手にこもつた力と、その温りが今も感触に残つてゐる。話したいことが胸をついてきた。然し、彼の声はかすれてゐた。満州からの長い旅で疲労もしてゐるのだらうと思つた。「また明日も来るから」と云つて病



室を出た。

部屋を大分離れた所まで御母堂は私を見送ってこられた。そして、涙を抑へながら、彼の病気が急速に悪化してゐて、満州の医師から、こちらでは治療が充分出来ぬと宣言されたこと、もう手遅れかも知れないことなど伝えられた。信じられないことであつた。あんなにも元氣潑刺としてゐた彼である。どうして信じることができようか。然も、その後続けて「もし死ぬるなら同信の友の居る所、加藤が居る福岡で死にたい」と御母堂に話したと、聞いたのである。涙が一度に溢れた。泣いてはならぬ。彼が死ぬ筈がない。いや必ず私達同信の友皆んなで力づけ、必ず再起させねばならぬ。それから毎日彼を見舞ふことが私の日課となつたのである。

江頭君が昭和十七年十二月末に東京を出発し、長旅の後満州本溪湖の自宅に帰りついたのは、昭和十八年の元旦であつた。その時は既に病氣は思ひがけ無くも進んでゐたのである。昭和十七年の末頃は、彼の生活に大きな負担が掛つてきた時期であつた。同年十二月十九日には長い間私達学生運動の中心であつた正大寮が解散せざるを得なくなつた。解散式

は十二月二十四日に行はれたと記録されてゐるので、恐らく彼は二十六日頃に離京したものと想像される。

正大寮の解散は、その次に来る大弾圧の前兆であつた。田所広泰先輩達が憲兵隊に一斉検査拘留されたのは昭和十八年二月であつた。学生運動の重責を担つてゐた当時の彼はこの渦中であつて緊迫した時期を過ごしてゐた。彼は帰京前には少し声がかすれてはゐたが、病氣とは思はなかつたと同宿の友も云つてゐた程であつた。然し、本人は身体の変調は自覚してゐたのではなからうか。それを押して東西奔走してゐたのであらう。友等に心配を掛けまいとして、苦痛を隠してゐたに違ひないと今更の如く思ふのである。

江頭君が九大に入院した頃、私は佐高出身で九大の一期後輩に当る山田輝彦（国文学科）田中秀男（工学部）両君と西公園の南に当る浜田町に同宿してゐた。将来は九州正大寮を開設することが目標であつた。私はその頃大学に籍を置きながら、東京の連絡会議や大阪の世界観大学にも度々参加してゐたが、彼の入院後は毎日病室を見舞ひ、一切を忘れて看護に専念したのである。勿論、山田君や田中君も良く病室に寄つてくれた。私達は意識的に楽しかった思ひ出や時には失敗談等話を話した。彼はよく語つた。つられて、私達も笑つたのである。それが、せめてもの彼の苦痛を和らげる力になることを祈りながら。彼が入院してから一ヶ月余り後であつたと思ふ、妹

の富美子さんが満洲から来られた。その頃から病状が目に見えて悪化して行つた。然し次ぎくに佐賀や熊本高工の後輩達が見舞にきてくれる。その度に笑顔を絶やさず、寧ろ生気が蘇るやうにさへ感ぜられた。

そして確か五月の下旬だつたと思ふ。何かの所用で、その日は薄暗くなつて病院に行つた。その時、彼の病氣は最悪の状態となり、もう治療の方法が無いと医師から宣告された、後はたゞ時間の問題であると御母堂が泣きながら話されたのである。慰める言葉も無かつた。打ちひしがれた思ひで病棟を出た。何時の間にか小雨が降つてゐた。暗い病院構内の道を雨に濡れながら、涙を流しつゝ、歩いて行つた。その時傍の草叢に螢が一、二匹留つて光つてゐたことが、不思議に記憶の中に残つてゐる。それからは朝早くから夕方まで殆ど一日を病室で過ごすことにした。

容態が急変したのは、六月八日の早朝であつた。確か九時前に病室に着いたと思ふ。病室は異常な雰囲氣に包まれてゐた。御母堂と富美子さんが私の到着を首を長くして待つてをられたのである。医師が慌しく出入した。私は「日本の未来を背負ふ男だ。何とか助ける方法は無いか」と繰返し哀願した。然し、返事は無かつた。江頭君は苦しさうであつた。結核菌が喉頭までを冒し、喉が乾き呼吸が苦しいからだらう。私に「サイダーが飲みたい」と云つた。お茶やさ湯では苦し

みを和らげることができなくなつてしまつたのであらう。繰り返してサイダーを求めるのである。私は病院の近くの郵便局から、佐賀、熊本へ、また東京に危篤の旨を打電すると、サイダーを求めて駄菓子屋、八百屋、目につく店は全部立ち寄つた。然し、戦時下で物資は不足してをり売つてゐる店は見当らなかつた。病院附近は捜しつくした。電車に乗つて、次ぎ／＼にありさうな停留所で降りて捜し廻つた。博多港の近くだつたと思ふ。やつと一軒の店で一、二本のサイダーを入手した。二時間近くも捜してゐたのである。江頭君はサイダーを本当に貪るやうに飲んだ。そして「加藤、本当に美味しかった。有難う／＼。」と幾度も言ふのである。この友を失ふのか。奇蹟は起らないのか。私は泣き顔を見せてはならぬと懸命に感情を抑へ続けた。その内に、佐賀や熊本から後輩達が十数名も駆けつけてくれた。百武禮之君が七日に東京を出発したと云ふ電報は受取つてゐた。それには博多駅の到着時間が示されてゐた。当時東京から博多までは直行の急行で二十時間もかかつた。江頭君と百武君は佐高一年の時から、常に形影ともなふ如く、学生運動の双壁であつた。せめて、生前に二人を会はしてやりたいと、思ひ続けた。それから先のことは、百武君が江頭君死去の翌日、東京の田所先輩宛に書いた書翰（「思想界」昭和十八年八月号掲載）を引用することにする。

前略、電報にて御知らせ致しました如く江頭俊一君、昨八日午後三時十三分遂に永眠致されました。御家族の御嘆きの様洵に傷ましく御慰め申上ぐべき言葉も知らぬ次第です。腹膜炎から喉頭結核になり全身を侵されてゐて随分苦しんだらしいのですが唯絶大な意志力のみで小生の着くのを待つてゐたらしく、幾度かこときれんとしては「江頭、最後の妄念ぢや」と加藤に勵まされ、奇蹟的に生命を保つてゐるといふ状態でした。小生の着く前に一度危なくなり愈々最後だと思つて一同に「君ヶ代」の斉唱を求め、歌ひ終るや、「最後に」といつて苦しい息の中から身を起こして三度までも「天皇陛下萬歳」を唱へ奉り、「江頭俊一は昭和十八年六月八日九大病院北病棟に死んでゆくが魂魄は萬代かけてみ國をまもるぞ」といつて皆に別れを告げ意識を失つたのでありますが、再び息をふき返し、小生が參りますと非常に喜び見る／＼顔に血の氣がさして脈も平脈にかへつた程でその生命威力には医者も驚嘆してをりました。そして加藤、九大の友、佐高の後輩、熊本高工の諸友、小生、皆共に手をつなぎ歌ふ「神州不滅」「進めこの道」の歌聲を聞き嬉しげに皆の顔を交る交る眺めつ、莞爾として逝きました。それから田所大兄に見せてくれといつて、遺言として、お母様に書留めて戴いたのですが、「皆様ノ厚イ情ケニカコマレテ死ンデユク。今マデオ導キ下サツタ事ヲ心カラ感謝スル。オ國ノタメ思フ様盡セナカッタノガ残念ダッタ。同信ノ諸兄ハワレノ志ヲムダニシナイデシツカリヤツテクレ。

ホントウニオセワニナッタ」といひ、辭世の歌として

ウツソミノイノチタユトモマサラノカナシキネガヒヨロヅヨマデニ

コトキレルイマハノキハモスメクニノヤスケキヤウイノルカナ

の二首を残しましたが二首目は息が續かず歌ひ終ほせなかつたものです。

その死顔の安らかで淨らかな面持は洵に此の世のものとも思へぬ程で一點の曇りも苦みの跡もなく、恰も天上に舞昇つて行く様な歡喜のほゝゑみさへ浮べて居り、小生等も悲しいといふより寧ろ生死を超えた餘りにも莊嚴な其最期に接し、生ける神の姿を目の當り仰ぐ様な心地すら致しました。

江頭はどうく死んでしまひましたが死ぬ直前、苦しい息の中からアツツ島の將兵が傷病者は皆自決して全員玉碎したことを語り「自分はたとひこゝで死んでも永久に君等とともにゐてみ國をまもる」といひ、み國の彌榮を信じて「もう何の思ひ残すこともない」といつて逝きました。

江頭の事は思つても思ひ切れませんが、今は只後に残つた者が、身を以てその平常の信を示し先驅となつて散つて行つた江頭の志を必ず繼承せんことをひたすら心に誓ふ次第です。(後略)

六月九日

百武 禮之

その場に居なかつた者には、百武君の書翰には誇張があると思はれるかも知れない。然し、彼の描写は全て真実である。「悲しいといふより寧ろ生死を越えた余りにも莊嚴な其最後の姿に接し、生ける神の姿を目の当り仰ぐ様な心地すら致しました」と百武君は記してゐる。それは病室に居た十数名の共通した目撃であり、所感であつた。

その日から既に三十五年の歳月が夢の如く過ぎ去つてしまつた。満年令で言へば僅か二十二年と十一ヶ月、彼の一生は余りにも短かつた。然し、彼は全生命を燃え尽して、この世を去つたのである。その高貴にして稀有の精神生活は、歌ふが如き詩的韻律に満ちたものであつた。それは多くの遺歌や遺文（彼には長編詩劇「名草の妻」もある）に表現され、ありし日を如実に物語つてゐる。例へば、昭和十七年十一月中旬に正大寮より発刊されたプリント「たたかひ」には、彼がこの世に残した最後の文章が残つてゐる。「新しき友に」と題する書翰形式の長文のものである。この文章には、彼の精神生活が鮮かな光彩を放つて表現されてゐる。「今こそ僕らの中に古事記・万葉集にも勝る抒情詩が創造される時なりと信知するのであります。最も敏感にして純一なる青年学生はかゝる芸術的精神にこそ具体的真理を見出すであります。「詩に永久に生きなむものは、この世に亡びざるべからず」学生運動の刻一刻に生死を記すものは詩であります。永久に苦

難を負ひて行くべき僕らにとって、詩こそ永遠の歡喜が留めらるゝことを祈念するのであります。綜合劇詩―そは学生運動であります」

誠に「詩に永久に生きなむものは、この世に亡びざるべからず」との言葉の如く、江頭君は詩に永久の生命を刻んで、天上に舞ひ昇っていったのである。彼の一生は云ふべくは一篇の抒情詩であり、その臨終は終幕の「綜合劇詩」であつた。みまかる友と、見送る友等、全てそこにあつた者が無意識の内に演じた綜合劇詩であつたと思はれるのである。彼の文章は次の言葉で結ばれてゐる。

「学生運動こそ―藤原邦夫、野中孝夫、百武尚美兄の生ける靈を今此処にして―学生運動こそ男子の本懐であります」

ここで江頭君は「学生運動こそ男子の本懐であります」と宣言してゐる。その言葉の通り学生運動の戦死者となつたのである。そして、先立つた藤原君達と共に生ける靈となつて今此処に我等と共に、つながつてゐるのである。

江頭君は滿洲の撫順で生れ、撫順中学を昭和十三年三月に卒業してゐる。大正九年七月七日生れで、私と同様現在では五十七才になる筈である。御両親が前述の通り佐賀市近郊の御出身であつ

た関係で、佐賀高等学校に入学したのであらう。彼の故郷は満洲ではなく、御両親の故郷である佐賀であった。ここはまた、始めて同信生活に入った処として、魂の故郷でもある。「不知火の筑紫の国」九州全土が、遠く離れた彼には故郷と感ぜられたのではなからうか。彼にはその意味でも「筑紫」を思ふ歌が数多く残つてゐる。例へば亡き後輩百武尚美君を偲び

ゆきましし友を思へばかけそくも夢路をたどる心持するかな

去りゆきし友を思ひつつ都路に筑紫を思ふ此の秋にして

あかときの御空ゆく雲汝のごと飛びてゆきなむ筑紫路さして

ゆきましし友のみ霊のとゞまりし筑紫をいたも恋ふる朝かも

等の歌に、また宮崎の首藤君宛にも

相別れ君去りゆくと思ほへばたゞに淋しく筑紫思はゆ

との歌を送つてゐる。或は東京正大寮がある井の頭公園に咲く「こぶしの花」を見ては、

筑紫野の友に見せまし武蔵野のこぶしの花の白ゆふ花を

と「筑紫」を偲ぶ歌が多く残つてゐる。そして、佐高を卒業して東京に行く時後輩達に残した歌が、

不知火の筑紫の野辺にますらをが立てし誓ひの消ゆる日あらめや

である。「ゆきましし友のみ魂のとどまりし筑紫に」自らの魂を留めて、江頭君はこの世を去つたのである。福岡郊外で終戦後軍人として自刃した寺尾君の魂も筑紫の国に留つてゐる。終戦後私達の営みは慰霊祭から始つた。江頭、百武、和多山君等の慰霊祭を、寺尾君の終焉の地油山に一泊して少人数でも続けてきたのである。それが、現在の国民文化研究会の合同合宿に発展したのは、昭和三十一年であり、戦後十年が経過してからであつた。当初百名に足らなかつた合宿参加人員が、現在では四百名を越える大合宿となつた。然も、現在の会員構成も戦後教育を受けた若い会員が私達の三倍にも達した。今後の課題は私達一人／＼の自覚と眞の同信生活の実現であらう。先に紹介した江頭君の遺文「新しき友に」は始めに「さきに生ぜんものはのちをみちびき、のちに生ぜんものはさきをとぶらひ、連続無窮むぎにしてねがはくは休止しせざらしめんと欲す」との親鸞の言葉を引用してゐる。江頭君は、この言葉の様に願ひつつ、私達を見守つてゐるのである。

寺尾博之君

(一)

終戦後八月二十日払暁、福岡の九州軍需監理部にゐた寺尾君は長島秀男海軍技術中佐とともに自刃、その前後の経過については、白川書院発行『終戦秘録、九州八月十五日』（以下「秘録」と略称）に油山事件と題して詳細な記述がある。著者は上野文雄氏で、確か終戦当時「夕刊福岡」の新聞記者をした方であった。然し、同書には明らかに事実の誤認があり、小説化された面もあり、そのまま信ずることはできなかった。

従って、私は寺尾君の慰霊祭の際面接した油山の川上逢舟和尚、また、遺体を収容していただいたと聞いて訪問した玄洋社出身の副田直規氏等より直接見聞した記憶を中心に記述することにした。更に寺尾君と一時行動を共にした北村忠雄君（当時九大医学部在学中）からも、不明な点について再三事情も聞いた。然し解明される点は少なかった。油山事件の記述には不安が多く、

幾度も躊躇したのである。改めて「秘録」を精読した。そして、関係者の中に山口高商出身の田村藤吉郎陸軍主計中尉の名前を発見した。同窓会名簿で調査したところ、私より三年先輩で、住所も判明した。それが糸口になって、当時の関係者大森一矢海軍大尉、西本俊雄陸軍中尉、近藤好夫陸軍中尉の消息を知った。これらの方より、貴重な資料や消息を戴いた。これも寺尾君のみの導きであったと思ふのである。

そして、寺尾君の当時の心境は、何よりも遺書に客証されてゐることに気付いたのである。最後の抛り所は遺書であった。そこで、思ひ切つて事件を記述することとした。

大森氏等は八月十日頃から、日本がポツダム宣言を受諾したらしいと云ふ噂を聞いてゐた。それが単なるデマで無いことを知り、十四日夜、近藤・西本氏等数人で上官の自宅を訪問してゐる。そして「日本が降伏した場合、軍人は如何に対処すべきか」を質問したが、納得のゆく返事は得られなかつたと云ふ。その時は寺尾君は参加してゐなかつたやうである。

油山正覚寺に集つた経過を、大森氏は「八月十五日正午九州軍需監理部に総員集合を命ぜられて、ラジオの玉音放送を聞いた。その後、九州軍需監理部を抜け出し、福岡海軍監督官事務所に向ふべく歩いてゐた私は、近藤中尉と長島中佐とに逢ひ副田氏のところに行くことになった。



副田氏も同道して油山へ登り、副田氏が油山観音の和尚さんに私達が二・三日山で静かに物を考へる為滞在することを依頼して下山された。したがって、八月十五日夜油山に宿泊したのは、長島・近藤・大森の三人で、日本の将来について夜遅くまで語り合ひました」と、言つてゐる。

寺尾君は十五日は業務の為大牟田に出張してゐたやうである。それは、宮崎高農出身の首藤雅也君（戦後病死）が次の様な歌を残してゐるので判明する。

戦ひの終りしかの日闇夜路を君許り恋ひて一人ゆきにし

逢ひたしとひたに祈りて一里あまり闇路ゆきしに君はいまさず

寺尾君と君の部屋を仰ぎつゝ、呼べどいらへのなき悲しさよ

家人に君のこと聞けば大牟田に出張されしといら

へのありき

友の名を呼びて祈りて帰りゆく心さびしも涙あふ

れつ

然し、その夜のことについてはあとで北村忠雄君

は次の様に思ひ出してゐる。

「寺尾さんは八月十五日夜箱崎の私の下宿に来た。

軍服を着てゐた。床の間に腰を下して『どうだ』と声をかけ、俺は今一部の将校と油山にゐると話し出した。(十五日夜首藤さんが寺尾さんの下宿にいったが不在だったとの事だが、その時私の下宿に来てゐたのではないか、あの状況下でおとなしく一日中出張してゐたとは考へられない。)その夜、村上が偶然下宿に来た。村上も入れて三人下宿で寝た。翌日、私と村上は油山を目指した。寺尾さんは既に朝早く出ていったのかも知れない。」

翌十六日になつて、西本氏が、また午後、寺尾君が九大の学生二名(前記の北村忠雄君と理学部の村上清司君)共に佐賀高校同信会出身)を連れて「謄写版」と「紙」を持って正覚寺に合流した。寺尾君達は初めから油山に集合するやうに計画してゐた訳ではなかつたと云ふが、ともかく、彼等の中で一番強く徹底抗戦を主張したのは寺尾君であつたと聞いてゐる。彼は「終戦は決して陛下の御意志ではない。明らかに和平論者の陰謀だ」と判断したやうである。そして「博多航空隊に居る予備学生が主体となつて、九州だけでも戦争を継続する為決起する動きがあるので協力して欲しい」と要請したと云ふ。皆、飛行機から撒くビラの作成にかかつた。文面については各人思ひのままに「絶対に降伏すべきではない」「生きて虜囚の辱めを受けるよりは、一億国民死して本土を守らん」等の文章を書き、謄写版を刷る作業等に全力を挙げたと、大森氏は伝へてゐる。それが十六日夜であつたか、十七日であつたかは明らかでない。ともかく、出来あがつ

たピラを持って寺尾君は、北村君達と一緒に一旦下山してゐる。

皆で作成したピラは、実際に博多航空隊の飛行機で、福岡市や、その周辺地区にはらまかれた。然し、それで終ってしまった。十八日になって「博多航空隊決起せず」と云ふ情報が伝へられた。また、頼りにしてゐた菊池兵团長櫻井徳太郎少将も詔勅に従ふことが明らかになった。徹底抗戦の夢は破れたのである。激しい動揺があつたと思ふ。そして最終的に軍需監理部の者だけが、十九日夜、事務所内の自分の机の前で自決することに決定した。そして、各人思ひ思ひに山を下つたと云ふ。その前に副田氏より「重要な話があるので、近藤氏は必ず十九日に副田氏宅に来ること。また他の者は十九日夜に柳橋の白垣丈夫氏宅（副田氏の友人）に必ず来るやう」に伝言があつたと、大森氏の手紙には記されてゐる。

「秘録」では、寺尾君と一緒に自決しようと強硬に主張する北村君達を、真情をこめて説得して下山させたと記録してゐる。然し、北村君に問ひ合はせたが、そんな記憶は無いと云ふことであつた。北村君達の前では、自決すること等話さなかつたのであらう。然し、北村君は後になつて気付いたことがあつたと思ひ出を語ってくれた。「寺尾さんがポケットから色んなものを出して、何でも良いから君の欲しいものを持って行け」と云つたといふことである。それが最後の別離となつたのであるが、寺尾君は形見分けの積りであつたらしい。その日が何日であつたか思ひ

出せないと伝えてゐる。

十九日、近藤氏は副田氏の家に行つた。そこから副田氏は、近藤氏を大西憲兵少佐の下宿してゐる家に連れていった。憲兵司令部に一通しか来てゐない終戦会議の速記録の写しを、頼んで見せてもらふ手配ができてゐたのである。その時の状況を「祕録」は、次の様に記述してゐる。

「ガリ版刷りの表紙をめくつて、近藤はそれを読みはじめた。八月十四日午前十時十五分から、宮中防空壕で開かれた御前会議の各出席者の模様が、順を追つて記載されていた。梅津參謀総長・豊田軍令部総長・阿南陸相が次々に起つて、継戦以て死中に活を求むにしかずという、声涙ともに下る言上の意見は、近藤の共感を大いに呼んだ。ついで最後に、陛下のお言葉を読むうちに、近藤の胸はわけもなく締めつけられて来た。

『自分は如何にならうとも国民の生命を助けたい。この上戦争を続けては、結局わが国は全くの焦土となり、万民にこれ以上の苦悩をなめさせることは私としては忍び難い。(中略) 陸海将兵には動揺も大きいであろう。どうか私の気持ちをよく理解して陸海軍大臣は共に努力し、よく治まるようにして貰いたい。必要あらば自分が親しく説き諭してもかまわない……』近藤はわけもなく泣けて来た。涙でかすんで字が見えなくなつた。」と。この点に就いては、直接近藤氏に問ひ合はせたが、御前会議の記録を読んだことを確認していただいた。

再び、ここで大森氏の書翰に戻ることにする。十九日夕方白垣家には、長島中佐・寺尾少尉・西本中尉・近藤中尉それに副田氏も出席した。「白垣氏も席に加はって、副田氏がまづ口を切り、今回の終戦が真に、陛下の御心から発したものであること。そのことは西部軍の司令部にたゞ一通来てゐる『御前会議』の記録によつても明らかなどころであり、そのことを大西中佐を通じて近藤中尉に知らせるため、同道して某所にてその記録を近藤中尉に見せたこと。貴方がたは油山の山上において日本の将来に失望して死を相談してゐるやうだが、陛下が生きよと申されてをられるのに、早まって死ぬことは不忠の臣となることにほかならない。どうか強く生きて再生日本のために努力してもらひたいと云ふ趣旨のことを述べた。近藤中尉が、確かに御前会議の記録を見て来たこと。副田さんの云はれるやうに、この際死を乗り越えて再生日本の為我々の生命を捧ぐべきことが正しい道ではないかと思ふ旨の意見が述べられた。その後一人一人に意見が求められ夫々が意見を述べたが、その折、長島中佐・寺尾少尉の二人は、日本をこのやうな破局に追ひこんだことは自分達の責任であり、陛下に対して誠に申訳けないと云ふことを強調し、生きるといふことに特に賛同をした意見を申し述べなかつたやうに思ふ」と記されてゐる。

その時既に、長島中佐と寺尾君は自決することを決意してゐたのであらう。副田氏も二人の発言や態度に不安を抱かれたのであらうか、全員が生きて強い団結のもとに、祖国再建に努力して

欲しい旨を再確認されるやうに発言されたと云ふ。そして、白垣氏は「新しい門出への誓ひを更に固いものにしていただきたい」と酒肴を出されたのである。その席の様子を大森氏は引続き次の通り記述してをられる。「寺尾少尉が海軍軍刀を振って剣舞を舞ったことは事実であります。誰が詩を吟じ、またその詩が何であったかは記憶が薄れて明確に覚えてをりません。そのうちに座が乱れ一人、二人と去っていくものがでてきた」と。寺尾君は、自刃を決意しながら、どんな思ひで剣舞を舞ったのであらうか。

寺尾君は御前会議の実情を聞き終戦が陛下の御聖断によつたことも承知した筈である。

寺尾君は遺書の初めに「昭和二十年八月十四日休戦ノ 詔書渙発アラセ給フ 遙カニ 大御心ノ程ヲ俛ビ奉リ 恐懼措ク處ヲ知ラズ」と心境を述べてゐる。詔書の日附は八月十四日であつた。寺尾君は詔書を拝読したが故に、その日に詔書が渙発せられたと記したのであらう。

詔書には「惟フニ今後帝国ノ受クベキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラズ 爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル 然レドモ朕ハ時運ノ趨ク所 堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ 以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カント欲ス」と仰せられてゐる。

それ故に遺書にも「大御言葉ノマケノマニマニ国家再建ニ微力ヲ致スベケレド、ソノ確信無ク」

と書き残したのである。

私達は「大君の任まかのまにまに」と祖先達が言ひ継ぎ語り継いできたごとく、大御心に随順しまつることこそ、臣民の踏むべき道と確信して来たのである。何故に自決したのであらうか。その心情は彼が残した遺書によつて推測する以外に今は知る術はないのである。

「恐れ多クモ 陛下ノ御上ニ夷狄ガ司令官ノ存在ヲ許シ 御一人ノ統治シ給フベキ 大和島根ヲ彼ガ軍政ニ委ヌルニ至ル 関知シマツラズト雖モ遂ニ此處ニ至ル 罪當ニ云フベカラズ」

「一死以テ臣ガ罪ヲ謝シ奉リ併セテ帝国軍人タルノ榮譽ヲ保タントス」と遺言してゐる。寺尾君は、自分では関知しなかつたとは云へ、軍人として国を守ること能はず、陛下の肱股たる責務を果し得なかつた罪を痛感してゐた。また、陛下の統治し給ふ祖国を他国の軍政に委ねることは、国家の干城たる軍人として、最大の屈辱である。彼は軍人としての榮譽を保たむと念願したのである。遺書は、寺尾君が自刃の道を選んだ心境を、このやうに記してゐる。私は、寺尾君は帝国軍人として名譽の戦死を遂げたと信じてゐるのである。

私が寺尾君の自刃を、このやうに断定するのは、全くの独断である。然し、遺書を繰り返し読む時、私はさう確信するのである。例へば遺書は「国政ヲ議シ奉ル恐懼ノ至 言ヲ知ラズ」の文章で終つてゐる。私達は、大東亜戦争勃発当初より為政者の戦争指導方針を批判してきた。私達

の憂へ続けた通り、最悪の破局となった。寺尾君は政治に対し、強烈な批判と憤激を抱いてゐたと推察される。然し「軍人ハ政治ニ関与スベカラズ」との軍人勅諭の御聖訓を守つたのである。それが遺書の結びの言葉であつた。私が「寺尾君は軍人として名譽の戦死を遂げた」と断定した所以もまた、ここにある。

寺尾君の自刃は油山山麓近くに住む玄洋社出身の亀井友喜氏により、最初に通報されてゐる。八月二十日午後三時半と記された田村藤吉郎中尉宛の走り書きを同氏が大切に保管されてゐたのである。その内容は次の通りであつた。

「長島中佐・寺尾少尉、見事な最後、油山中腹、野草繁る見晴良き広地、東方に何一つさへぎるものなき高台に於て東方を拝し、太陽の遠山より出づるを見つゝ、割腹、長島中佐の介錯を為し、寺尾少尉も相果てたり。実に見事なるもの、二千六百年悠久の歴史と共に終る武人の最後壮也。昨夜更けて来山、本朝五時庵を出て其のまゝ、帰らず・住職トランクを開き遺書及住職への礼状発見。現場発見者山の店の者何となく誘はれるが如く高台に至り、白木綿のひるがへるを見て不審に思ひ注進（十二時頃）その時遺書により、かけつけたる我等二人（住職と亀井氏のことと思ふ）それより現場に至る（后一時）場所 観音堂より左手へ回り行く事二町余、死体に強き太陽直射席を着せ太陽の光より避けしむ（後に残れる者堂迄運ぶとの語ありたれど果して然るや 不明）

憲兵に知らせず軍監理部長の運びを待つを小生として希望するもの 以上要用まで」

田村氏は更に次の通り補足されてゐる。「御兩人の自決の場に参りましたが、亀井氏の文にあるやうに実に立派でした。寺尾少尉の介錯は立派でした。検死の憲兵准尉（戦中この様な経験を多くしたと云ふ）が感銘してみました。寺尾少尉が油山の寺の庭にて軍刀をふつてゐるのを見たことがあり、剣道何段かとの話を聞いたこともありすが、戦中私共、自決或は介錯の話を聞かされました。その形通りでした。首の皮が僅かに残されてゐる丈でした。混乱時でしたので監理部の海軍将校に依頼し海軍航空隊にて棺を作らせ（中略）御兩人を火葬しました。若い寺尾少尉が長島中佐の介錯をして自ら自決し、そのすべてをなし遂げたといふやうな立派な顔は現在でも私の脳裡から離れません」と、現場の状況を更に詳細に通知していただいてゐる。誰れから聞いたかは、記憶に残つてゐないが、寺尾君の自刃は、鎌倉武士の古式の型に則つてゐたと云ふ。刀を力の限り腹部に突き差しし、その切尖は背中まで貫通してゐたのである。

寺尾君の何回目の命日であつたか、明らかではないが、正覚寺を訪れた時のことであつた。川上和尚より次の様な話を聞いた記憶がある。「二十日の朝方近くであつたらうか。二人の泊つて居る部屋の方向から、晒木綿を腹に巻いて締める様なキュー／＼と云ふ音が聞えてきた。起きて見に行かうとしたが、身体が震へて立ちあがれなかつた。そして、また眠つてしまつた」と云ふ内容であつた。

「秘録」には、寺尾君達は十九日夜には正覚寺には泊らず、自刃の場所泪が原に直行したと記されてゐる。だから、川上和尚の話を聞いたのは錯覚ではないかと思つてゐた。然し、亀井氏の手紙で十九日の夜更けに正覚寺に泊ったことが明らかになつたのである。現場発見者である山の茶店の人が見たと云ふ白木綿は、腹に巻いたものが切れて、風に皺つてゐたのであらうか。

田村氏は「寺尾君は剣道何段かとの話を聞いた」と云はれてゐる。寺尾君は眉目秀麗な美少年であつた。御母堂が京都の御出身と云ふ関係もあつたのであらう。言葉使ひも軟らかく起居動作も礼儀正しかつたことが印象に残つてゐる。体格も頑健には見えなかつた。彼が剣道の有段者であつたことも記憶には無い。余りにも長島中佐の介錯が美事であつた為に、錯覚されたのであらう。私には、それは彼の技能がなしたもので無く、精神力が為した技であつたと思はれるのである。それにしても、「山の店の者何とはなく誘はれる如く高台に至り」現場を発見したことが、不思議に思へるのである。現場は、お寺より左手に廻つて狭い山道を約五百米、やや東南方に行つた処であつた。小林国男君が案内してくれなかつたら、到底一人では捜せぬ場所であつた。道から灌木を分けて少し下ると、東方が遙かに開けて見える高台の草叢の中に標木が立つてゐた。それには「故海軍技術中佐長島秀雄・海軍少尉寺尾博之自刃之地」と墨書してあつた。長島中佐の遺体のあとには白梅、寺尾君の跡には紅梅が植ゑられてゐた。それが現在は、お寺まで楽に車で



ゆくことができ、そこから自刃の地までも、すぐ参拝できるやうに道が整備されてゐる。標木の代りに、高さ約五米の巨大な御影石の碑が建立されてゐるのである。

〔「国民同胞」昭和五十二年十月号〕

(二)

寺尾君は昭和十六年夏比叡山で開催された、日本学生協会主催の全国学生合同合宿に参加した。彼が高知高等学校三年の時である。当時彼は、対米外交についても、又私達学生協会についても強硬に批判し続け、班長が指導に大変難渋したと聞いてゐる。それが、次に会った時は急速に精神生活が進展し、著しい変化に驚歎したこ

とを覚えてゐる。色白な美顔で、長髪を肩まで垂してゐた彼の羽織姿が目には浮ぶやうに想起されるのである。東大に進学してからは、益々卓越した識見と、熱烈な氣迫が全身に充実してゐた。彼は私達の運動の指導的存在となつたのである。

精神科学研究所主催の日本世界観大学は、第一回は東京で昭和十六年十月三十日から十一月二十日までの内、十二日間にわたり開催されてゐる。引き続き大阪と、精力的に昭和十七年まで繰返し開催された。京都でも開催されたことがあつたと記憶してゐる。

大阪、京都の世界観大学には私は山口から、或は九大入学後は福岡から毎回の様に出席した。寺尾君も高知高校在学中はよく大阪、京都の世界観大学に出席してゐた。比叡山合宿では班が異つてゐた為全く交流する機会がなかつたが、この世界観大学での遭遇が私達の交流の始りとなつた。講座が終ると、よく寺尾君に案内されて京都の御母堂宅を訪問し、御馳走になつたものである。

寺尾君は弟尚之君とともに、御母堂に養育されてゐた。父上は早大卒業後貿易商社員として、早くよりシヤムに滞在してをられたからであつた。その為寺尾君は一人倍母を思ふ心が篤く、親孝行であつた。然も、唯一人の弟尚之君は、昭和二十年三月二十九日沖繩海上の敵船団に飛行機で突入戦死したのである。尚之君は早大在学中、学徒動員により出征したのであるが、彼も日本

学生協会のメンバーであった。

弟の戦死を知って、当時海軍少尉の寺尾君は「尚之戦死」と題する長詩を作つてゐる。この詩を一読すれば、肉身を失つた悲しみと、通報に接し悲歎に暮れるであらう母を偲ぶ心情が、沈痛の調べとなつて惻々として胸をうつのである。同時に作つたと思はれる「うつろ」と題する歌にも、同じ様な心情が痛い程感ぜられる。

何一つ為す気も起らずたゞ汝れの姿偲びつつ一日過ぎぬ

帰らむと外にいづれど膝なえて歩まむとすれど足の進まず

町ゆけど野道をゆけど友をなみ汝が名呼びつつ一人悲しむ

これらの歌には、寺尾君の亡き弟を偲ぶ思ひが素朴な故に率直に表現されてゐる。先に紹介した長詩「尚之戦死」の中にも

悲し 悲し 故郷にます母 いかばかり歎きますらむ いかばかり驚きますらむ

あ、肉身の死とは かくも悲しきものか。汝れすでに世になし——
と嘆き悲しんでゐるのである。

福岡軍需管理部に転勤してからは、佐賀市の故江頭俊一君の御遺族宅と、八代市の和多山儀平君の留守宅を度々訪問してゐる。ある日寺尾君が和多山家の仏壇の前に一・二時間も黙って頭を

下げ静座してゐる姿を見て、不審に思ったことがあつた、その時が、考へて見ると尚之さんの戦死を知つた時ではなかつたかと、私の妻（儀平君の姉）は回想してゐるのである。

また、『いのちささげて』にも集録されてゐる「母―山中の小駅にて―」と題する詩は、その頃創作されたものである。

遺骨箱も 重たげに 腰をまげたその姿 幾年月 心を痛め 身をつくして 育てしいとし子
畏くも 天子様の御為に いのち捧げて 今 ものはいはねど 再び帰りきぬ いとしのせが
れ よほくと しかし しっかりと 遺骨箱をだきしめた 小さき母の姿――
短いけれども、一語／＼に真情がこもり、珠玉の如き光彩を放つてゐる詩である。山中の小駅で、戦死した愛し子の遺骨を老母はしっかりと抱きしめてゐる。その姿に、近く弟尚之君の遺骨を迎へるであらう母を偲ぶのである。寺尾君は自分が自決した後には、母が唯一人残されどんなに嘆き悲しむかをも、知り尽してゐたのである。

当時山口にゐた私は寺尾君の自刃を、誰から聞いたかは定かではない。私の住所は、佐賀の江頭後一君の御遺族は知つてをられたので、そこから連絡が取れ、知らされたのであらう。野戦倉庫長であつた私は軍需品を進駐軍に引渡すまで残留するやう命ぜられ、部下十数名と共に、本部

を山口市内の旅館に移してゐたのである。

寺尾君の死を知ってから二ヶ月程経ったころ、復員した小柳陽太郎君が突然訪ねて来た。「江頭富美子さん（別稿江頭俊一君の妹）が危篤になった。会ひたがってをられるので、すぐ来てもらひたい。迎へに来た」と云ふのである。不在中必要な指示を与へる等準備の爲に出発が遅れた。佐賀に到着したのは十月二十六日であつた。その時は、既に富美子さんは寺尾君の後を追ふ様にして逝去されてゐたのである。

江頭俊一君は東大在学中の昭和十八年六月八日九大病院にて、息絶ゆる直前「天皇陛下万歳」を三唱し、遺言と辞世の歌を御母堂に書留めてもらひ、私達同信の友等の顔を交る交る眺めつ、莞爾として逝つたことは、別稿に紹介した通りである。富美子さんは、兄俊一君を御母堂と一緒に最後まで看病されてゐた。その爲に、俊一君の結核に感染してをられたのであらう。最近、妻（和多山智子）宛の富美子さんの手紙が十通足らず発見された。これによれば、昭和二十年の初頃から寝たり起きたりの生活であつたと推測される。佐賀郊外の御母堂の実家に到着した時の思ひを、小柳君は次の通り歌つてゐる。

あ、すでにみうせまししか別るるにゑましし面輪おもてまなかひ去らぬに
今一度会はむ日折り草枕旅の長路を帰りきたるに

「今ごろはいづくの空を亡き人のみひざの許へ翔りますらむ

うつそみの世の人ならずたくひなき清き心のしのばるるかな

やすらげき面輪にゑまひ浮べつつ逝きまししと聞けば涙あふれく

亡き人のうつしゑ抱きかぎりなき幸さいにゑまひて君逝きまししか

寺尾君と富美子さんが、将来を誓ひあつてゐたかどうかは知るべくもない。然し、少くとも清らかな愛情が大きく芽生えてゐたことは疑もないところである。「亡き人の写真うっしよ抱き」「安らかな笑顔」で、この世を去られた富美子さんの臨終の光景が、無言の内に、そのことを物語つてゐると思ふのである。

私は、その年の十二月初旬復員した。故郷の岡山市の実家は大空襲で町内全部とともに焼失した。母は郊外にある伯母の家に疎開してゐた。一週間程其処に居たが、終戦後の経済的困窮の内、何とか江頭君の家族まで世話をせねばならぬ。それが生き残つた者として、せめてもの亡き友に対する友情である。さう決心した。母も快く同意してくれた。家財も無く身軽であつたことも幸ひした。十二月十日頃江頭君宅に移転し、八代で結婚する迄、約二月を佐賀で暮すことになつた。今になって思ふと、江頭君の御遺族の御世話は何一つ出来ないまゝに終つたが然し、私が佐賀に來たことにより復員して來た佐高出身の同信の友等が、毎日訪ねて來て、本当に賑かな生活

であった。寺尾君の御母堂も淋しくなられたのであらう、江頭君の家に二週間余り滞在され、生活を共にしたのは不思議な機縁であった。その時、軍隊時代寺尾君が数多くの詩や歌を書き残した大学ノートを拝見した記憶がある。その中には富美子さん宛に送ったと思はれる詩歌もあった。そのノートを写さずに御母堂に返してしまった。帰京される際「博之と富美子さんは結婚式こそ挙げてゐないが、私は富美子さんを博之の嫁と思つてゐます」と云はれたことが忘れられない。そして、富美子さんの写真を大切に持つて帰られたのである。だが確か、一年後であつたらう、京都に御母堂を御訪ねした時は自閉症状と記憶喪失の状態で、変つた御姿になつてをられ、次にお訪ねした時は既に死去されてをり、寺尾君の遺品は散逸してゐた。返す返すも残念である。

昭和二十一年二月、私は佐賀より八代に移転して、和多山儀平君の姉と結婚した。その後、終戦前に寺尾君が度々和多山家を訪ねてゐたことを知つた。また、奇しくも寺尾君が大竹より洲崎航空隊に配転され、儀平君に再会したことも知つたのである。儀平君の日記に「昭和十九年一月二十九日寺尾博之第九期の予備学生として入隊」「二月十五日寺尾に『まほろば』を見せてやる」と記載してゐる。『まほろば』は私が入隊する直前に、留守家族の間に交流が実現するやうにと思つて発行したプリントの題名であつた。私は二号まで編輯して入隊した。更に、日記には次の様な記述もある。「二月二十三日寺尾博之と久しぶりに話す。十二月入隊を前にして、寺尾・百武・

加藤・宝辺の諸友の九州の漫遊、百武兄の失敗談等つきせぬ話が多い。久しぶりに同信寮の雰囲氣を再現した感があった」と、話が尽きなかった喜びを記録してゐるのである。

其の頃は儀平君は海軍少尉に任官し、寺尾君達の教育に當つてゐた。学生時代は寺尾君が先輩であつたが、海軍では儀平君が先輩となつた。寺尾君が和多山家に來た時「洲崎時代全員ピンタを食つたことがあつた。その時儀平君より力一杯殴られ涙が出る程嬉しかった。先輩であるからと云つて区別せぬ彼の心が痛い程感ぜられた」と話したことを聞いたのである。これも忘れることの出来ぬ思ひ出の一つである。

儀平君戦死の報を聞き、寺尾君が六月九日付で儀平君の弟に出した手紙が残つてゐる。それは「兄さんは決して決して死んだものではありません。君の心の中に、永久に生きて居られます。私も弟の戦死を知つた時本当に何をする元氣もなく悲しみました。然し、今は弟は何処かに生きてゐる。そして私と一緒に居ると思つてゐます。眼を閉ぢれば勇しい姿とすぐ会へます」と、自分の経験を語つて慰めてゐる。そして、み靈に捧げる歌八首を姉和多山智子宛に送つてゐる。

安房の国洲崎の里にもろともに過せし日々はとはに忘れず

年毎に花咲く桜しが花にとはに偲ばむ君がおもかけ

うつしよに再びあはむすべなくも今は嘆かずやがてあふ身は

この内、桜の花を歌った二首目の歌は

来ん春に花咲く桜見たまへば我がゆく道を偲びたまへや

との儀平君の遺歌に答へたものである。そして最後は「今は嘆かずやがてあふ身は」と自らの死を暗示する歌を作つてゐる。寺尾君の遺歌には

倒れたる友を嘆かずいつの日か吾もたどりゆく道と思へば

と、前記の歌と同様な心情を表現した絶唱が残つてゐる。寺尾君は自刃することによって、亡き友らと共に「魂魄トコシヘニ 祖国ニ留メテ 玉體ヲ守護シ」まつてゐるのである。

我が友、寺尾博之君 今年は君の三十三年忌である。君を弔ふ肉身の方は居られず、京都に納骨されたと聞いた君の御墓の所在も判らなくなつてしまつた。君の生年月日も知らない。自刃した時君は二十三歳であつたと思ふ。私は、君の御一家を回想する度に絶えず胸に浮ぶ一つの思ひがある。それは、国家生活の興亡盛衰と運命をともしることこそ、真の日本臣民の家庭生活である、といふ思ひである。寺尾君の個人生命は悠久の祖国生命の中に埋没してしまつた。然し、その名と悲願が永遠に言ひ継ぎ語りつがれんことを、心より祈念するのみである。

〔国民同胞〕昭和五十二年十一月号

(三)『いのちささげて—戦中学徒・遺詠遺文抄—』あとがき

—本書掲載の寺尾博之君を偲びつつ—

福岡市の南西郊外に油山と名づけられた小高い山がある。その中腹、なみた泪が原が、寺尾博之君自刃の地であつた。私が最初にここを訪れたのは、寺尾君が自刃したあと一か月ばかり経つた昭和二十年九月のことであつた。油山観音堂から五百メートルほど細い山道を辿り、道ぞひの小松をかきわけて下ると、ややなだらかな斜面に出る。そこには低い若木が点々と生え、東の方は遠く眺望が開けてゐた。ここが彼の最期の地であつたかと思へば、足もとの小笹まじりの草叢を踏むことさへためらはれた。そしてそこには真新しい等身大の標木が立ち、寺尾君と一緒に自刃された上司の長島中佐のご遺体のあとには白梅が、寺尾博之少尉のところには紅梅がうゑられてゐた。

現在、その梅はもうなくなつてゐる。そこは整地されて、高さ五メートルの巨大な御影石の記念碑が建立されてゐる。また生長した杉が林となつて視界を遮つてをり、早くも三十数年の月日が過ぎ去つたことを示してゐる。年移り、もの変れども、寺尾君についての思ひ出は薄れるべくもない。在りし日の彼の笑まひと振舞ひとは、ともにいよいよ鮮明に想起されてくる今日この頃である。

寺尾君との今生の別れは、昭和十八年十二月の霧島への旅行であった。出征直前の私達十名。戦死された百武禮之、松吉正資、渡辺二郎の三君も一緒であった。旅行中脳裡を離れなかつたのは、さきに病歿した江頭俊一君らのことであつた。酒を飲めば、江頭君が居ればと思ひ、歌をつくと彼のことが歌はれてゐた。また、同じく病歿した藤原邦夫、百武尚美の両君のことも語り合はれた。昭和十六年急病死した二人を、私達は「日本学生協会」発足後、最初の思想戦戦死者として祀つたのである。それは平時、戦時を問はず、国のために生命を捧げた人々を、等しく戦死者として崇めたからのことであつた。亡き友の肉体は滅びても、み霊は私達とともにあることを信じたからである。亡き友のみ霊とともに戦場に発つことを誓ひあつたのが、この霧島への旅であつた。

この霧島旅行の思ひ出は、その三方月のあとに、偶然海軍で再会した寺尾君から和山儀平君（私の義弟）に伝えられてゐた。それを記録した儀平君の日記を読んだ時には、二人は既に現世を去つてゐたのである。戦は終つた。未曾有の混乱と困窮の中で、時流に溺れんとする私を支へてくれたのは、先逝いた友らへの回想であつた。

かくて、戦前の「日本学生協会」の伝統は「国民文化研究会」に継承され、「学生青年合宿教室」は終戦後十年を経た昭和三十一年に、やうやくにして復活した。しかし、九州・中国地方にゐる

仲間たちは、合宿の復活する前も慰霊祭だけは絶やさなかつたのである。十人足らずの友人が毎年かの油山に集つた。その頃から、何とかして遺稿集を作らなくては、の念願は生き続けてゐたのである。それが、いまやうやくにして実現したのであるが、思へば全て亡き友のみ霊のみちびきのやうな気がする。改めて、生死を越えて友らとの“一信海”につながら生きる機縁に感恩報謝するのみである。そして、国民文化研究会二十余年の歩みによつて、亡き友らの志を継いでゆかうとする沢山の後輩諸君が確実な足どりで続きつつあることをみ霊に告げうる事が、心からの喜びである。昭和五十二年八月、油山で挙行された寺尾君の三十三年忌は、戦後教育を受けた後輩達が主力となつて、記念碑の前で厳肅に営まれたのである。

(昭和五十三年二月)

和天山儀平君

和天山儀平君は熊本高工を卒業し、海軍予備学生（飛行専任）を経て少尉に任ぜられ、第九三一航空隊勤務となって大分県佐伯に着任したが、それは昭和十九年九月頃と推定される。そして昭和十九年十一月十七日戦死。戦死の広報が正式に届いたのは昭和二十一年五月六日であったと記録されてゐる。その間一年以上も戦死の状況等も判明しなかつた為、家族はあらゆる手段を講じて調査されたと云ふ。どこかの島に流れついて生存してゐると云ふ噂さへあつた。広報到着後、なほ八方手を尽して調査した結果、やうやく当時の戦友よりその状況を知り得たのである。その手紙の中に「……神鷹しんように乗り込んで行かれたのも自分から進んで希望されたのであります。あの当時の戦局は我が方に不利になるばかりで其の時母艦が発するのでありますから危険も甚だしかつたのであります。」とあるが、「自分から進んで希望した」と伝えられてゐるのには次の様な事実があつたやうである。神鷹乗組みの順番は同期の某少尉であつた。儀平君は「君は一人

息子だ。自分には弟も多い」と、進んで交替したといふ。その時彼は戦死を覚悟してゐたのであらう。だから二十日を過ぎても帰らなかつたら、戦死したと思ふやうにと云ひ残したのである。

神鷹のことは色々戦争記録を調査したが詳細は不明である。防衛庁防衛研究所戦史室編集の「大東亜戦争戦史叢書」第四十五巻に次の様な簡単な記述がある。(五八五頁)「神鷹は『ヒ八一船団』を護衛して門司を出発し、シンガポールに向け航行中、十一月十七日、済州島西方海面で敵潜の雷撃を受け沈没した」と。

「神鷹」は「雲鷹」「大鷹」等と同様に大型商船を改造した特設空母であつた。昭和十九年六月サイパン島陥落後、軍隊や軍需品を積載した船団が、次々に撃沈された。そこで対潜航空機を搭載した特設空母の船団加入は、敵潜制圧上、その成果が大いに期待されてゐた。然し、八月十八日夜「大鷹」が、九月十七日には「雲鷹」が敵潜の攻撃により沈没した。其の上、十月廿四日より廿七日にわたる比島沖決戦に於て、日本海軍は壊滅的打撃を受けたのである。このやうな情勢下に「神鷹」は出航したのであつた。儀平君達は対潜航空機に乗つて佐伯基地を出発して大村空港に向つたと伝えられてゐるが、どこで「神鷹」に合流したかは不明である。戦友よりの手紙は次の様に続いてゐる。「生存者の話に依れば和多山少尉は泳いでをられたらしいのですが、救助洩れになつたものか、我が方の駆逐艦に救助されたのが十五、六名とのことです」と。



昭和二十三年頃であったと思ふ。私は儀平君が下宿してゐた佐伯の家を訪ねたことがあった。その時下宿の方から聞いたと思ふのであるが、それは「海中を何かにつかまって流されてゐた時戦友を励すやうな和多山少尉の元氣な歌声が聞えてゐた」と云ふ話である。神鷹が沈没したのは真夜中であつた。戦友の手紙の中の「泳いでゐたらしい」と云ふのはその様な声を聞いたからではなからうか。私は儀平君の性格からも、それは事實であると思つてゐる。

ともかく、儀平君は海中を泳いでゐて寒さと疲労から遂に力尽きて帰らぬ人となつたのであらう。さう云へば、彼の歌には、あたかも自らの最後を暗示するかの如き歌が残つてゐるのである。例へば昭和十九年元旦に詠んだ

ものふと召されしこの身わだつみの藻屑となる
ともいとふべしやは

の歌もその一例である。また、その頃洲崎航空隊より佐賀高校の同信の友等宛に送つた

荒れ狂ふ波間に此の身は果つるとも惜しむべしやは
はみ国のために

の歌も、自己の運命を予感してゐたかの如く思へる

のである。

思へば儀平君と私とは奇しき因縁の糸で強く結ばれていたのであらう。彼は私の義弟となった。私が終戦後儀平君の姉と結婚し、儀平君の郷里八代市に住むやうにならうとは当時全く予想もしてゐなかつたのである。

儀平君と私とが心から結ばれる契機となつたのは、昭和十七年二月二十七日より三月三日まで山口県大道村の潮湯旅館で開催した中国、九州合同合宿であつた（註・『生の記念』⁽¹⁰⁾参照）。

大道村は山陽本線小郡駅より二駅東に行つたところにある一漁村であつた。駅前に低い松林が続いてゐた。駅を過ぎて少し東に行くと近くに広い入海が見え初める。大道駅を通過する度にその風景に心惹かれ、やがてここを訪れることになるのであつた。駅から降りて約二十分も南に田舎道を行くと、眼前に静かな入海が見える。長い松原が浜辺に続いてゐる。白砂のなぎさ、砂上に散らばる無数の白貝。それらの全てが消えざる印象となつて脳裏に刻印されてゐる。近隣の人達が潮湯に入り湯治をする鄙びた旅館が一軒あつた。そこを合宿所とした。

参加者は佐賀高校、山口高校、山口高商、松山高商より、そして熊本高工より儀平君がただ一人参加して総勢二十人であつた。この合宿は私が始めて一人で指導した合宿であつた。その意味

からも忘れられない思ひ出である。夜海岸で篝火を焚いて慰霊祭を行った時の記念写真が残つてゐる。真黒な夜空を背景に全員が整列してゐるが、その中でも儀平君のぬきんでて背の高い姿が明瞭に写しだされてゐる。入海の沖につらなり点滅する漁火が印象的であつた。

この合宿で儀平君は三十首近くの歌を作つてゐる。

垂れこめし雲もやうやく晴れそめて海の彼方に筑紫見えけり

さまざまのつきぬ想ひに西東別れゆく日の近づきにけり

きはみなき生命の流れうつくもひろごりてゆくこの国内くにうちに

は、その時の歌の一部である。

合宿の状況は、最後の夜宮崎高農の首藤雅也君宛の寄せ書により知ることができるのである。この内で、名越君は「昨夜は二十名共に手を握りあつて祖国防護の戦ひの如何に悲しきかに号泣し、この団結のある限り内外の敵も終には打破し得る事を痛感しました。」と記してゐる。この短い文章によつて三十数年前の合宿の雰囲気が明かに実感されるのである。合宿は最終日に近くにつれて緊張が高まり精神生活は高揚していった。そして、手を握り泣きながら、同信協力して祖国を防護せんと誓つたのである。別れは悲しかった。然し、固く再会を約して別れたのである。

この合宿以後私と儀平君との交流は深くなっていった。特に昭和十七年四月、私が九大に入ってから突然何の予告も無く「加藤さん」と云って訪れてくることが多くなった。苦しくなったり迷ったりしてゐると察せられるのであるが、特別それを私に話すのでもなかった。たゞ、持参した米を飯盒で炊いて上手にカレーライスを作ってくれた。そして、一つ布団と一緒に寝て、一晩泊ると元気になって帰っていったのである。

昭和十七年十二月、戦地に出発する米重政行君（熊本高工卒、儀平君の二年先輩）を送った時の思ひ出がある。最初に久留米の予備士官学校に在校中の米重君に面会したのは、昭和十七年十一月末日であった。（註・『生の記念』(2)参照）当時熊本の一部隊にゐた三角信義幹部候補生、川上富貴君それに儀平君の四人が一緒であった。その時米重君は「教官として残留するかも判らぬ」と話してゐた。それが急に外地に出征することに決つたのである。その時の事情は、儀平君が米重君の妹さん宛に送つた手紙に記録されてゐる。

「直ちに福岡の加藤兄にも連絡を取り翌二十一日（十二月）に久留米に二人で参つたのであります。其の日は久留米の一食堂で壮途を祝して別れの酒を酌み交しました。話の途中でもしきりに、『亡くなった父の顔が見える様だ』と洩してをられました。互に、やがては皇軍に召される我等

の思ひを語り合ひ（中略）今こそ内外を別たぬ祖国無窮国体防護戦に戦死せむと絶叫しつつ、折から部屋に入り来る月の光を浴びて神洲不滅の合唱をしたのであります。そして直ちに壮行の歌を贈り又米重兄も出でたちの歌を三首自分に書き置いて下さいました。

八潮路の潮逆巻く海原を勅かしこみ我は出で行く

高らかに進軍の歌呼び交し今ますらをは筑紫を出で行く

吾死なば後につゞきて大君の御旗守れよとつくにの辺に

九州帝大の加藤兄直ちに之に唱和して、

南みなみの大わだ渡り進みゆく友の船路をたゞ祈るなり

自分も続いて

さきがけて出で発つ友の後継ぎて我も進まん神のまに／＼

終つて幕末志士の又万葉集の防人の歌を互に朗詠しつゝ、つきぬ思ひを語り合ひました。外出の間も残り少くなった時米重兄は明治天皇御製を拝誦し度いと申され、遙かに東の方皇居を拝みまつり、明治天皇御製を拝誦「もう思ひ残す事は無い」と云つて、一緒に店を出た」と知らせてゐる。それが私と米重君との最後の別離となつたのである。その後、儀平君は福岡、佐賀を廻つて、再び久留米に行つてゐる。二十三日いよいよ久留米を出発する直前に百武禮之君が来たことは、

「百武君の思ひ出」で紹介した通りである（註・233頁参照）。儀平君は別れ難いまゝ、に門司まで同行し米重君が乗船する迄見送つてゐる。米重君は昭和十九年三月十七日ビルマで壮烈な戦死を遂げた。その報せを儀平君が洲崎航空隊で受けたのは六月初旬であつた。儀平君は八首の慰霊の歌をつくつてゐる。

我が死なば後につゞけと高らかに歌ひし君の眼交まかひ去らず

この歌は、前述の久留米での私達の別離の宴で、米重君が残した出でたちの歌を偲んだものである。

昭和十七年十二月二十五日より二十九日まで開催した学生時代最後の合宿の思ひ出もある。合宿地は現在は八代市に編入されたが、日奈久町の喜安寺であつた。（註・『生の記念』(22)参照）日奈久は古い温泉街である。喜安寺は町から二百米程離れ、少し山道を登つた静かな谷間に建ててゐた。小さな御堂に約三十名が宿泊した。参加者は、戦死し或は病死した者六名、また戦後連絡の絶えたものもあるが、多くは現在も国民文化研究会の縁につながつてゐる。九大から私と山田輝彦、佐高より小林国男・小柳陽太郎・諸永好孝・三根淳・亀川英雄（戦死）、山口高校より堀春夫・山本多門・松井英也（戦死）、長崎高商より小泉一也、松山高商より生野守・高橋栄、

福岡高商より矢野大四郎、熊本外語専より三浦学・辻本孝一（戦死）、熊本医専より小川幸男、熊本薬専より寺村義孝（戦死）、宮崎高農より首藤雅也、そして熊本高工は吉田浩・塩田存・和多山儀平の諸君であった。合宿の指導は私があった。

この合宿では特に私は目標を「佐高同信会」の相続者養成においてゐた。高瀬伸一君は病氣の為に休学してゐた。残つた者は純情ではあるが、殆んどが同信生活の体験に乏しく、祖国を守る決意に缺けてゐる様に感じた。佐高より参加した小林・小柳君達が奮起すれば、参加者全員の精神生活が高揚し、真の交流が実現すると思つたのである。この合宿でも、儀平君は常に全員をリードする様に積極的に発言した。また、行進する時も常に先頭に立つてゐたのである。

久しぶりに友等と再会し、生活を共にする合宿であつた。自然に合宿は和やかな雰囲気の内に進出した。然し、不安は拭ひきれなかつた。予期してゐた通り、如何なる苦難にも耐へて祖国を防護せんとする決意が確認できぬのである。最後の夜、私は堪り兼ねて絶叫した。「佐高、どうしてゐるのか。こんなことで先輩達の志が継げると思つてゐるのか」と。打てば響くように、儀平君が、自らを反省し力強い前進の決意を絶叫した。その一瞬全員の精神は点火され燃焼したのである。つきつきに決意が述べられた。友の言葉に心を打たれて泣いた。泣く友の姿に感応して涙を流した。そして、期せずして全員が手を取り、また肩を抱き合つて日本学生協会々歌を繰返

し声を限りに合唱した。それは果しなく続いた。怒濤のうねりの様に全身に力が溢れ、ストームを繰り返した。遂に、本堂の床が傾いてしまった。その日の感激を回想して儀平君は、新潟県で病氣静養中の高瀬伸一君に十二月三十一日付次の様に知らせてゐる。「強烈なる体験の告白により終つた合宿を今回想してゐます。僕等の精神の世界が一瞬一瞬に動乱のまにまにあることを痛感し、ここに『しきしまの道』による統一が痛感されるのであります。(中略)小柳・諸永・小林・亀川・三根の諸兄とも泣き合ひ抱き合つて語りました。今こそ先輩によって開かれた機縁を戴きつゝ、自立せる意志によつて山口、佐賀、福岡、熊本、松山の連絡は確保せらるべしと信じつゝ、起て九州の健男兒と絶叫してゐます」と、感激を伝へてゐる。

儀平君はまことの九州男兒であつた。一度点火され、ば爆発的なエネルギーが起り、直ちに行動に移るのである。私達の精神生活は緊張・高揚と弛緩・沈滞が交錯交替する。長い緊張の連続は云ふべくして困難である。要は如何に早く沈滞から脱却するかである。儀平君は、そんな時自分だけで静思したり、内省することもあつた。然し、それよりも寧ろ自らに鞭打ち、進んで行動することによつて沈滞から脱却したと思ふのである。だから、外見は常に元氣潑刺として、意氣旺盛なる面のみが強く印象となつて残つてゐるのである。私が、儀平君の戦死の状況を紹介した際「海中で戦友を励すやうな和多山少尉の元氣な歌声を聞いた」と云ふ噂を「事実であると思ふ」

と云つたのは、この様な彼の性格を知つていふのである。

次に儀平君の「自然の歌」について紹介せねばならない。彼が昭和十八年三月頃より出征前にかけて作った数多くの自然の歌は、いづれも絶唱である。私達同年代の同信の友等の作品中でも、特に優れて光彩を放つてゐる。

儀平君の精神生活にとつて、郷土八代更には広く南九州の歴史と風土の影響を強く受けてゐたことを見落すわけにはゆかない。八代は古くから南九州の要衝の地であつた。だから、南北朝時代に南朝は八代の莊を伯耆の名和氏に恩賞として与へた程であつた。名和長年の子孫がここに移住し、その家系は現在も続いてゐる。また、後醍醐天皇の皇子懷良親王かむながが、征西將軍として八代の地に入られ御滞在されてゐる。御座所や御陵等往時を偲ばす遺跡も数多く残つてゐるのである。儀平君が出征に際し遺書を送つた大島（八代市）の伯父の先祖は、懷良親王に従つて八代に移住したと伝へられてゐる。そして南朝衰退後人里離れた大島に住みついたと云ふ。この血脈は連綿として儀平君に流れてゐるのである。

また、南国特有の明るい開放的な風土的環境が、明朗豁達且つ多情多感な儀平君の性格形成に、測り知れない影響を与へたことも注目すべきであらう。儀平君の「自然の歌」は、自らの人格を

形成した風土に対する強い憧憬の情感が生み出したものであらう。強い情感と事実を正確に把握する力とが、美事に調和して珠玉の如く結実し生れた歌である。

春霞裾すそにたなびきほのかにもけぶりて見ゆる開聞の山

海空うみそらのさかひけぶりてふきつくる風のすがしさ潮しほの香ぞする

等「春日雜詠」と題する歌は、昭和十八年三月中旬春日鉱業所に吉田浩君と一緒に、実修に行つた時つくつたものである。また、春日鉱業所より帰宅後、休む間もなく旅に出てゐる。福岡県嘉穂鉱業所等を見学後、高千穂峽、鶴戸神宮等を廻つてゐる。そして、帰途万葉集に歌はれた黒の瀬戸を見物したのである。その時作つた九首の歌は、彼の躍動する生命力が荒れ狂ふ流れ早き瀬戸を越えて、船を進める老船長の姿に托されて、力強く表現されてゐる。

隼人の薩摩の瀬戸の名に負へる早潮はやしほをこえて吾は旅ゆく

は、その時の結びの歌であつた。四月十二日作と記録されている。

更に、入隊日が決定した後、川上富喜、辻本孝一君達と一緒に天草を巡遊してゐる。同年八月九日作が「牛深を発つ」と題する歌であり「天草灘」の歌は八月十日作と記録されてゐる。また、帰途に高戸村の辻本孝一君宅に一泊してゐる。再びは帰らぬ決意で出陣の日を待つてゐた時である。故郷の島山や海原の悠久の生命を忘れじと脳裏に彫刻することく凝視した儀平君の姿が目

浮ぶのである。

真弓なす海ばらゆけばつらなれる島山はるけし暮れゆく空に

けぶりたる空にたゞよふ月影の光くだくる波のさ揺れに

等の絶唱が残されてゐる。

へさきうち砕くる波の音つぎつぎとけはしくなりゆく船おどらしつ

船夫どもが雨天の用意なさむとてせまき船内かけめぐりゆく

来し方をかへりみすれば一筋の船あとつづけりけぶれる海面に

右の三首は帰路、築島（八代市内である）を過ぎる頃より天氣が急変した際作った十一首の歌の一部である。

最後に、儀平君の軍隊時代の歌について触れることとする。佐伯基地より儀平君は対潜航空機に搭乗して帰らぬ征途に発つたのである。遺品が残つてゐたが、行方不明になつてしまった。恐らく歌も多くあつたであろう。紛失したことが悔まれるのである。然し、洲崎時代より佐伯時代に残した歌には、全て彼の全霊がこもつてゐる。特に洲崎時代の昭和十八年三月二十一日の日記は、読むたびに、強い感動が胸に溢れ、目頭が熱くなるのである。

「今朝方実に云ひ様のない夢を見た。誌すことにする。場所は母の実家、大島の海岸、軍刀を

吊つて見慣れた家の前の防波堤より降りて、これを最後と八代の家に帰らうとする時渚より母は目に涙を浮べつ、実に忘れられぬ顔をしながら『儀平さん何も思ひ残すことはないから一生懸命働いて天皇陛下の御為に死んで来なさい』と胸にすがつて泣くのである。私は万感胸に迫り云ふ術を知らず唯三首の歌を送る」として次の歌を記してゐる。本当に夢の中で作ったのであらう。

明日よりや海原越えて夷えびすらをとりにてひしがむつはもの我は

現し世の語らひ今はと立ちいづる心に残る母の面影

みどり木のときはかきはと末永くまさきくましませはしき母おとこ刀自

が、その時の歌であり、「気がつけば甲板の釣床の中」と誌してゐる。

また、佐伯基地で戦死ま近に作ったと思はれる「送出撃賦」「戦死せりととの友を偲ぶ」は、自らの出撃と戦死を弔ふ歌となつたのである。この二十首ばかりの歌は自らの運命を予感したかのやうな錯覚を与へるのである。

右手振り別れをつぐるますらを見送る心あにたへめやも

常のごとベッドの上に脱ぎおきし君が軍服見るにたへなく

海原のいづこに果つともものふの常にはあれど吾が胸いたむ

そこばくの髪手握りてはつはつに君しぬばすらむ国なる人らは

亡き友を偲ぶはかなししかれども弔ふいくさに今より吾は

これらの歌をよみ、一人息子の同期生と交替して進んで出撃した儀平君の心中を偲ぶ時、云ふべき言葉もない。

昨年は儀平君の三十三年忌であった。記念に母君は「来む春に花咲く桜見給はば吾がゆく道をしのびたまへや」と云ふ彼の遺歌を、心をこめて色紙に書かれたのである。その色紙は私達身内の者に贈られてゐる。この歌は、前述の日記の終りに、目覚めた後、見た夢を回想して作つた九首の歌の一つであつた。

儀平君は戦死したが、私の心の中には生き続けてゐる。にこやかに笑ひながら「加藤さん」否、「義兄さん」と呼んで今にも長身の姿が現れるやうに思ふのである。個人の生命は滅びても、儀平君の魂魄は、母なる祖国の胸に帰つてゐることを確信してゐる。——義兄敏治記す——

〔国民同胞〕昭和五十二年十二月号

亡き瀬上安正兄に捧ぐる弔辞

今は亡き瀬上安正兄のご霊前に追悼の思ひをこめて、お別れの言葉を捧げます。

余りにも突然な、あなたの、ご逝去の報に接し、耳を疑ひ信ずることができませんでした。あなたを敬愛した全国各地の友皆が、その報に驚き誤報であることを願ったのです。

瀬上さん、あなたは何故、このやうに早く永遠の旅に出られたのですか。私たちの前から姿を隠してしまはれたのですか。諦め切れぬ思ひで、あなたの名前を呼び続けてゐるのです。そして、あなたの在りし日を偲びつつ、現実となった永別の悲しみに痛恨の涙を流すのみであります。

まして、不慮の事態により、杖とも柱とも頼む、あなたを失はれた奥様を始め肉親の皆様のご悲歎は察するに余りあり、お慰めする言葉もありません。

せめてもの救ひは、あなたのお顔を涙ながらに礼拝した時、そこに一点の苦痛の色も見えず安



らかな眠りについてをられたことでした。そして、また、救急車に同乗してをられた奥様に手をさし伸べて最後の別れをされ、間もなく意識を失はれたと聞いたことであります。

瀬上さん、思へば、あなたと初めてお会いしたのは昭和十四年、あなたは旧制第五高等学校三年に在学中でした。それから四十年間、本当に長い交遊が続きました。然も、私たちは一つの信念、信仰により心から結ばれた同信の友でありました。ともに祖国日本の永久の存続と発展——神洲不滅を確信し、身命を捧げて祖国を守らむと誓ひ合ったのです。また、あなたは私より年長でもあり、常に畏敬し信愛する先輩でありました。私は多くの優れた同信の友に恵まれました。然し、あなた程長い歲月の間、学生時代そのままに青春期の純粋な心情を一貫して持ち続けた友

は無かったと思ひます。特に敗戦後の精神的荒廃と動乱期にあつて、私は混迷の淵に沈滞してゐました。その時も、あなたは学生時代と全く変らぬ心情を持って私を教へ導いてくださいました。あなたが居られることが、私の大きな精神的支柱でありました。特に、何にもまして昭和三十一年戦後始めて九州の大学生を集めて合同合宿を開催した時の喜びを忘

れることができません。この合宿は、瀬上さん、偏に岩をも通す、あなたの念力により実現したのです。私たちは、あなたの強靱な意志力と熱烈な行動力に触発されて奮起したのです。その後合宿は継続して開催され戦前と同じく全国的規模に拡大されました。そして合宿再開が契機となり、私たちが学生時代先輩から教へ導かれて進んできた道統を、戦後の青年達に伝へるべく結成した国民文化研究会の、あなたは常務理事として、会の運営と後輩の指導に率先して尽力されました。

ますらをのあまた出で来てにぎはしく合宿するは心楽しき

瀬上さん、あなたが昨年の合同合宿で作られた歌です。あなたは自らの栄達を願はず、ただ一筋に誠実に自らの信念を貫徹された真の日本男児「ますらを」でした。それ故に、あなたは若い「ますらを」を育成することを無上の喜びとされました。特に熊本大学の学内団体「信和会」を中心として今日まで続いてゐる学生寮「時習義塾」の創設と塾生の育成に傾注された、あなたの限り無き情熱と不断の献身を忘れることはできません。

瀬上さん、ご覧下さい。ここに参列してゐる「時習義塾」にかつて学び或は現在学びつつある多くの後輩やその友人達の姿を。これらの後輩達は、あなたを師と仰ぎ、あなたを追慕して集りました。そして今あなたの思ひ出を、その教へを回想してゐるのです。

瀬上さん、あなたの信念に満ちた鋭い眼光。瘦身にこもる峻烈な気迫。あなたから叱咤激励された思ひ出も数多くあります。同時に、あなたはやさしい先輩でした。「合宿するは心楽しき」と、

あなたは歌つてをられます。楽しい時嬉しい時のあなたの笑顔が今も鮮明に浮んできます。本当に無垢な童心溢れる笑顔でした。そして温い愛情が自然に伝はり、心が和む思ひがしたことも今は悲しい思ひ出となりました。あなたの思ひ出は尽きることもなく続きます。

名残りは尽きません。然し、愈々永別の時が近まりました。瀬上さん、本当に長い間お世話になりました。お礼の言葉もありません。

瀬上さん「生るるも身まかるも、つながるために、わかれる」ことは私たちの共通した確信でした。あなたは身まかれましたが、その魂は、私たちの共通の心の故里、永久に消えざる祖国の生命、祖国の胸に帰られたのです。あなたの遺志は、ありませし日の強烈な印象とともに若い後輩達の心に留まり、永遠に言ひ継ぎ語り継がれることを信じて疑ひません。

現世では休むこと無く努め励み給ひし瀬上さん、あなたの愛する三人の御子息も立派に生長されました。どうか安らかにお眠り下さい。そして、願はくばご遺族と私どもの行末を見守り給ひて、み魂のご加護を賜らむことを心より御願ひいたします。

瀬上さん さやうなら

合掌

昭和五十四年九月二十二日

友人代表 加藤 敏 治

(国民文化研究会理事、八代市助役)

瀬上安正遺稿集『樹間花』あとがき

——瀬上さんの四十年の御交友を偲びつつ、主としてはじめの二十年を——

瀬上安正さんと私との交友は、四十年ほど前の昭和十四年に始まり、戦争による一時中断を経て、お亡くなりになるまで続きました。長い間のご厚誼を得ましたことを、いま感慨深く回想させていただいております。

昭和十四年といへば、瀬上さんが旧制第五高等学校の三年生の時であり、私は旧制山口高商の一年生でした。その年の七月に、「東大文化科学研究会」が、神奈川県高座郡原^{はら}麻村の「無量光寺」といふお寺で開かれた全国的な学生合宿「全国学生夏季合同合宿」に、ともに参加したのが、瀬上さんといふ昵懇になる契機でありました。この主催者「東大文化科学研究会」は、後の「日本学生協会」に発展した団体であり、戦後は「国民文化研究会」（瀬上さんと共に私も常務理事として参加）に継承されて今日に至ってゐるものです。原麻の合宿では瀬上さんと私とは所属した班が別でしたので、直接お話を聞く機会はありませんでした。私達の精神的交流が本当に始つ

たのは、その年の十二月末日に、佐賀市内の「竜泰寺」といふお寺で開かれた旧制佐賀高等学校同信会の合宿に、ご一緒に参加させていたゞいた時からといへるかと思ひます。昭和十四年の後半わづか半年の間に、さきの「全国学生夏季合同合宿」が導火線になって旧制高等学校や高専校の学内に、次々に「一高昭信会」を源流とした同じやうな学内団体が結成されました。山口高商では「ス道会」が、五高では、従前からの伝統を持つ「東光会」が同じ志の団体といふことで、連絡し合ふ団体となりました。そして冬休みになってから福岡市百道ももぢにあった「青年道場」(戦後は「社会教育会館」と改名され、奇しくもこの同じ場所で「国民文化研究会」主催の第二回合宿教室が昭和三十二年の夏に開かれることにもなりました)での他の団体が主催した合宿に、五高東光会や佐高同信会などの何人かの仲間が参加し、地域的な交流が開始されました。最初は佐賀まで行く予定はありませんでしたが、福岡での合宿が終った後、そのまま別れてしまふのが名残惜しくなって、佐高の友の勧めに従って、さきの「竜泰寺」での、合宿にも、参加することになったのであります。このやうに、他校の学生たちとも「同信の友」といふことだけで、初めてあった友とも、ごく自然に合流する道が拓かれていきました。お互ひに何の気兼ねもなく集って合宿を営む学生たちの間には、学校差などの隔りは全く消え去って、祖国日本の現状と将来への深い憂念と学生としての強い責務が語り合はれる場となりました。集った学生たちの中には佐

高の天津留温さん（元建設省事務次官）古賀秀男さん（元佐賀県立博物館長）江頭俊一さん（のち東大在学中、病死）百武禮之さん（のち、東大、戦死）らの佐高勢多数のほか、五高からは瀬上安正さん、国学院の手塚顕一さん（のち、戦死）山口高商からは一條浩通さん（のち、戦死）らがをられました。また、佐高教授高橋鴻助先生のご指導も戴き、東京から駆けつけてくださった一高、東大出身の夜久正雄先輩（現、亜細亜大学教授）のご助言をいただいて、楽しく意気あがる研鑽ができました。私は、この合宿で初めて瀬上さんと起居をともにしましたが、瀬上さんの言々句々からほとばしり出る強烈な憂国の情熱には圧倒されましたし、また瀬上さんが祖国日本へ寄せられる篤信については、心から畏敬の念を抱かずにはをられませんでした。

戦前瀬上さんとは度々起居をともにしたやうに思っていました。実はこの時だけに過ぎなかったのです。然し、その後、各種会合の折など、例へば私達の学生時代にはよく東京で全国の大学、高等学校、高専校の学生たちの代表者会議が開かれましたので、そのやうな時には学生リーダーであられた瀬上さんから、いつも厳しい叱咤激励をいたゞいた思ひ出が残っています。瀬上さんの精悍な風采、颯爽とした動作、熱情溢れる弁論には、いつも注目し傾聴させられたものでした。

私が、九大に進学した昭和十七年には、瀬上さんは東大農学部を卒業されて、ご就職のあと七

レベス島に赴任されました。以後終戦後までの五、六年間はお目にかかることなく過ぎました。瀬上さんとは、時間的には、終戦後遙かに長い「おつきあひ」をいたゞきました。しかしそれでも、瀬上さんのご印象は、むしろ学生時代の方が、強く鮮明に脳裡に刻まれてゐるやうに思へるのです。それは、戦後の日本が精神的思想的に荒廃の道を進む中にあつても最後まで、瀬上さんが、かつての学生時代そのまゝに、その純粹さと情熱を一貫して持ち続けられたからであること、いま改めて追憶してをります。

終戦後、外地から戻られた瀬上さんと再会したのは、昭和二十三年頃であつたかと思ひます。当時瀬上さんは確か三菱系の木材会社に籍を置いてをりましたが、占領軍命令により会社は解散させられ、分散したいくつかの小規模な別会社ができ、その一つが瀬上さんの勤務先になつてをりました。ある日、熊本駅近くの事務所にお訪ねして、学生時代そのままの瀬上さんと、何年ぶりかの再会となつたのでした。その後、大分県の日田市に移住されるなどのことがあつて、県庁の林野関係のポストに奉職されるまでは、大変な苦難の時代が続いてをられたやうでした。しかし、さうした間でも瀬上さんは、戦死、戦病死された学生時代からの同志諸君の「慰霊祭」には欠かさず参列してをられました。

終戦後の私達の会合は慰霊祭から始まりました。「慰霊祭」といへば、私たちには忘れられない

先き逝いた方々が多くあります、その中でも特に終戦直後の八月二十日払暁、福岡市郊外の油山で、壮烈な自刃を遂げられた海軍少尉・寺尾博之さん（高知高校・東大）のことは、常に念頭を離れず、今日に至ってをります。寺尾さんは「魂魄トコシヘニ祖国ニ留メテ玉體ヲ守護シ奉ラム」と祈願されて、上司と共に自らの生命を絶たれたのであります。私たちは、そのご命日には、油山の山上にある「正覚寺」の観音堂（寺尾さんが最後の夜を過した所でありました）に一泊して、懇ろにその霊を弔ふことを毎年の大切な行事としてゐたのです。当時はバス停から石高道を三十分近くも汗を拭きながら登るほかには、行くことができませんでした。その道の周囲には松・杉等の樹木が茂り、蟬時雨が降るやうに聞えてをりました。観音堂に着くと、夜を徹して語りあひ、早朝そろって自刃の地に参拝したのであります。この慰霊祭が執行された時は、一同の年長でもあり、自然に瀬上さんがリーダーでありました。このやうな「慰霊祭」をいとなむあひだも、出る話題は個人生活や家庭での経済的な苦しさなどのことは、殆んど語られることはありませんでした。語られるのは亡き友らの在りし日々のすばらしい挙措と確信あふれる言動であり、不拔の志操への追慕でありました。同時に祖国日本のこれからの進路についての憂慮でありました。この頃は慰霊祭が心の支へであり、生きる力源でありました。

かうして二・三年が経過した昭和二十五年に川井修治さん（現鹿兒島大学教授）が鹿兒島に講

師として赴任され、私達の会合では「慰霊祭」の執行にとどまらず、若い学生たちへの素志伝達
 の場をつくらうではないか、といふ機運が芽生えてきたのであります。

そのための準備とでも申しませうか、とにかく終戦後職業も別れ、さまざまな経験を重ねた私
 達の心を整理するとともに、合宿開催の計画を練ることになりました。昭和二十八年八月二泊三
 日間、十名の小合宿を山口県の大道といふ海岸で持つことができました。大道は、現在は防府市
 に合併されてゐますが、当時は瀬戸内海に臨んだ一漁村でありました。ここは、九州・中国・四
 国の亡き友らをはじめ同信の友が学生時代良く利用した旅館も残つてをり、思ひでの地でありま
 した。次いで昭和二十九年八月に八代市の「春光寺」といふお寺での合宿には十六名が集りまし
 た。(註・104頁参照)翌昭和三十年にも八代市の「法燈寺」で十数名の合宿があったりして、こ
 れらの集積の上に生れたのが、今の社団法人「国民文化研究会」の前身の同名の会でありました。
 創立は昭和三十一年一月であり、瀬上さんのご自宅が事務所となり、瀬上安正さんと川井修治さ
 んとが実質的な創立リーダーであり、推進リーダーでもありました。お二人が居られなかった
 ならば、同年八月に鹿児島県霧島で開催された「全九州学生青年合同合宿」(「国民文化研究会」
 第一回合宿教室)(註・106頁参照)は実現しなかったとは、衆目の一致するところでもあります。
 私が身辺のことで逡巡し勝ちでありました当時を思ひ返しますと、私は瀬上さんの執念ともいふ

べき情熱に圧倒されて、ともに立ち上ったのが偽らぬ心境でありました。私に取りましても、瀬上さんは、かけがへのない先輩であられたのです。

この「合宿教室」は今年で二十五年間続きました。四分の一世紀の足跡でもあります。殊にその運営内容が「先に生しよぜんものは、のちを導き」の言葉通り、いささか年上の青年が、少し年下の青年を指導する、といふ当初からの基本姿勢が出来てをりますことは、私達の志を継承する後輩達が相続体制を作ってくれてゐるお蔭であります。これも全て亡き友らのみ霊の加護と感謝せざるを得ません。その中に新たに瀬上安正さんのみ霊も帰入されたのであります。友らのみ霊は不滅無窮の光明となつて前途を照しつづけてゐてくださるに違ひない、さう思はずにはをられないのです。終りに、生前、瀬上さんと一緒に良く朗詠した寺尾博之さんの遺歌を、ご霊前に捧げてお別れいたします。

倒れたる友を嘆かずいつの日か吾もたどりゆく道と思へば

(昭和五十六年一月)

略歷·弔辭·弔歌

加藤敏治 略歴

大正九年二月五日（一歳）父加藤久次郎、母タカの長男として広島市に生る。

大正十四年（六歳）父を亡ふ。（弟邦夫、友三郎と三人兄弟なり）

昭和十二年（十八歳）三月、岡山県立岡山第一商業学校卒業。四月、満洲電業株式会社に入社、奉天支店に勤務す。

昭和十四年（二十歳）四月、旧制山口高等商業学校支那語科に、同僚一條浩通君と共に入学（勤務会社の貸費生制度に依る）。七月、白尾陽光先生の勧めにより東大文化科学研究会（国民文化研究会の源流）主催の「全国学生夏季合同宿」（神奈川県原当麻村）に参加す。十月、校内団体「斯道会」を結成し、次いで「斯道寮」を創設。十二月、佐賀高等学校同信会合同宿に参加。同月、東京にて第一回全国代表者会議が開催され参加す。

昭和十五年（二十一歳）五月、日本学生協会（国民文化研究会の前身）結成され、七月、同会主催の全国学生合同宿（信州菅平）に参加す。八月、萩・松陰神社における中国地方合同宿に参加。十月、斯道会に対する学校当局の弾圧に際し、二度にわたり校内座談会を開催す。

昭和十六年（二十二歳）一月、山口高等学校校由道会々員と合体し「中国正大寮」を創設。二月、

萩市にて中国九州連絡会議。三月、中国地方合同合宿（松江市天倫寺）。五月、佐賀高等学校同信会々員停学処分事件。七月、全国学生合同合宿（西日本地区は比叡山坂本）に参加。

八月、中国地方合同合宿（萩市）。十月、熊本における九州中国合同連絡会議。十二月、山口高等商業学校卒業。同月、防府市正福寺にて山口合同合宿。

昭和十七年（二十三歳）一月、日本世界観大学講座（大阪）に参加聴講。二月、山口県大道村にて中国九州合同合宿を開催指導に当る。四月、九州帝国大学法文学部経済学科に入学。七月、比叡山西教寺における合同合宿に参加。十月、阿蘇移動合宿に参加。十二月、熊本県日奈久に九州山口合同合宿を開催指導に当る。

昭和十八年（二十四歳）六月、江頭俊一君逝去。八月、精神科学研究所、日本学生協会解散。十月、九州帝国大学仮卒業。出征同志学生の留守家族交流歌文集「まほろば」一号を編集発行（謄写刷）。

昭和十九年（二十五歳）一月、門司集合地にて入営（陸軍二等兵）。ハルビン 哈爾濱、ケト 旅順、ケト 氣頓（樺太）、旭川、札幌に転属す。

昭和二十年（二十六歳）五月、新京経理学校卒業（見習仕官）、大阪、広島、山口に移り、十一月、中国軍管区司令部経理部勤務を解かれ復員（主計少尉）。母と共に佐賀に仮住す。

昭和二十一年（二十七歳）二月十二日、和多山智と結婚、居を八代に定む。

昭和二十二年（二十八歳）四月、和多山商店（八代、米穀商）入社。

昭和二十七年（三十三歳）二月、和多山米穀株式会社を設立し代表取締役就任。

昭和二十八年（三十四歳）七月、旧友と共に山口県大道村潮湯旅館に合宿す。

昭和二十九年（三十五歳）七月、川井修治氏と共に広く旧友に呼びかけ、八代市春光寺に合宿す。

昭和三十一年（三十七歳）四月、小田村寅二郎氏、川井修治氏、瀬上安正氏達と共に国民文化研

究会を設立（常務理事）。八月、国民文化研究会第一回全国学生青年合宿教室を霧島に開催、

参加す。以来毎年この合宿教室は継続開催され、病気の年を除き殆んど参加して指導に当る。

昭和三十三年（三十九歳）十月、八代市教育委員に任ぜらる。

昭和三十八年（四十四歳）七月、八代市教育委員長に任ぜらる。

昭和四十一年（四十七歳）四月、八代市教育長に任ぜらる。

昭和四十二年（四十八歳）六月、岩尾豊八代市長の下、八代市助役に選任され、五十八年六月迄

助役四期を勤む。

昭和五十三年（五十九歳）二月、国文研より戦中学徒遺詠遺文抄『いのちささげて』出版さる（編

集委員）。

昭和五十四年（六十歳）十二月、家屋を現在地に新築移転し、本籍を岡山市より移す。

昭和五十七年（六十三歳）八月、慢性気管支炎等により八代市立病院に入院、九月、八代市春光

寺に加藤家の墓を建つ。五十八年三月退院、その後熊本市内の病院に入退院し、六十年十二月再び入院治療を受けしも、

平成元年（七十歳）四月二十二日、八代市立病院にて死去。母、妻、一男二女（嗣子邦泰、古閑恭子、倉林佐代子）を残す。（遺族は八代市植柳新町一―三―二。墓は春光寺に在り。）

弔 辞

四月二十二日の朝早く、先生の突然の訃報に接し驚きと共にたとへやうのない淋しさにおそはれました。

健康を害してをられたことは前から承はつてをり、御回復の一日も早からんことをお祈りしてをりましたが、余りにも早い御逝去に際会し、更めて悲しみに胸塞がる思ひでございます。

私と先生の出会ひは終戦間もないころで先生の義弟であり私の学友である和多山茂平君の引き合はせてございました。

先生は山口高商在学中から正大寮のリーダーとして国民文化の高揚運動に献身され、戦後は義弟の和多山儀平さんを初めとする戦没学徒の鎮魂に精魂を傾けられました。全国の同志と語り、国民文化研究会を指導され、若い学究たちとの合宿研修も既に三十五回に及んでゐるとききます。

不知火の筑紫の野辺に益良夫がたてし誓ひの消ゆる日あらめや

これは先生の二十才のころ、志をかひあつた御友人の格調高い歌で、先生日頃の愛誦歌でありました。このお歌には先生の処世観、人生観をまざまざと教示される思ひが致します。

先生は八代市の教育委員としてまた教育長として、また助役として三十年余り、確固とした信

念のもと溢れるばかりの愛情をもって献身されました。

その業績は岩尾市政の財政計画、総合開発計画、殊に教育行政の中に燦然と輝いてをります。名市長の誉高い岩尾市長さんとのコンビは市民齊しく讚美してやまないところでありました。道義を重んじ清潔公正な政治に徹せられたお姿は、昨今の政情をみるにつけ、先に岩尾市長さんが旅立たれそして今は又先生を送るに際し、一段と痛惜の念にたへない思ひが致します。先生はきっと、もう見てはをれんと嘆かれて岩尾市長さんを懐かしがられて旅路を急がれたのではないかとさへ思つてをります。

先生がよく言つてをられました、私の考へ方や行動が皆さんに堅い堅いと思はれるやうですが、それは私の名前が加藤だからです。市長さんの名前まで岩尾さんときてゐます。私は実際は柔軟に柔軟にと自分に言ひきかせてやつてをるのですよ。

先生の誠実さ緻密さ、高い計画性は市民の皆さんはもちろんのこと誰よりも岩尾市長さんが一番わかつてをられました。

愛国の至情にもえてをられました先生は吉田松陰先生を敬仰され、御自身歌人としても一境地を拓いてをられ、毎年の賀状をお読みすることが楽しみでなりませんでした。文章にも極めて厳しく、先生の珠玉の如きお手紙を今でも宝物のやうに大切にしてをります。私のこの弔辞もきつ

とたくさんの朱が入って返ってくることでせう。

「寒ければこもりてありしを球磨川の塘道とらみちを行く小春日和に」これは昭和六十一年の賀状のものですが、先生の愛郷のお気持が、ぬくもりと共に伝はって参ります。

今先生とお別れるに当り、限らない淋しさと哀惜の念が一杯です。しかし先生の奥様。愛郷の御精神はいつまでも私たちの胸の中から消えることはないでせう。

先生。永い間ほんとうにありがたうございました。心から感謝を捧げてお別れの言葉と致します。

合掌

平成元年四月二十四日

渡 瀬 憲 明

（平成四年現在・衆議院議員
元・坂田道太衆議院議長・首席秘書）

弔 辞

今は亡き加藤敏治さんのみたまのみ前に、謹んでお別れの言葉を申し上げます。まごころを傾け尽した御奮闘の御生涯の、その晩年に長い闘病生活がありましたことはまことに痛ましく、さぞ辛かったことと思はれ、お慰めのことばもありませんでした。何のお力にもなれず唯々申し訳なく思ひます。

加藤君、君は不思議な縁に導かれて八代に来て八代のお世話になり、八代に尽すところもあり、とうとう八代を墳墓の地とされました。不思議にも思はれますが、決して不思議ではなかったのでせう。君は和多山智子さんと結婚され、和多山翁の育みをうけて家業に出精され、やがては八代市教育長、八代市助役といふ厳しい公務に進まれましたが、元はといへば戦死された和多山儀平君との交友にその御縁の由来があつたと思はれます。それも昭和十七年、山口県大道村だいちの海辺の潮湯旅館での会合で君は初めて儀平君に会つたと書き残してをられますし、戦死された儀平君のみたまを祀る和多山家の仏壇の前に、昭和二十年といふ年、訪ねて来て長く坐って動かなくなつた人は、終戦の八月に福岡市郊外油山で自決を遂げた寺尾博之君であつたといひます。海軍少尉の寺尾君は勤務地の福岡から九州一円に出張し、八代にも佐賀にも行つたやうです。佐賀では昭

和十八年福岡の九大病院で亡くなった江頭俊一君の御遺族を度々訪問してゐますが、その江頭君の最後の三ヶ月間を枕頭で看護しつづけたのは、当時進学して九大の学生となつてゐた加藤君でありました。君の出身校であつた山口高商、それにつながる山口高校、また九州大学、佐賀高校、熊本高工等の純烈の志と篤い友情に結ばれた友人達の中心に君がゐりました。今の知識人がなぜか誤解してゐる処ですが、支那事変が始まり大東亜戦争に入つていつた頃の高専大学の学風には、日本の精神文化に対する軽蔑の言辞が多く、且つそれを不問に附する風潮が根強く瀰漫してをりました。当時田所広泰さん、小田村寅二郎さん達の日本文化研究とそれに基く時代の改革、内外の危機打開に挺身せんとする日本学生協会の学生運動を以つて、これこそがわが行く道だ、と早くから一念を起こした君は、山口を含めた九州一円に於て友を求め後継を残さうとして出征を真近にしての奮迅は目覚ましいものでありました。山口県大道とここ八代と、昭和十七年に二ヶ所で行つた夫々二十名位の学生合宿は殆ど君一人の指導によつて行はれました。私達仲間では一番おそく応召される迄の間、同信信友の留守家族の交流を願つて、刷り文「まほろば」の刊行を残されたのも君でありました。

君は終戦の年の十二月まで、山口の連隊で野戦倉庫長として残留する間、寺尾君の自刃を知り、また重態に陥つた江頭君の妹さんを見舞ふため佐賀を訪ねられました。君の御母堂のをられた故

郷岡山の実家は戦災に焼失し、意を決して君は江頭君遺族の住む佐賀に居を移し、ついで智子さんと結婚され八代に居を定められました。君が足跡を残した九州一円の同信の友とのつながりの縁のままに、君は八代に来てここに住み、ここで亡くなられたことになります。

和多山儀平、寺尾博之、江頭俊一、その江頭といつも形影相添ってゐた百武禮之、加藤君と共に満洲電業から山口高商を通じて苦楽を分かちあつた一条浩通、その他にも君にとつて忘れられない友人の数々。あの長い国難の時代、共にいのちを捧げようとした友人達の遺詠遺文集『いのちささげて』と題する正統二巻の書物が私達にあります。勿論加藤君は編集委員の一人でしたが、愈々編集作業にかかる前の十年間、家業やまた八代市公務の寸暇をさき、あるいは持病に苦しむ療養のさ中であつて、一人コツコツと資料を整理清書したのは実に君であつたのです。君を失つたいま、私達は君のこのいさをしを、ひそかにあらためて驚嘆します。戦死したこの純烈の友人達の絆であつた日本学生協会は、昭和三十一年今日の国民文化研究会として再発足しましたが君は創立時の中心人物として常務理事を担当し、戦前に劣らぬ後輩学生指導に尽瘁されました。顧みれば君は人に思ひをかけること甚だねんごろでありました。私自身は山口で君と共に学生生活を送つた頃、君の志にひかれるだけで迷つてばかりゐたのに、柔和な心でねんごろに接して下さいました。君の優しい強い眼の光は今も生き生きとそこにあるやうに感じられます。

一足先に出征する私に対して、君は寄せ書きに、明治天皇御製を謹書してくれました。「あらはさむ時は来にけりますらをがとぎし剣の清き光を」こよなく力づけられたこの大みうたは、同時に加藤君の清い眼の光を思ひ浮かばせるものでありました。

わが国、わがはらからのその味はふべき伝承の言葉と真実をひとしく信じ合ふことによつて自づから心和む一つの世界、それを先輩にならつて「一信海」と私達は言つておりましたが、君は寺尾君の三十三回忌の慰霊祭に歌を献げられました。「生き死にのけじめを越えて亡き友も我もつながら一信海に」君とのしばしの別れに際し、君の一信海の歌をありがたく思ひ出します。

お別れに臨み、謹んで明治天皇の御製を拝誦します。

あかずして暮れゆく春はあひおもふ友にわかるるこころこそすれ

願はくは君生前の願ひのごとく、わが国の立ち直りと弥栄に御加護あらんことを、御家族のお仕合せに御加護あらんことを。謹んでお祈り申し上げます。

平成元年四月二十四日

社団法人国民文化研究会 副理事長

宝 辺 正 久

弔歌

(御葬儀の折の献詠)

あな悲し神さりまししすめろぎのみあと追ふがにゆきし友はや

夜久正雄

八代の清く気高きますらをがはやいまさぬと聞くがかなしき

古賀秀男

御逝去のみ知らせかなしよき人の先ゆき給ふすべなきこの世

星野貢

合宿のをりをりみ歌をよせ給ひし大人うしのみ心現しくひやく

友思ふ大人のみ心天かけりしきしまのみちに高なりひやく

よのかぎりしきしまのみちにつとめましゝますらをの姿我は忘れじ

関正臣

靖国のみまつりの日にかむさりし護国の神とあふぐ君かも

加部隆三

若き日に国のゆくてを案じつつ共に学びし君逝きしかああ
みんなみの里に住居を定めしより九州合宿に君はつくせり
よき歌を作りませしと感じをり寄せましし歌よみゆくたびに

香川 亮 二

今生にまた相見むと願ひしにかなはずなりしかなしきしらせ
たらちねの母上よまた家人よ心つよくませとただに祈りまつる
ひねもすを降りつづきたる雨の音やまずしき降る夜に入りても（二十三日夜）
君をまもり集ひますらむ通夜のさまはるかに偲びぬ雨を聞きつつ
先ゆきし友らうち集ひ語らひてあらむかと思へば安らぐ心
われもまたともに語らむその日までつとめむと思ふ君偲びつつ

長内 俊平

もろともにたすけあひつつ来し友の逝きてたづたづしゆく手の道は
よき友のまがの病ひにいたづきこしこらのとしつき胸はれざりき
天かけりみたまゆけどもをりをりはあまくだりきて導き給へ

球磨川のつつみの上に立ちつくし語りしむかしおもほゆるかな
火の国の海にただよふしらぬひも君がかたみとおもへば泣かゆ

倉前義男

まなじりを挙げて時世ときよを嘆かひしうら若き日の君が面影

山田輝彦

病みまして逢ふすべもなきいくとせを君偲びつつ過し来にしを

春たけて花きそひ咲く時にして君いまさぬかこのうつし世に

わだつみのうしほのごとくわが胸に寄せくるなげきせんすべもなし

国思ひやから思ひて生きつぎし君眠りませ今は安けく

森田維佐男

あまりにも悲しきしらせにしまらくは頭しびれしなす術しらに

はからずも一條さんの御遺族に残せし美文は遺稿となれり

親鸞の信より祖国礼拝への道ゆきまし、まごころの文よ

山口の学寮よりの続きたる奇しき縁のつながりを思ふ

四十有八年前か学寮に御製拝誦つとめし日々は

風荒む満州平野の部隊にて過番士官の君と遭ひける

掃雲の太刀佩き共に軍歌いざな高うたひ駆けし若き日のありき

敵しかる市政の助役つとめませる君が臨終いまはの何ぞ痛ましき

うつそみの命絶ゆともみ国守る君が願ひの消ゆる日あらめや

天路澄む月影見つつみ空ゆくみ魂偲ばむ今日より後は

徳 永 正 巳

永らくも苦しみましたしうつせみのしがらみ離ち君逝きましたし

大君の辺に馳せゆきてこまやかに仕へましました心置きなく

かがふりし教へのままにあと継ぎて仕へまつらむ新しき御代に

面影は生けるが如く笑みたまひ静かに世のさま語り給ひぬ

瀬上の大人に続きて大人もまた神去りまして我一人居る

人の世のはかなき旅路つれだちて歩み来たりし日々の偲ばゆ

小 柳 陽 太 郎

ああつひに君逝きましたぬ若き日ゆ兄と慕ひこし君逝きましたぬ

燃えささかるかゞり火の中雄叫びし遠き日のおもひ今のうつつに

歌 甲

きびしくも叱咤したまひしみことばにいのちめざめしかの日忘れず
ゆらぐいのちゆらぐがまゝにそが中を貫く信を説きたまひにき
戦ひに逝きし友らをひたぶるに恋ひつゝ、かなしき世を終へましぬ
苦しかる病の床にいくたびか友の名呼びて哭きたまひけむ
友を思ひ友を恋ひつゝ、身をこがすおもひに一世終へましにけむ
苦しかりし月日はすぎてやすらかにたゞやすらかにねむりませ君
かくり世になきみ友らと久々に語らふ君かゑまひ目に見ゆ
うつし世とかくり世のけじめ消失せつゝ、たゞ恋ひまさる君がおもわを

小林 国男

いたましき長患ひに伏せませし大人はも悲し遂にみまかる
奥様のながのみとりのかひもなく大人みまかるときけば悲しも
息の緒の絶ゆる間際もたくましき大人はも氣力ふりしほりけむ
先帝さまのみかど神去りまして大人もまたみまかりましぬわれら残して
若き日の獅子吼の姿ほがらかのやさしき姿忘れえぬかも
萬難を己おのれに課してたちろがぬ深き思ひに生きし大人はも

つゝじいま枝もたわゝに咲きぬれど大人いまさずと思へば淋し

名越二荒之助

日の本の心に生きしますらは今のほります高天原に

松吉基順

君しぬびみ靈安かれと手あはすれば身ぬちのふるへしばしやまずも

あな悲し語らひなごみし在りし日の君の笑まひのうつつに浮びつ

久々に語りあはむとかくり世の亡き兄君の迎へますらむか

田口讓二

テキパキと繁雑な事務こなされし先輩のこと偲びまつれり

同郷のよしみをもちて合宿のたびにみ言葉かけくれ給ひし

雲がつしゆく仙合宿の打ち合はせしつっこまごまと記せしノートをみせ給ひしに

澤部寿孫

うつし世はかなしからずやかかけがへのなき師の君の神去りまして

おやさしきみ姿み顔は会へずして月日は経れど今もうつつに

先なるは後を導きとみ言葉に教へを受けしこと忘れぬや

甲 歌

師の君のみ心しぬびひたすらに生きむぞと思ふ至らざれども

小野吉宣

このしらせかなしく聞きぬありし日のやさしきゑがほうつつ浮ぶも

掘田真澄

師の君のたふれたまふと熊本の友らのなげきいかばかりかも

切々と語りたまへる師の君のたかきみ声のひびきくるがに

東兼光

後なるをみちびきたまひし先生のゆかれしことの信じられずも

大君のあと追はるることくゆきませるみたま安かれと祈りまつらむ

福田誠

師の君の御情受けて営みし合宿のことども思ひ出さるゝ

御軍に先逝き給ひし御友らを声をつまらせ語り給ひき

暖かき御情賜ひし師の君を偲びて生きむ他に術なし

葬儀のあと

宝 辺 正 久

春されば球磨川土手を君と共にゆかむと言ひしをむなしくなりぬ
大君のかくれまし、時ものいはずうたはずひとりいかにありつらむ
いかばかりかなしき病ひにありけむをなすすべ知らずわれはありけり
江頭をみとりし時は江頭の名を呼びたてし君にてありしを
亡き友をするどく呼びしことありきと聞けば涙のとゞめかねつも
球磨川の水面朝日にかゞやきて流れゆくかも君在るごとく

(平成元年九月二十三日興風会慰霊祭献詠より)

小田村 寅二郎

新しき三柱^{みはしら}の御霊あはせ祀ることとはなりぬ今日のみ祭り
三柱^{みこと}の命のみ姿まなかひにしるけく浮ぶみ声も聞くがに
み国守^もるただ一筋に生きませし尊きみあとひたにこほしも

(三柱の命 小山吉之助之命、加藤敏治之命、吉川悦司之命)

加藤敏治兄の初盆に参りて

山田輝彦

八代と聞けば悲しも友二人先逝きましてわれは残りぬ

語らはむことあまたありひとときをせめて語らむ友がみたまと
心病むまでにおのれを責めましし君眠りませ今は安けく

香川亮二

さきの帝神去りまししこの年のみ霊祭りの日の近づきぬ

みあとしたひゆくが如くに亡き数に入りにし友よたたかひを終へて
面影はまなかひにありなつかしき声耳底にいまだ残れど

宝辺正久

亡き友の数そふみまつり近くして夜毎いかづち鳴りとよむなり

稲妻の遠く光れば鳴く虫のいやしくしくに友しのぼるる
まごころをつくしし人のみちびきをこひのみまつる新しき御代に

徳永正巳

大君の辺に死なむとぞ思ひ来し日々も過ぎゆき世の様変わりつ

世の様も変り来りて憂ひのみつのる日毎を如何にか生きむ

加藤大人瀬上大人も天降りまして示しましませ我生くる道
残されし現世の務果さむと誓ひて生くる日々悲しき
若さらに伝へむ念ひつのりきて門立つ朝の風爽やかなり
秋立ちて顔に涼しき朝風にはげまされつつとめゆきなむ

坂 東 一 男

巢立つ日に親友と訪ねし八代で国守る心説きし大人はも
合宿に集ひ後輩や我が子にも語りつたへむ大人のみこころ

三 宅 将 之

その若き学びの日々を吉備の国で過せしとふ大人神去りましぬ

黒 木 林 太 郎

笑み浮べ静かにしかしきつぱりと先師の道説くみ姿思ほゆ

合 原 俊 光

み数へをみ声を慕ひわが先輩と訪ねまつりしそのかみの日よ

囲炉裏べに座してうま酒賜はりし夕べを想へば胸せまりくる
戦ひに斃れたまひしみ友らを偲びたまひつつ語り給ひぬ
国を想ひ友を想ひて生くる道のうつつの姿仰ぎ見しかも

小原芳久

彼岸花庭に見つけし今日の朝失せにし大人の面影浮びく

鏝 信弘

師の君の造りて下されし合宿所に友らと集ひし日々偲ばるる
澄める眼まなこうるませ給ひ亡き友の思ひ出われらに語り給ひし
現し世を去り給ふとも面影はわれらに生きて導き給ふ

久米由美子

八代のレストランにて若きらと食事し給ひし師の君忘れず

頑張れと我が手を両手で握りしめ励まされし時の思ひ出さるる

平田裕英

目にふるる山々青く連なりてはや秋風の吹きそむるなり

(加藤敏治之命夫人)

加藤智

はろばろと家をはなれて旅ゆかむ君いますがに思へてならず

あとがき

(一)

(社)国民文化研究会・副理事長 宝 辺 正 久

加藤敏治さんが亡くなって三年目が来る。漸く君の遺稿集を、君と共に歩んできた社団法人国民文化研究会の名において、作り、君の御霊前に捧げるのは、些か受けた御恩に報いることが出来るやうな気がして感深いものがある。またお元気に九十歳を超えてをられる御母堂の手に取って戴けるのも、よかったと思ふことである。

九大時代を通じて同じ下宿で学んだ山田輝彦氏が「はしがき」に書いて下さった文章は鮮烈な響きをもつ祝詞(のりこと)である。もう何も加へることはない。

私は加藤君の遺したものは、そんなに沢山はないと思つてゐた。戦前の日本学生協会の学生運動の、中国九州におけるリーダーの唯一人の生き残りで、戦後の国民文化研究会に教育改革の志を引き継いだ人の、消えざる言葉とおもかげを、是非残したいとは友人一同誰しも当然に思ふ事だったし、ましてあんなに苦しんで亡くなった友の霊を慰めたいと願ふのであつたが、さてどれ

だけのものがあるだらうか、といふ懸念があった。

昭和五十三、四年に国文研から「戦中学徒・遺詠遺文抄」として『いのちささげて』正統二篇が出版されるに就いては、その十年前から加藤君がそれら友人の遺稿整理を始めてゐて、五十二年には友人の思ひ出を克明に書き綴つてゐた。（『月刊国民同胞』、昭和五十二年中に五回掲載）それが先づある。

加藤君の家には立派なアルバムがあった。私達がそれを懐しんで見入るのを、彼は側からうれしさうに見てゐたのである。その写真帖は出征前万感の思ひをこめて作られたもので『生の記念』と名付けられ、書き込まれた文と歌は、そのまゝ、自撰の歌集であり、文集であつた。これも遺稿集に入れるべきだ。

学生時代のものは、中国正大寮の連絡報「神州不滅」が少しある。ほかに中国正大寮発行の出征同友歌集「若桜集」、出征前、加藤敏治編集の中国九州同志並びに留守家族交流誌「まほろば」があつた。戦後、国文研発足後のものは、「月刊国民同胞」「青砥通信」「興風会慰霊祭献詠」「合宿教室感想文集」等から收拾することができた。毎年の年賀状には数首の連作短歌がいつも認めであつた。

新しい資料を見たのは、葬儀のあとの重なるお疲れに堪へながら遺品を整理された夫人から、

それをお預りした昨年晩秋の頃であった。前期の「若桜集」「まほろば」の後を受ける時期の『従軍歌集』があったのだ。小型の大学ノートで、表紙に「日記・従軍歌集（其ノ一）自昭和十九年一月十七日、加藤敏治」とあり、最初の頁に「これを拾った方は必ず左記の所に御送付下さい。大日本岡山県岡山市小原町三六 加藤敏治」と書いてある。横罫縦書き。ノートの終りは昭和十九年五月の末頃であらうか。（其ノ二）以降はない。

昭和二十一年二月、和多山智子さんと結婚して直ぐ、八代から単身大阪に行ったのは、軍隊時代の佐藤さんといふ部下を頼って商業を見習ひ、事業を企画しようとしたのであるが、その頃の詩歌を書きこんだものは、手帖のやうな小さいノートで、黄色く変色してゐるが、敗戦直後の一時期を表はす貴重なノートであつた。

もう一つの新しい資料は、昭和五十八年三月に稿を起してゐる『病中病後の歌』と題した大学ノートで横罫縦書きである。

加藤君の病氣経過を省みると、元々喘息を持ってゐたのだが、五十年十二月から五十一年七月まで入院治療を受けたのは肺氣腫であつた。時には呼吸困難を訴へ、「再びは立つこと難し」と嘆いた程であつたのに、病院から登庁することも屢々であつた。幸ひに退院叶ひ、以後五十一年を除いて五十六年迄、合宿教室にも参加することが出来た。

五十七年八月病再発、九月入院。「結核に感染したことも重って肺機能の低下が著しい。完全な安静が最良だがさうも出来ず……」「慢性気管支炎と肺気腫の方がなか／＼好転しない。夜中、朝方、晩と排痰の為吸入器を掛けると咳や油汗が出て体力を消耗する。一つは市政の中で大きな課題が生じ、入院中も八割以上は登庁せざるを得ない状態が続いたのも影響があったのではないかと思ふ」(57・12 宝辺宛)。一方この間、「心の病ひ」と歌に詠んでゐるやうな症状を自覚して深く煩悶し、一進一退を繰り返した。五十八年六月には助役を退職し、五十九年九月には退院もできた。徹底治療と再起のために転地入院のことが真剣に考へられたのもこの頃であつた。更に看病に献身された夫人が肝臓を痛め六ヶ月間も入院されるなどあつたが(六十年六月退院)、奇跡的にこの間を凌いできた。

再び入院したのは六十一年六月、「心配いらぬ」と電話してきたり、しっかりした文字だ、と小田村さんも喜ばれるやうな葉書を差し出したりの事もあつたが、次第に心身共に疲労し衰弱して、最期に至つたのであらう。加藤君の意を体して、六十二年八月には夫人と長男邦泰君が油山慰霊祭に、六十三年九月には二人のお嬢さん、恭子さんと佐代子さんが東京慰霊祭に参列されたのは、些か加藤君を安堵させるものがあつたと思ふ。

本書の書名を「生の記念」とし、その題字揮毫を加藤君が初心の時から終生に互ってお導きをしたゞいた先輩、小田村寅二郎理事長にお願ひした。書名は、出征前に作った写真帖に自ら名付けた「生の記念」をそのまま、活かすことにした。元々この題は、三井甲之先生の詩集『祖国禮拜』の巻頭にある同名の長詩（明治四十四年作）を意識して加藤君が使つたに違ひない。

「晴れたる空に二つぶ三つぶの雨ふる如きおとづれありき。」

といふ書き出しに始まる詩である。友からの文ぶんに開かれる思ひを歌つた詩であつた。「充実せる生命はあふれて無窮に觸れなむとしき」に終る詩であつた。友との交はり、その感動で貫かれた加藤君の生涯であつたと思ふ。

先にも觸れ、本書中にも何度か引用されて出てくるが、加藤君が最も有力な編集委員の一人として刊行されてゐる『いのちささげて―戦中学徒・遺詠遺文抄―』正統二篇について附記しておきたい。加藤君が昭和四十二年四月、八代市助役に就任する前半年間の無職時代に、田所廣泰先輩の書簡をはじめ、亡き友人達の遺稿整理に集中的精神的に盡瘁し、更にその後も公務の余暇、病中の小康を縫つては心血を注ぎ続けたその努力が、五十三年二月の刊行につながつたことを思ひ出すのである。本遺稿集と併読されることを願ふものである。

国文研叢書 No. 19 『いのちささげて―戦中学徒・遺詠遺文抄―』新書版四五〇頁

国文研叢書No. 20 『続いのちささげて―戦中学徒・遺詠遺文抄―』新書版四二二頁

函書共、国民文化研究会発行。頒価各九〇〇円、送料二一〇円

古い時期の、加藤君から受け取った書簡を、早くからとりまとめて送って下さった理事長。既往印刷物の中から逸速く、関係のものを抜萃して送ってくれ、編集原稿に詳細な意見を附けて下さったりした長内俊平氏。香川亮二氏は参考写真を送ってくれて進行を見守って下さった。夫々の御厚意に対し深謝するものである。資料の撰択、編集、校正については、小柳陽太郎氏との共同作業であった。

(二)

国民文化研究会・副理事長 小柳陽太郎

加藤さんのことを思ふ時にいつも私の心に浮ぶのは、黒上先生の御本の中で、飛鳥時代の佛像について述べられた御文章の中の次の一節である。

「その光背の火焰の揺らぐが如き生きたる力、またその尊容の朗らかにしてかなしき緊張をたふる微笑との対照は、永く太子を中心とする時代の精神生活を象徴するのである。」

旧制の佐賀高等学校の二年生の時、私は同級の高瀬伸一、小林国男兄らの導きによって当時福岡にをられた加藤さんに御目にかゝる機縁をもつことが出来た。その時から五十年、長い月日は流れ、遂に加藤さんは世を去ってしまはれた。だが今もなほ加藤さんを偲ぶとき、常に蘇るのは、若き日にすべての情熱を傾けて、くりかへし読んでいたゞいた、この黒上先生の御文章の一節であり、とりわけ「光背の火焰のゆらぎ」と「かなしき緊張をたゝふる微笑」といふ御言葉である。日本の文化といふのも所詮はこの「ゆらぐいのち」と「かなしき緊張」に究極されるものである。戦時中、日本精神をめぐる論議はかまびすしかったが、この一節にまさって私の心を動かしたものはなかった。聖徳太子から黒上先生へ——その日本の歴史を貫くいのちの流れを、私は加藤さんといふ希有の人格を通して実感させていたゞくことが出来たのである。私のささやかな人生の歩みはここに始つた。私はいつか加藤さんを兄君と慕ふ歌を詠ませていたゞいたことがある。たしかに「兄さん」と呼ぶのにはあまりに厚かましいことかも知れない。しかし先達と呼ぶには何か固苦しいし、矢張り血の通つた兄といふおもひでしか呼べないやうな氣がする。

だがこのたび遺稿集の編纂を手伝はせていたゞきながら、戦後の混乱の中を、さらに晩年の苦しかった御病氣の中を生きぬいてこられた、その折々に詠まれた数々の絶唱にふれながら、加藤

さんの七十年に及ぶ人生、それはまさに“いのちのゆらぎ”と“かなしき緊張”といふ、黒上先生のお言葉さながらの人生であったことを、いましみくと思ふのである。加藤さんはその一生を文字通り、ひたむきに生きてこられた。しかしそこには常に“いのちのゆらぎ”があり、“かなしき緊張”があった。さればこそ、あのきびしいまなざしとともに「微笑」が失はれることがなかつたのである。

この遺稿集の中にも書きとめられてゐるが、学生時代、たぢろぐ私達を必死のおもひで手もとに呼び寄せようとする加藤さんの姿があった。しかしいま改めてこの遺稿を手にとつてつぶさに味はつてゆけばゆくほど、今もなほ到底及ぶことの出来ない加藤さんのきびしい人生の姿に、たゞく息を呑むやうなおもひがする。

加藤さんを兄君と慕つて五十年、——それにしてはあまりに拙い我が身であった。だがいまこの一冊を手にして、改めて学生時代の初心にかへり、再び加藤さんの導きのまゝに、新たな人生を歩みはじめたいと思ふ。

平成四年四月二十日

一、〇〇〇部

頒価一、七〇〇円

送料二六〇円

生の記念

— 加藤敏治遺稿集 —

発行人 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七丁目一八(柳瀬ビル)

電話 〇三三三・五七二一・五二六・七七

印刷所 有限会社 長府印刷所

下関市長府南之町四一七七



